

令和 6 年度

四天王寺大学

四天王寺大学短期大学部

F D ・ S D 報告書



編集・発行 ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会

スタッフ・ディベロップメント(SD)委員会

発 行 日 令和 7 年 3 月 31 日

目 次

第 1 章

令和 6 年度 FD 活動の取り組みについて	1
------------------------------	---

第 2 章

令和 6 年度学生による授業評価アンケートの実施結果	7
----------------------------------	---

第 3 章

各学科・専攻・コースによる FD 活動について	14
-------------------------------	----

第 4 章

本学における仏教教育について	119
----------------------	-----

第 5 章

学生支援センターが取り組む学修支援について	127
-----------------------------	-----

第 6 章

SD 活動の取り組みと今後の課題	133
------------------------	-----

規程

- ・ ファカルティ・ディベロップメント委員会規程 ……134
- ・ スタッフ・ディベロップメント委員会規程 ……135

第1章 令和6年度FD活動の取り組みと今後の課題

1. 高等教育推進センターの設立

令和2年からの遠隔授業導入に伴い必要性が増すICT教育の充実化や、基礎教育の改善等を実施するため、令和3年4月1日付で高等教育推進センターが発足し、センター専任教員・兼務教員と高等教育推進課事務職員が協働して教育改革を推進している。

FD活動については、令和2年度までは教務部が担当していたが、令和3年度より高等教育推進センターが担当し、本学のFD活動を推進していくこととなった。

2. 令和6年度の取り組み

(1) 学修成果の可視化

いわゆる「三つのポリシー」の作成・改善や学士課程プログラムの改訂には、学修成果の評価をもとに進めていく必要がある。そのためには、学修成果の可視化が不可欠であり、次のような調査・アンケート・アセスメントテスト等を実施している。これらの結果については、全教職員が閲覧できるようIBUポータルに掲載している。

① 学生調査

文部科学省は、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（平成30年11月26日中央教育審議会）、「教学マネジメント指針」（令和2年1月22日中央教育審議会大学分科会）等を踏まえ、令和7年度以降、全国学生調査（本格実施）を実施することとしている。令和6年度は、令和7年度以降の本格実施を見据え、調査方法等の骨格を定めるべく「全国学生調査（第4回試行実施）」を行うこととした。

本学においては、従来から「全国学生調査」に準じた設問（一部選択肢を変更）を設定し、本学の独自設問を加え、全学生に「学生調査」を実施している。令和7年度は、文部科学省の主旨を踏まえ、「全国学生調査（第4回試行実施）」に設定されている設問を取り入れ、本学の設問は残しつつ実施した。また、キャリアセンターの要請により「インターンシップ等の参加状況について」を問う設問を新たに設けた。

調査は、冬学期の12月6日から12月28日の期間、全学生に対してwebで実施した。回答率は大学（53.1%）、短大（89.9%）で、前年度と比較して大学は13.3%のダウン、短大は2.1%のアップであったが、インターネット上で回答率を公表している他大学と比較しても高い数値で推移している。

学生生活や学内施設・学生支援に対する満足度などを含めた総合的な調査だが、学修成果に関しては各学科等の教育目標達成度を測定・点検している。また、令和4年度より多くの学生や教職員が閲覧できるよう学内HPにおいて結果を公開している。

調査結果については、大学運営会議等でも報告され、各学科に対して授業時間外学習時間の改善策の検討を依頼した。今後も多くの学生の回答を得るため調査時期・期間、学生への周知方法、設問の設定等を必要に応じて改善する。

② PROGテスト

PROGテストとは、社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を、実践的に問題を解決に導く力の「リテラシーテスト（知識を活用して課題を解決する力）」と、周囲の環境と良い関係を築く力の「コンピテンシーテスト（経験を積むことで身に付いた行動特性）」の2つの側面を測るテストで、学修成果を把握・点検し学生指導や授業改善に活かしていくことを目的に実施している。

令和4年度までは「リテラシーとコンピテンシー」の両方のテストを実施していたが、令和5年度より「コンピテンシーのみ」を実施することになった。主な理由としては、コンピテンシーと社会人基礎力是对応しており、社会的な場において成果を上げる資質・能力といえるためである。

③ 新入生アンケート

入学直後4月のオリエンテーション期間中に新入生に対して実施している。設問は全学部・学科共通設問、学部・学科等の独自設問で構成されている。内容としては入学時点での学習習慣、大学への期待・不安や、受験・入学に至るまでの行動等に関する調査・分析を行っており、アンケート結果は教育改革推進本部会議等でも報告される。

当年度の新入生の傾向を知り、どのような教育や支援を行えばいいのか参考にするだけでなく、入学者の傾向を把握し、今後の学生募集の改善や教育の質向上のための重要なデータとして活用している。そのため、毎年必要に応じた設問の改訂を行っている。回答率は大学（97.2%）、短大（98.6%）で、ほぼ例年並みであった。

（2）学生による授業評価アンケート

学生への授業評価に関するアンケート結果は、第2章で詳しく分析されている。平成30年度までの学生アンケートは、各教員の授業改善の意識を高めるために、夏学期と冬学期の2回、担当する科目の中から1科目だけ選択し実施してきた。なお専任教員については、各学期で第1期と第2期の2回に分けて実施、非常勤講師については第2期の1回のみ実施してきた。また、教員個人が授業改革に取り組んだ結果として、リフレクション・ペーパーの提出を求めてきた。

令和元年度からは、名称を「学生アンケート」から「授業評価アンケート」に改め、学生が所持するスマートフォンを活用し、IBU.netを通じて全科目（一部科目を除く）について授業評価アンケートを実施している。

令和6年度の回答率については、夏学期は大学 55.6%（昨年度 55.72%）、短大 69.5%（74.89%）で、冬学期は大学 50.6%（昨年度 53.07%）、短大 63.7%（65.18%）であった。夏学期・冬学期とも回答率は、インターネット上で公表している他大学の回答率と比較しても高い数値で推移しており、多くの学生が熱心に回答してくれたようである。なお、令和4年度より多くの学生や教職員が閲覧できるよう学内HPにおいて結果を公開している。

（3）相互授業参観

従来、毎年11月～12月にかけて「相互授業参観」を実施していたが、冬学期開講科目のみ対象となっていたため、令和6年度より、夏学期・冬学期を交互に隔年で授業参観することとした。令和6年度は夏学期の6月に実施し、原則として全専任教員は参観対象の授業をひとつ届け出て、参観対象授業一覧が全教職員に公表される。専任教員だけでなく非常勤講師、事務職員も希望すれば授業を参観できる。参観者は授業担当者に参観コメントを提出し、授業担当者はそのコメントを今後の授業の参考とすることができる。また、授業によっては合評会が行われ、授業担当教員は教職員らの意見を聴取し、授業改善に活かすことができる。なお、令和6年度は大学で115授業科目、短大で17授業科目が相互授業参観として公開され、多くの教職員が参観し授業改善への参考とした。

（4）FD研修会

①FD（・SD）研修会

令和3年度までは、FD研修会と事務局全体研修会（SD研修会）を別々に実施していたが、教育職員・事務職員が連携して今後取り組むべき課題を発見し、社会の変革に対応し、時代に則した教育を展開できる能力・資質を向上させることを目的とする教育職員・事務職員を対象とした「FD・SD研修会」を令和4年度より開催した。令和6年度は、令和6年9月および令和7年2月に合計2回の研修会を実施したが、うち1回は「FD・SD研修会」として実施した。

	令和6年度 FD・SD研修会	令和6年度 FD研修会
実施方法	対面による研修会	オンデマンド動画視聴による
テーマ	「これからの大学が生き残るためには～大学ジャーナリストの現状分析と提言～」	「初年次教育サイト集の利活用について」
講 師	大学ジャーナリスト 石渡 嶺司	四天王寺大学 文学部日本学科 准教授 麻生 迪子
対 象	教育職員（専任教員・特任教員） 事務職員（専任職員、有期・ 無期職員）	教育職員（専任・特任教員）
実施日時	令和6年9月10日（火） 14：30～16：30 ※質疑等含む	（オンデマンド動画配信期間） 令和7年2月21日（金） ～3月14日（金）

（5）教職員合同研修会

①令和6年度冬学期合同研修会

令和6年9月13日（金）13時30分から16時30分までの時間枠で、全教職員参加の合同研修会を実施した。前半は「坂本常務理事の挨拶」「須原学長の学長方針」「原田学長補佐等からの発表」を中心に、後半は「各部署からの発表・連絡」等で構成されている。

○プログラム

<前半>

1. 坂本峰徳 常務理事 「挨拶」
2. 須原祥二 学長 「学長方針」
3. 原田保秀 学長補佐 「四天王寺大学リブランディングプロジェクトの発足について」

<後半>

4. 各部署からの連絡

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| ・浅田昇平 教務部長 | 「冬学期および次年度の授業運営等について」 |
| ・伊達由実 学生支援センター長 | 「学生支援センターからのお知らせ」 |
| ・隅田孝 キャリアセンター長 | 「令和5年度の振り返りと令和6年度に向けて」 |
| ・東隆史 アドミッションセンター長 | 「2025年度入試 総合型選抜の状況について」 |
| ・鈴木正明 学術情報課長 | 「ビブリオバトル開催について」 |

②令和7年度夏学期合同研修会

令和7年3月28日（金）13時00分～15時40分の時間枠で、令和7年度の新着任教職員を含む全教職員参加の合同研修会を実施した。前半は、開会に先立ち、人事課より「新任教員・事務職員の紹介」があり、次に「坂本常務理事の挨拶」、「須原学長の学長方針」、「原田学長補佐から四天王寺大学リブランディングプロジェクト中間報告」があった。後半は各部署から発表が行われた。

○プログラム

<前半>

1. 坂本峰徳 常務理事 「挨拶」
2. 須原祥二 学長 「学長方針」
3. 原田保秀 学長補佐 「四天王寺大学リブランディングプロジェクト中間報告」

<後半>

4. 各部署からの連絡

- ・浅田昇平 教務部長 「令和7年度授業の運営について」
- ・木村雅則 教職教育推進センター長 「令和6年度教採報告及び学校インターンシップ並びに教育実習の現状と課題」
- ・丹羽智美 学生支援センター長 「学生支援について」
- ・隅田孝 キャリアセンター長 「就職状況と就職活動についてのお願い」
- ・東隆史 アドミッションセンター長 「2025年度入試の結果と今後の取り組み」

（6）ベストティーチャー賞表彰

学生から高い評価を得、教育改善等に取り組んでいる教員に対して、その功績をベストティーチャー賞として表彰し、その取組みを広く周知することにより、教員の意欲向上及び教育の

質向上を図ることを目的し、令和5年度から専任教員を対象として実施している。

受賞者選考にあたって、学長・副学長・学部長等を含む委員によって構成されるベストティーチャー賞選考委員会は、授業評価アンケートにおいて、履修登録者数の多寡による授業規模別に、高評価を得た教員を候補者として選定し、書類審査により受賞者を決定する。令和6年度も、中小規模授業（履修登録者数15名～69名）、大規模授業（履修登録者数70名以上）において、選考委員会の厳正な選考を経て、学長賞各1名、優秀賞各2名が選出され受賞者を決定した。

第2章 令和6年度学生による授業評価アンケートの実施結果について

1. 授業評価アンケートの実施方針

中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（2008（平成20）年12月24日）において「学生による授業評価の結果は、業績評価の指標としての信頼性に課題もあるが、教員の自己評価や職能開発の活動に生かすことは重要であるとする」（p.40）と指摘され、授業評価の教育面への活用が求められている。

本学が「授業評価」活動をどのように行ったかを説明する。本学では、これまでにPDCAサイクルによる改善を目ざしてきた。すなわち、授業を計画[P (Plan)]し、実施[D (Do)]し、確認[C (Check)]し、改善[A (Act)]するというPDCAサイクルによる授業改善を進めてきたのである。大学の授業の場合、シラバスが授業の計画(P)になり、授業を実施(D)し、途中で教員と学生の間で教員は学生から見て授業が適切にわかりやすく実施されているか、学生は授業に積極的に参加しているかを相互に確認(C)しあうことになる。ここで確認した結果をもとに教員と学生の双方で改善(A)し、学生の学習内容の理解がさらに進み、単位の修得へとつながることを目指してきた。学生アンケートは、(C)に該当するもので、学生の授業参加度とともに授業が学生から見て適切にわかりやすいものかを確認するものである。本学では、2006（平成18）年度に学生アンケート委員会を設置し、学生アンケートの計画・実施を行った。その後2008（平成20）年度に学生アンケート委員会からFD委員会に発展的改組を行い、以降についても試行錯誤しながら学生アンケートを実施してきた。このような試みの中、全学的な授業改善に向けた教育評価を実施する上での枠組みとして、2010（平成22）年度には、授業を実施する前の診断的評価、途中の形成的評価、最後の総括的評価という評価の活用方法について検討してきた。すなわち、診断的評価として、プレースメント・テストや第1期学生アンケート（2回目の授業時）の実施、シラバスの内容の充実、そのシラバスの内容を受講生に理解させるための試み等を実施した。その他、形成的評価として7、8回目の授業時における第2期学生アンケートの実施、学習成果に関する中間テストの結果や学習者による自己評価の結果の活用、教員相互の授業参観による同僚評価等を行った。最後に、総括的評価として、授業に関する情報収集や授業に対する学生の評価や意識の測定のための第3期学生アンケート（14、15回目の授業時）の実施、定期試験やレポート等による学習面の成果の把握を行ってきた。2010（平成22）年度だけではあるが、3回の学生アンケートを実施することにより、教員に対する授業概要（シラバス）の重要性と学生への理解促進に向けた取り組みの意識付けを行った。特に、診断的評価においては、1年生入学時のプレースメント・テストの実施、シラバス内容の充実化、各授業のオリエンテーション時に授業担当者が授業概要（シラバス）の内容を受講生に周知徹底することを進めてきた。また、質問内容についても、中央教育審議会答申を踏まえて改善を行ってきた。中央教育審議会2012（平成24）年8月28日「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、学生の学修時間の実質的な増加・確保が、教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授

業計画（シラバス）の充実、全学的な教学マネジメントの確立の諸方策と連なって進められる必要があることが指摘されている。学生アンケートは、教育職員が学生からの意見を聴取し、学生の学習時間の実質的な増加に向けて、資料を収集する手段になりうるものである。そこで、特に 2012（平成 24）年度からは、授業時間以外の学習時間を測定する項目を新たに加えた。

そして、平成 29 年度は、学生の学修成果の可視化の一環として、PROG テストをすべての 1 年生及び 3 年生に導入し、学修成果の可視化を行い、学生指導に生かしてきた。令和元年度からは、「学生アンケート」を「授業評価アンケート」と名称を改め、IBU.net を通じて原則として全科目の授業についてアンケートを実施した。実施方法も学生がより回答しやすくなるように、スマートフォンで回答できるよう改めた。翌令和 2 年度については、前年度の方法を採用しつつ、遠隔授業に対応して設問を一部修正した上で実施した。令和 3 年度には、授業の改善点を従来以上に抽出できる設問にするための議論を行った。その結果、授業の改善点が絞りやすい設問にするという点と、学科ごとの特徴を抽出するためにデータの散らばりが生じる設問を目指した。令和 4 年度は、令和 3 年度の設問を基本としたが、教員の指導に対する学生の姿勢の抽出と、自由記述でよかった点と改善につながる点との切り分け方について議論した。その結果「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」という設問を加えると共に、自由記述から授業の特徴を抽出しやすくなるために、複数の設問に分けることとした。令和 4 年度の実施について、夏学期については、新しいアンケートについての更なる議論を継続したため、自由記述を分けた点を除いて、従来とほぼ同じ設問項目で実施した。冬学期については、議論を重ねて追加した設問項目を入れたアンケートを実施した。令和 5 年度はこれまでの議論を踏襲し、令和 4 年度冬学期と同じ設問項目で実施した。令和 6 年度もこれまでの議論を踏襲し、令和 5 年度と同じ設問項目で実施した。以下、令和 6 年度授業評価アンケートにて明らかになった傾向と課題について報告する。

2. 授業評価アンケート実施目的

本学では、授業評価アンケートの実施により、以下の 2 点の達成を目ざしている。第 1 に、教員が授業評価アンケートを活用することで、学生の理解度を踏まえた授業改善を行うことができ、それに伴いシラバスに明示された到達目標の達成が実現することである。CAP 制により、学生は適切な数の授業を履修し、予習復習に時間をかけることができる。各授業における到達目標が達成できたという実感を学生に与えることは、学生の有能観を高めることにもつながるだろう。第 2 に、適切な授業外学習時間をもって、全学的に学生の単位修得が進むことは、大学全体の GPA が上昇することに繋がる。GPA の上昇は、大学全体の教育力を示す指標となりうる。本学で導入されている Semester 制、CAP 制、GPA 制度は、それぞれ別個の制度ではなく、教員による教育の改善と学生の学習の成果の向上とに関連してそれぞれの制度が関係しながら、機能していくものと考えられる。以上のことを踏まえ、授業評価アンケートによる授業改善の目標として、「学生の意見に耳を傾けることにより、学生にとって理解しやすい授業の実施に向けた工夫を進める」「学生の授業に対する態度や学

生自身の学びに対する自己認識を深める」の2点を設定し、アンケートを実施した。

3. 授業評価アンケートの実施方法

令和6年度は、令和5年度同様、専任教員・非常勤講師を問わず、学期の第14回または15回の講義時に、IBU.netを通じて授業評価アンケートを実施した。各教員は、授業評価アンケートの趣旨等の説明文を共有し、講義内でそれを資料または口頭で説明して、学生にアンケートの回答を求めた。またアンケート回答の総計は、IBU.netで集計され、その結果について各科目単位で教員が改善コメントを入力した。授業評価アンケートの選択設問項目は、ほぼ夏冬学期同じである。表1にて示す。

表1 授業評価アンケートの設問項目

設問内容	(評価値) 回答内容
1. 授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
2. 授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
3. 授業の学習効果高めるためにパソコン、スマホやインターネット等のICTが活用されていましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
4. 先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら授業を進めていましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
5. 学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
6. 授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
7. 授業で学んだ内容をもとに、自分で調べたり考えたりしましたか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない
8. この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか。	(5): 意欲的に取り組んだ (4): ある程度意欲的に取り組んだ (3): どちらともいえない (2): あまり意欲的に取り組まなかった (1): 全く意欲的に取り組まなかった
9. この授業1回に対する予習・復習等について平均してどれくらいの時間をかけましたか。	(5): 4.5時間より多い (4): 4.5時間以内 (3): 3時間以内 (2): 1.5時間以内 (1): 30分以内
10. この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標どの程度到達できたと思いますか。	(5): 達成できた (4): ある程度達成できた (3): どちらともいえない (2): あまり達成できなかった (1): 全く達成できなかった
11. あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いますか。	(5): そう思う (4): ある程度そう思う (3): どちらともいえない (2): あまりそう思わない (1): そう思わない

表1の設問項目について説明する。質問項目は「授業の分かりやすさ」、「ICT 活用の有無」、「アクティブラーニング要素の有無」、「学生意欲の変容」、「学習時間」、「履修に際しての学生の姿勢業全体の統括」、という内容で構成されている。授業の分かりやすさに対して、改善点を絞るために、設問1「授業での先生の説明は、分かりやすかったですか。」、設問2「授業の資料やスライドは分かりやすかったですか。」と2つに分けた。設問3「授業の学習効果高めるためにパソコン、スマホ、インターネット等のICTが活用されていましたか。」では、授業でのICT活用の有無という観点の設問である。設問4「先生は、授業中の問いかけや小テスト・課題などによって、学生の理解度を確かめながら進めていましたか。」と設問5「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」は、「主体的・対話的で深い学び」を導くアクティブラーニング要素についての設問である。設問6「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」と設問7「授業で学んだ内容を元に、自分で調べたり考えたりしましたか。」は、学生意欲の変容について問うものである。これは、授業により学生意欲の変化を問うことで学習効果を検証しているものといえる。設問8「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」は、学生の学びに対する姿勢を問うている。さらに、設問9「毎回の授業について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか。」は、「学習時間」についての質問である。設問10「この授業を受けて、シラバスに示されている到達目標どの程度到達できたと思いますか。」については、「シラバスの理解」という視点を取り入れ、設問11「あなたは総合的に判断してこの授業を受講して良かったと思いま

すか。」は、授業全体の統括をする設問としている。

集計は、「1: (そう思う)」が 5 点、「2: (少しそう思う)」が 4 点、「3: (どちらともいえない)」が 3 点、「4: (あまりそう思わない)」が 2 点、「1: (思わない)」が 1 点で採点している。これらの選択設問に加え、自由記述として「この授業で良かった点があれば書いてください。」「この授業の改善につながるような意見があれば書いてください。」「その他、自由に感想を書いてください。但し、単なる批判や誹謗中傷は慎んでください。」という 3 つの自由回答を設定して、授業の特徴が抽出しやすい形にした。

(1) 夏学期授業評価アンケート

夏学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 6 年 7 月 11 日 (木) ～令和 6 年 7 月 24 日 (木) を授業評価アンケート回答として設定した。学生には、IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 6 年 7 月 25 日 (木) ～8 月 7 日 (水) を、改善コメントの入力期間として設定した。その後各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

(2) 冬学期授業評価アンケート

冬学期は、第 14 回または 15 回の講義時にあたる令和 6 年 12 月 26 日 (水) ～令和 7 年 1 月 20 日 (月) を授業評価アンケート期間として設定し、受講している学生に IBU.net を通じて回答を求めた。その後、授業評価アンケートの集計が完了した令和 7 年 1 月 21 日 (土) ～2 月 3 日 (月) を、改善コメントの入力期間として設定し、各科目を担当する教員に IBU.net を通じて回答を求めた。

4. 集計結果と授業評価アンケートの結果に対する対応

夏学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率・集計結果は表 2 の通りである。

回答率については、大学 55.6 合計% (前年度 55.72%)、短大 69.5 合計% (同 74.89%)、総計 56.7 % (前年度 57.36%) となった。

表2 夏学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率・集計結果

担当教員所属	授業数	回答者数	受講者数	回答率	【設問項目に対するアンケート集計結果 ※平均値】										
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
和の精神 大学	1	732	949	77.1	4.34	4.27	3.47	3.48	2.82	3.88	3.34	4.22	1.27	4.11	4.06
日本学科	67	943	1541	61.2	4.40	4.37	4.24	4.27	4.15	4.31	4.31	4.46	2.52	4.18	4.38
国際コミュニケーション学科	67	656	1190	55.1	4.28	4.13	4.06	4.30	4.35	4.09	4.03	4.32	1.75	4.04	4.23
社会学科	87	1812	3604	50.3	4.35	4.30	4.33	4.23	4.02	4.22	4.10	4.34	2.09	4.17	4.34
人間福祉学科	63	723	1360	53.2	4.24	4.16	4.15	4.09	3.85	4.17	4.06	4.28	1.85	4.06	4.36
教育学科学校教育コース	206	3449	6537	52.8	4.28	4.28	4.36	4.21	4.33	4.28	4.15	4.42	1.87	4.25	4.40
教育学科幼児教育保育コース	61	1058	1723	61.4	4.46	0.00	4.22	4.33	4.53	4.48	4.27	4.56	1.81	4.34	4.55
経営学科 公共経営専攻	35	847	1347	62.9	4.19	4.16	3.84	4.19	3.88	4.13	4.04	4.18	1.80	4.02	4.25
経営学科 企業経営専攻	58	1427	2549	56.0	4.32	4.31	4.09	4.20	4.01	4.15	4.00	4.24	1.79	4.03	4.29
看護学科	65	967	2337	41.4	4.34	4.33	4.27	4.31	4.44	4.31	4.32	4.51	2.21	4.34	4.41
高等教育推進センター	10	525	809	64.9	4.47	4.59	4.78	4.42	4.11	4.28	4.16	4.45	1.88	4.25	4.54
大学非常勤	350	8188	14395	56.9	4.31	4.22	4.03	4.15	3.93	4.18	4.03	4.34	1.82	4.15	4.32
大学 計	1070	21327	38341	55.6	4.32	4.05	4.14	4.18	4.04	4.21	4.07	4.36	1.88	4.17	4.34
和の精神 短大	1	97	120	80.8	4.19	4.26	3.95	3.64	3.04	3.81	3.23	4.13	1.20	4.10	4.10
保育科	52	1046	1641	63.7	4.51	4.35	4.04	4.35	4.37	4.50	4.25	4.55	1.55	4.42	4.59
ライフデザイン学科	28	675	834	80.9	4.50	4.48	4.38	4.36	4.26	4.38	4.12	4.54	1.51	4.31	4.50
短大非常勤	33	515	760	67.8	4.67	4.58	4.25	4.56	4.40	4.58	4.34	4.59	1.68	4.42	4.65
短大 計	114	2333	3355	69.5	4.53	4.44	4.18	4.37	4.29	4.46	4.19	4.54	1.55	4.38	4.56
総 計	1184	23660	41696	56.7	4.34	4.09	4.14	4.20	4.07	4.24	4.08	4.38	1.85	4.19	4.36

夏学期授業評価アンケートの各設問に対する回答結果の平均値も表2にて示している。前年同様、学習時間を問うた設問9（「毎日の授業時間について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか」）以外は、評価平均点が概ね4.00ポイントを超えていている。このことから、学生は意欲的に学習に取り組み、教員の授業への工夫等も評価されていることが窺える。また、設問11（「あなたは総合的に判断して、この授業を受講して良かったと思いますか。」）については、大学も短期大学もそれぞれに高いポイントとなっていて、全体的に学生にとっても満足度の高い授業が実施されていると考えられる。

一方、設問9（「毎日の授業時間について、予習復習や課題作成にかけた時間をすべて合わせて、平均してどれくらい学習しましたか」）については、前年同様全ての学部・学科で3.00ポイントを下回っている。このことは、多くの学生が一つの授業に対し、その授業時間を含めても1.5時間以内しか勉強していないことを示している。前年度も同様の傾向が見られた。教員は「授業外学習時間」について問題意識を持ち、授業改善に取り組む必要がある。

なお、集計された授業評価アンケートの結果は、IBU.netを通じて科目担当者に公開された。また、「自由記述：この授業の回線につながると思われる意見や感想を具体的に書いてください」についての回答は、担当者・担当科目を匿名化したうえで、学科ごとの傾向をまとめ、各学科学部に配信した。その後、全科目担当者に対してIBU.netを通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメント内容は、学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。

（2）冬学期授業評価アンケートの授業数・回答数・回答率・集計結果について
冬学期授業評価アンケートの授業数・回答者数・回答率は表3の通りである。回答率については、大学合計50.6%（昨年度冬学期53.01%）、短大合計63.7%（同65.18%）、総計51.6%

(同 53.34%) となった。なお、集計された授業評価アンケートの結果を受けて、全科目担当者に対して IBU.net を通じて授業に関する改善コメントの記入を求めた。また、授業評価アンケートの集計結果及び科目担当者の改善コメントの内容は、夏学期同様学生が閲覧できるように、印刷した一覧を図書館で公開した。自由記述についても夏学期同様に高等教育推進センターによりまとめられ、各学部学科に報告された。

表 3 冬学期授業評価アンケートの実施授業数・回答者数・回答率・集計結果

担当教員所属	授業数	回答者数	受講者数	回答率	【設問項目に対するアンケート集計結果 ※平均値】										
					1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
和の精神 大学	1	626	954	65.6	4.22	4.13	3.63	3.48	3.05	3.81	3.45	4.13	1.65	4.12	4.00
日本学科	59	677	1257	53.9	4.53	4.44	4.38	4.40	4.44	4.44	4.48	4.57	2.64	4.33	4.54
国際コミュニケーション学科	75	721	1374	52.5	4.26	4.17	4.08	4.32	4.31	4.13	4.09	4.31	1.90	4.09	4.23
社会学科	88	1708	4070	42.0	4.28	4.24	4.31	4.14	3.91	4.11	4.10	4.30	2.06	4.12	4.26
人間福祉学科	64	350	812	43.1	4.52	4.47	4.22	4.36	4.27	4.41	4.26	4.38	1.87	4.23	4.50
教育学科学校教育コース	204	3022	6063	49.8	4.32	4.30	4.30	4.22	4.28	4.29	4.21	4.44	1.92	4.25	4.41
教育学科幼児教育保育コース	62	969	1821	53.2	4.43	4.36	4.26	4.32	4.38	4.41	4.22	4.51	1.78	4.29	4.52
経営学科 公共経営専攻	39	881	1633	53.9	4.17	4.17	4.03	4.13	3.89	4.13	4.05	4.20	1.84	4.05	4.21
経営学科 企業経営専攻	53	1563	2458	63.6	4.48	4.41	4.20	4.34	4.02	4.28	4.12	4.33	1.75	4.19	4.42
看護学科	48	404	1152	35.1	4.23	4.19	4.03	4.20	4.18	4.19	4.20	4.40	2.09	4.24	4.27
高等教育推進センター	13	111	286	38.8	4.50	4.46	4.65	4.48	4.29	4.34	4.36	4.40	2.29	4.21	4.46
大学非常勤	343	5987	11773	50.9	4.30	4.17	3.96	4.14	3.95	4.15	4.01	4.32	1.76	4.15	4.29
大学 計	1049	17019	33653	50.6	4.33	4.25	4.12	4.18	4.05	4.20	4.09	4.35	1.87	4.18	4.33
和の精神 短大	1	87	112	77.7	4.24	4.20	3.93	3.53	3.24	3.84	3.47	4.29	1.90	4.17	4.05
保育科	35	675	1303	51.8	4.53	4.47	4.26	4.35	4.29	4.43	4.24	4.49	1.70	4.33	4.51
ライフデザイン学科	32	549	717	76.6	4.39	4.17	3.92	4.20	4.26	4.37	4.07	4.44	1.52	4.29	4.41
短大非常勤	33	545	783	69.6	4.47	4.43	4.13	4.33	4.16	4.42	4.20	4.46	1.66	4.29	4.50
短大 計	101	1856	2915	63.7	4.45	4.35	4.10	4.26	4.19	4.38	4.14	4.46	1.64	4.30	4.46
総 計	1150	18875	36568	51.6	4.34	4.26	4.12	4.19	4.06	4.22	4.10	4.36	1.85	4.19	4.34

まず、設問 1・設問 2 の授業のわかりやすさについては、ほとんどの学科の平均が 4.00 ポイントを超えている。すなわち、学生の理解度に合致した授業が大学全体で展開されていると言えよう。一方で、設問 5（「学生同士や教員との間で意見や考えを伝え合う機会があったと思いますか。」）については、前年度同様 4.00 ポイントに届かない学科がいくつかあることから、教員が問題意識を持ち、授業方法の検討が望まれるだろう。設問 10 の授業全体の統括については、どの学科もそれぞれに高いポイントを指しており、これまでと同様に満足度の高い授業が実践されていた様子が窺えた。設問 8 の学生の学習態度については、前年度同様全ての学科において 4.00 ポイントを超えており、学習に対する積極的な態度が構築されていると言える。しかし、設問 9 の学習時間については、夏学期同様ポイントは低く、学生の学習時間は平均 1.5 時間以内にとどまっていると言える。設問 8 と設問 9 の結果を統合すると、学生は学習に対する積極的な態度を持ちつつも、自主的に学習に取り組むことができない姿がうかがえる。教員には、授業外学習時間を確保すべく適切な課題を課すことが求められているかもしれない。

以上、令和 6 年度の授業アンケートの結果を概観した。前年同様の課題が抽出され、教員が問題意識を持ち、解決策を講じることが必要である。

5. 今後の課題

本学では、PDCA サイクルにより、授業改善を進めてきた。今年度もほとんどの科目について授業評価アンケートを実施し、全学的な課題等は把握できた。前年同様、学生の授業外学習時間数が不十分であることが過大であろう。今後は、学生の授業外学習時間を増加させるためにはどのような取り組みを行えばよいか、教員一人一人が問題意識をもち、改善を試みる必要があるだろう。学生が主体的な態度で授業外学習時間を増加させることは、学生自身の自律的な学修態度の育成につながり、このような姿勢は変化が著しい時代において環境の変化に対応できる社会人を育成する上で欠かせないだろう。

[引用文献]

文部科学省 2008 年 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」（答申）

(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf)

文部科学省 2012 年 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」

(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf)

四天王寺大学ファカルティ・ディベロップ (FD) 委員会・スタッフ・ディベロップ委員会 (SD) 編「令和 5 年度 四天王寺大学 四天王寺大学短期大学部 FD・SD 報告書」

(<https://www.shitennoji.ac.jp/assets/images/about/disclosure/fsd/r05fsd.pdf>)

第3章 各学科・専攻・コースによるFD活動について

人文社会学部 日本学科／文学部 日本学科

1. はじめに

本報告書では、下記の基礎的かつ重要な科目や重要な取り組みを取り上げている。

2. (1)「大学基礎演習Ⅰ」(1年夏必修) (2)「大学基礎演習Ⅱ」(2年冬必修)
- (3)「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」(1年夏冬必修) (4)「日本学基礎演習Ⅰ」(2年夏必修)
3. 授業相互参観について
4. (1)「パフォーマンス実践演習」(1年以上夏集中選択)
- (2)「日本学インターンシップ演習」(2年以上冬選択)
- (3)教員採用試験対策 (4)「地域・文化発信演習」(2年以上冬選択)

R6年度に大きく改善したのは、4.(4)「地域・文化発信演習」(冬学期開講)である。まず、受講者数が大幅に増えた。R5年度受講者は5名だったが、R6年度は18名となり、演習を実施する上での適正人数となった。受講者増に奏功したのは、夏学期に「日本学基礎演習Ⅰ」でPR映像を使って授業紹介をしたことに加えて、冬学期の初回授業で丁寧に全体の見通しや目指している成果について説明し、学生のモチベーションを上げたことがあるだろう。そして、見通し通り、半年の授業の終わりには大きな成果を上げることができた。菅田八幡宮・応神天皇陵・大蔵を見学するなどして、学生各自がパンフレットで発信できるように指導したのだが、そのうちの2作品は対外的な配布に耐えうる素晴らしい出来栄であった。

教員採用試験対策も、前年度(現役合格者5名)に引き続き大きな成果を得た。R6年度は6名(大阪府中学国語3名・大阪市中学国語1名・和歌山県中学国語2名)が現役合格を果たした。丁寧な指導が結果に結びついたと言えよう。ただし、次年度以後もこの良い状況を維持していけるかについては、楽観視できない。昨今の教員離れのためか、国語免許取得希望者が減ってきている。本気で教員をめざし教員採用試験を受験しようとする学生は、さらに減ってきている。この現状を打開すべく、「大学基礎演習Ⅰ」では教職志望の上級生や教員となった卒業生の話聞かせ、伝統継承プログラムでは現役合格した4年生との交流を図っているが、はかばかしい手応えがない。対策について考えていかねばならない。

その他、本報告書が取り上げている科目については、各科目で実施している独自アンケートによると、おおむね「受講して良かった」「成長できた」という結果を得ている。しかし、問題もはらんでいる。問題の一つは、選択科目「日本学インターンシップ演習」「パフォーマンス実践演習」における受講者数の伸び悩みがある。両科目は充実した学修内容を用意しており、受講した学生の満足度は高い。だが、その分、履修の負担が大きいと学生に思われているのか、敬遠されているようである。学びの意義を十分に周知し、多くの学生に受講を促したい。もう一つ問題がある。それは、複数教員が担当する場合の内容の統一である。「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」については、ここ数年間で担当教員が会議を重ね、現在ほぼ足並みを揃えることができている。「日本学基礎演習Ⅰ」はこの点がまだ不十分であるようなので、今後、協議を進めていきたい。

(文責 田島智子)

2. 基礎的必修科目について

(1)「大学基礎演習Ⅰ」(1年次必修)

Plan (計画)

R6 年度は、扱う内容はほぼ前年度を踏襲し、次のように計画した。①初期は、クラスメートや教員との人間関係を築くこと、入学時ガイダンスで指導しきれなかった学修・ICTに関する指導を主眼とする。②学生の日本語力向上につながる様々な取り組みを行う。③将来の進路や、それに向けて学生時代にすべきことへの意識を持たせる。

Do (実施)

①については、前倒し第1回～第4回授業で、全体合同または2クラス合同授業の形態で、学修に必要な知識やICT技能の指導(実践練習を含む)を行った。②については、教員宛て依頼・問い合わせのメールの指導、グループでの討論、「私の薦める一冊」の原稿作成およびプレゼンテーション、漢字能力検定2級・日本語検定2級合格相当の力を目指しての取り組みを行った。③については、学科上級生のスピーチ、キャリアに関する専門家のお話、卒業生のスピーチを聴聞し、先達の経験や助言から学び、将来について考える機会を設けた。

Check (評価)

学期末に実施した学科独自アンケート(回答72名)から抽出する。

①ICT指導 ②漢検・日検2級相当の日本語力への取り組み ③上級生スピーチ ④キャリアに関する話 ⑤グループ討論 ⑥「薦める一冊」発表原稿作成 ⑦「薦める一冊」プレゼンと相互評価 ⑧卒業生スピーチ の8項目について「1:大変有意義」～「4:無くてもよかった」の4段階および「その他」から選んで回答する方式。「有意義」の割合が高かった順は次の通り。1. 卒業生スピーチ(90.3%) 2. 上級生スピーチ(87.5%)、ICT指導 (87.5%) 4. 討論(84.7%) 5. キャリアの話(83.3%) 6. 「薦める一冊」発表原稿作成 (80.6%)、「薦める一冊」プレゼンと相互評価 (80.6%) 8. 日本語力向上の取り組み(65.3%)

Act (改善)

令和6年度振り返りでは「スピーチ聴講、原稿作成、プレゼン、討論には学生も熱心に取り組む、効果を上げていると言えるが、漢字検定・日本語検定2級合格者の増加というわかりやすい結果は出せていない。授業時間内での検定対策は限界があり、実力に結びつける良い方策がないかが検討課題」としていたが、令和6年度も同様の感がある。

次年度からは”100分授業×14回”となる。「大学基礎演習Ⅱ」の主要項目「ブックトーク」にもつながる日本学科の特徴的な取り組み「私の薦める一冊」関連は保持しつつ、授業内容や構成のリニューアルに取り組む必要がある。

(文責 高橋美奈子)

(2)「大学基礎演習Ⅱ」(1年次必修)

Plan (計画)

本科目は日本学科初年次ゼミ科目として開講13年目となる。プログラムの柱としている授業前半の「ブックトーク」個人発表と「四天王寺ツアー」グループ発表は、以前より、読解力やプレゼン能力の向上にある程度の効果が認められていることから、その基本的な授業形態を維持することとした。それに、「大学基礎演習Ⅰ」から継続する漢字検定と日本語

検定の模試をおこなって、成績評価に加えることとした。

Do（実施）

授業の実施形態は、おおむね計画通りに実施できた。漢字検定と日本語検定の模試についても、スムーズに実施できた。

Check（評価）

昨年度に引き続き、この科目の独自アンケートを Google Form にて実施し、受講者数約 85 名のうち 27 名から回答を得たが、これは従来に比べて大幅に低い回答率である。

ブックトークは約 41%から「大変有意義であった」、残り 59%から「それなりに有意義であった」という回答を得た。四天王寺ツアーは約 52%から「大変有意義であった」、約 44%から「それなりに有意義であった」の回答を得ており、どちらも高い評価をえている。また、「漢字検定と日本語検定の模試」については約 74%が「有意義だった」と回答している。

とはいえ、この結果は独自アンケートに回答してくれた積極的な学生に限られたものであることに留意すべきだろう。

Act（改善）

今年度のプログラムは、考慮すべき点があるとはいえ、受講学生からは一定の評価を得ていることから、今後大きく変える必要はないと思われる。

とはいえ、四天王寺ツアーの取り組みへのテコ入れ、漢字検定と日本語検定の模試をどのように組み入れるか、またそれらを独自アンケートに反映させることを検討する必要があるように思われる。

（文責 今田健太郎）

(3)「日本学表現演習Ⅰ・Ⅱ」（1年次必修）（旧科目名「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」）

Plan（計画）

本科目は、日本学科のディプロマ・ポリシーを具体的に実践すべく、学生が日本語（表現）についての幅広い知識を体系的に修得し、基本的な事項を理解するとどまらず、そうした知識・事項にもとづいた精確かつ適切な日本語表現力を身に付けて、これを的確に運用できるようになることを目指している。これは従来どおりである。なお、授業担当は、1年生全員を学籍番号順に4分割し、夏学期の「Ⅰ」は、①中村、②田島、③野中、④坂田が、冬学期の「Ⅱ」は、①田島、②中村、③坂田、④野中がそれぞれ担当した。

Do（実施）

それぞれの授業内容は、Ⅰは、①概論、「言葉とは何か」を考える、叙述・構成の方法を学ぶ、②「言葉と私」の小論文を書く、メールの書き方、③小論文「言葉と私」の発表と相互評価、④敬語の学習、⑤「心に残る表現」の原稿作成とスピーチ、⑥スピーチ「心に残る表現」のルーブリックによる相互評価、⑦「言葉と私」の小論文（最終レポート）、の7項目である。Ⅱは、①表現の工夫について（流行語・キャッチコピー・レトリック等）、②履歴書の書き方の説明と実践、③スピーチ（自己アピール、原稿作成と発表）、④スピーチの相互評価とフィードバック、⑤正式な手紙の書き方の説明と実践、⑥文章の要約のしかたの説明と実践、⑦スピーチ（和の精神と私、原稿作成と発表）、⑧スピーチの相互評価とフィードバック、⑨敬語の学習、の9項目である。

Check (評価)

I・IIともに、学期末に学生に対する独自アンケートを実施した。質問項目は、それぞれ上記授業内容に加えて、Iでは⑧授業全体の感想を、IIでも⑩授業全体の感想を尋ね、「評価 1=とても勉強になった 2=勉強になった 3=どちらとも言えない 4=勉強にならなかった 5=まったく勉強にならなかった」の5段階で学生に評価させた。集計結果は次のとおりである。(自由記述欄は割愛)

							II	1	2	3	4	5	合計 (人)
I	1	2	3	4	5	合計 (人)	①	39	15	3	0	0	57
①	56	8	1	1	0	66	②	47	8	2	0	0	57
②	57	7	1	1	0	66	③	47	9	0	1	0	57
③	50	9	6	1	0	66	④	45	9	2	1	0	57
④	54	10	1	1	0	66	⑤	45	9	2	0	1	57
⑤	56	7	2	1	0	66	⑥	36	16	2	3	0	57
⑥	51	10	4	1	0	66	⑦	40	14	3	0	0	57
⑦	49	14	2	1	0	66	⑧	35	19	2	1	0	57
							⑨	41	10	5	1	0	57
							⑩	41	14	2	0	0	57

Act (改善)

上に掲出したアンケート結果は、かなり良好な学生からの評価と言えよう。ただ、授業全体の感想を尋ねたIの⑧(とIIの⑩)において、ごく少数だが否定的評価をしている者がいるのは気になるところである。このような学生は、基礎的な授業であるにもかかわらず授業についてこられず、大学の授業に意義を見出せなくなって退学する可能性を秘めているからである。我々担当教員は、より丁寧な授業を心掛けるとともに、受講学生の情報を共有し、より適切かつ懇切に学生を指導しなければならない。ピアタを有効に活用するのも一法であるが、これまで以上に、教員と学生、および、学生同士の人間関係・コミュニケーションをより密なものにして、授業についてこられない学生を出さないように心掛けたい。もちろん、I・IIともに自由記述欄において、多くの学生が肯定的・積極的な意見や感想を述べてくれていたのは、大いに励みになるところである。

(文責 坂田達紀)

(4)「日本学基礎演習 I」(2年次必修)

Plan (計画)

- これまで、初回に実施していた1回完結のグループワーク(大学を紹介する)を、全体の時間配分を考慮して廃止する。
- 2年次においても学生に不足しているアカデミックスキルを修得させて、日常のレポートや専門的な演習における学修と直結させる。
- 「日本学インターシップ演習」「地域文化発信演習」などの演習科目と、「専門演習」の紹介を、授業期間内に設ける。

- 授業担当者によって課題の内容に相違があることへの不満が相変わらず示されたので、課題についての担当者間での調整作業を行い、学生間不満が無いようにする。

Do (実施)

- グループワークや発表は、計画通りに実施した。
- メディアリテラシー教育・日本語能力・漢字検定模擬試験については計画通りに実施した。
- 学科独自アンケートについては、グーグルフォームを使用してこれを実施した。

Check (評価) ⇒ Act (改善)

学科独自アンケートの結果を踏まえて評価および改善すべき点について述べる。

- ★大学生に求められるレベルのレポートを作成できるようになるための学びについて
大変役に立った＝41.1%（昨年度 53.6%） ある程度役に立った＝48.2%（同 41.1%）
＝合計 89.3%（前年度 94.7%） *学習内容については満足していると思われる。
- ★来年度以降の日本学科の2年生にとっても、受講する価値のある科目だと思いますか
非常に価値がある（39.3%）、それなりの価値がある（55.4%）＝合計（94.7%）

*全体的に、一定の成果は見られたようだ。レポート作成技術がそれなりに取得できたという学生の自覚が学びについての満足度を上げている。

自由記述欄では、

- 課題に取り組む期間が短いという意見がある。
 - グループワークでは、協働の難しさも挙げられている（個々の学力レベルの差も問題か）。
 - クラスごとの課題設定の違いは、やはり問題視されているようである。
- これらに関して担当者間での協議の結果、コンセンサスを得た。次年度の運営につなげたい。

（文責 松井浩子）

3. 授業相互参観について

Plan (計画)

FD委員会から相互参観実施の依頼が5月13日になされた。参観対象科目は、日本学科の科目のみならず全学学部学科の科目である。特に、令和5年度ベストティーチャー賞に表彰された教員の授業は公開授業として設定されており、参観が勧奨されている。

Do (実施)

参観は6月3日（月）～6月29日（土）にかけて実施した。全教員が自身の対象授業を設定し、また他の教員の授業に参観した。

Check (評価)

参観後、参観者は「参観シート」を記入し、授業担当者に提出した。授業担当者は「参観シート」をもとに「評価できる点」「改善すべき点」などの観点から自己評価した。

Act (改善)

8月30日オンライン学科会議内で合評会を実施した。各教員が自身の授業の概要を説明し、参観者がどのように評価したのかを報告し、振り返りを行った。また、合評会により明らかになった課題に対する改善案を共有した。

（文責 麻生迪子）

4. 学科独自の取り組みについて

(1)「パフォーマンス実践演習」

Plan (計画)

この科目は、学生の対面コミュニケーションの力を伸ばすために、「ヴォイストレーニング、口頭表現、身体表現などの諸要素を実習し、それらを踏まえながら、「他者への理解」あるいは「コミュニケーション」について取り扱ったパフォーマンスを、グループごとに創作し、発表する演習」(シラバスより)である。例年、夏休みの4日間の集中講義、いわば「合宿」のようなかたちで実施され、これまでに受講した学生からの満足度も高い。当初の計画は、ここ数年のプログラムを踏襲しつつ、洗練させたものである。

Do (実施)

令和4年度以降、全日程を対面授業で実施することができてきている。また、履修希望者は適正な人数(12名)におさまったので、選抜はおこなわなかった。ただ、授業に不参加であったり、当日前後に体調を崩したりする学生が続出したため、最終的な受講生は7名となってしまった。

Check (評価)

科目の独自アンケートの結果、受講した学生の満足度は、「大変有意義だった」が3名、「それなりに有意義だった」が3名となった(あと1名は「何とも言えない」)。十分な評価ではあるが、従来はほとんどの学生が「大変有意義だった」を選んでいたので考えると、やや評価が下がっているといえる。

Act (改善)

履修登録者数に比べて実際に受講する学生が大幅に減ってしまうという事態が、ここ数年続いている。集中講義という授業形態の難しさであろう。教員側の改善策としては、事前の告知を頻繁におこなうことくらいしかないと思われる。また、例年に比べて学生の満足度がやや落ちている。プログラムの狙いと学生の希望にミスマッチが生じているのかもしれない。学生の状況をみながら、微調整をおこなっていききたい。

(文責 今田健太郎)

(2)「日本学インターンシップ演習」

Plan (計画)

この科目は、日本学科の学びの特性を活かせる企業・官公庁・学校にて5日間の就業体験を行う科目である。本科目では、学生を実習生として派遣先に派遣する前に、6コマの事前授業、実習終了後の4コマの事後授業を行う。このような活動を通して、第一に、学生が、自らの進路について考え、今後のキャリア形成に主体的に取り組む態度を身につけることができる、第二に、実習により社会人としての心構えや必要な技能・知識を習得することができる、第三に、自律的学習者として主体的に学びに取り組む姿勢を涵養する、などを目指す。

Do (実施)

例年、本授業の受講生確保に苦慮している。そのため今年度も「日本学基礎演習Ⅰ」の授業時間内に、本授業の説明動画を流していただき、前年度の受講生の感想などを踏まえた実

習先説明プリントを配布した。IBU.net で申し込みフォーム等配信した。概ね昨年と同様の流れを踏襲したが、事後授業では、発表の精度を高めるための発表練習用の中日を設けた。

【受入先と学生の配属】

受入先は、公立中学校（2校、6名）、日本語学校（1校2名）、市立図書館（2名）、市役所観光関係部署（2箇所2名）、広告代理店（1社1名）、イベント企画運営会社（1社1名）、人材教育・育成（1社4名）である。

【実際の授業】

事前学習：9月2日1～3講時、3日1～3講時（対面）

内容：インターンシップの心構え、基本的ビジネスマナー、会社・企業研究など。

インターンシップ実践：9月～12月の間、40時間の就業体験。

評価：受入機関の担当者からループブックによる評価をいただいた。

事後指導：実践終了後、個別に礼状作成、ビジネス文書の書き方などを指導。

成果発表会：2月3日1・2講時自己評価シートによる振り返りと発表用資料作成

2月5日1・2講時体験発表会（ハイブリッド）、授業アンケート

Check（評価）→Act（改善）

成果発表会は、zoom を利用したハイブリッド形式で実施し、受け入れ先企業ご担当者複数が参加した。成果発表用の中日を設けたことで、学生の発表が昨年に比べ良いものになっていた。また、授業評価アンケートも肯定的な評価が多数を占めていた。概ね到達目標を達成できたと考えられるが、課題もある。第一に、派遣先の確保である。本年度は、派遣を予定していたが、派遣先に受け入れ予算が付かず、派遣を断念した箇所が1か所ある。派遣先と密に連絡をとり、派遣先の状況を把握していく必要がある。第二に、学生周知の強化である。毎年、受講者の確保に苦慮している。今年度は、1年生必修科目「大学基礎演習Ⅱ」で「日本学科伝統継承プロジェクト」活動の一環として、「日本学インターンシップ演習」を過去に履修し、進路が決まった学生にスピーチを行ってもらった。次年度は学生広報の効果があらわれるものと考えたい。

（文責 麻生迪子・野中拓夫・辰巳俊輔）

（3）教員採用試験対策

Plan（計画）

夏学期前半は、4年生には1次試験に向けての面接練習指導受講（教職教育推進センター主催）を促し、夏学期後半は、専門教科対策として、主に4年生対象の専門教科セミナーの実施、2次試験対策の面接・模擬授業の練習などを計画した。また、3年生には、今年から近畿エリアの自治体も3年生受験（1次試験）を始めたことから受験を推奨する。冬学期には、例年どおり、キョーサイ合格こころえプロジェクトの実施、3年生向け専門教科セミナーの実施、公立中学校授業見学会を計画する。

1・2年生に向けては「一般教養ステップアップ講座」の受講を引き続き推奨し、教職への動機づけのため、教採合格者の先輩から体験談を聞く機会を設ける。

また、今年より教育実習時期の変更（3年生冬学期）に対応すべく、夏休み期間中に授業を実施し、万全の準備をした上で実習に臨ませる体制をとる。教育実習の成功体験を、教職

へのモチベーションアップにつなげるためである。

Do（実施）

- 専門教科セミナーは、一次試験の結果発表が早まったので、学期中から実施。現代文（松山担当）は7/5、12、19、26、29。古文（野中担当）は7/1、8、15、22、29。漢文（矢羽野担当）は7/1、8、15、22、29に実施した。参加者は、2次に専門教科の試験がある者に限定され、各日6名前後となった。
- 3年生の動機づけのため、今年も10月に自主勉強会のグループを結成。週に一度、教採関連の学習をする時間を設け、仲間とともに教採合格を目指す環境作りを行った。また、1・2年生向けに、12月に教採合格の4回生の体験談（今の時期の勉強法）を聞く機会を設け、モチベーションアップを試みた。
- 1月から「キョーサイ合格ころえプロジェクト」を開始。実施日程は、1/29、2/5、10、17、19、26、3/5の7回。実施内容は、「自主勉強会の手引き」を活用し、教採合格体験談、効果的な勉強方法（ノートの作り方を含む）紹介の後、自己PR、自治体別「求める教師像」の把握、教育観の醸成などを、原案づくり→模擬面接で確認というルーティーンで行った。参加者は、SA4年生5名、教職志望3年生12名であった。
- 冬学期終講後、専門教科セミナーを設定した。実施は以下の日程。現代文（松山担当）1/29、2/5、19、26。古文（野中担当）2/10、26、3/5（2回）。漢文（矢羽野担当）1/29、2/5、10、19。参加者は13名、熱心に取り組んでいた。
- 2/17に、公立中学校での授業見学会を実施。3年生10人が参加。大阪市立玉津中学校 田沼宏先生（2018年卒）の授業を参観。授業後に学生たちと交流会を持って下さり、授業以外にも、教員生活全般について学生の質問に答えてくださった。学生たちは日頃気になっていた教員の実生活について知ることができ、大変有意義だったという感想を寄せている。

Check（評価）

- 4年生教採受験者は、13名、うち最終合格者は6名であった。数年ぶりに和歌山県の合格者が2名出たことは朗報である。3年生は3名が受験し、1名が合格。来年度の1次試験が免除されることとなった。
- キョーサイ合格ころえプロジェクトは学生の厚意に支えられながら引き継がれ、後輩たちもよく応えた。SAは熱心に指導してくれた。遠方より、自分の予定をやりくりして参加してくれる献身ぶりには頭が下がる。
- 「一般教養ステップアップ講座」は、去年の反省を踏まえて大きく方法を変更したにもかかわらず、回を重ねるたび、出席者が減少し、定着させることができなかった。

Act（改善）

カリキュラムの変更により、特に3年生夏学期の負担が大きく、モチベーションにも影響が出ていた。また、想定外の事案も多々起こり、対応が難しかった。今年の経験を踏まえ、対策を講じたい。また、年々教職志望者が減ってきている状況に鑑み、教職へのモチベーションを高めるような働きかけを工夫したい。

（文責 野中拓夫）

(4)「地域・文化発信演習」

Plan (計画)

本科目は、日本学科における地域連携科目の中核として発展することを期し、令和3年度に開講された。松井浩子先生と田中清隆先生に本年度より辰巳が加わった。担当者が一部変更になったため、授業計画を大幅に見直し、学期前半に辰巳と田中先生とが羽曳野市及び藤井寺市の歴史文化資源に関する講義を行い、講義で基本的な知識を学んだ上で実際に現地を訪れることとした。実際に訪れる対象としては、古市駅周辺の歴史文化資源で、具体的には誉田八幡宮や応神天皇陵、大蔵屋等を予定した。後半には松井先生による Adobe ソフトを用いた演習を実施し、各自が当該地域の魅力を発信するためのパンフレットを作成することとした。

Do (実施)

【内容及び形態】

前年度の受講者数が少なかったため、本年度は夏学期において2年次必修科目「日本学基礎演習Ⅰ」でPR映像を投影した。その結果、今年度の最終的な履修登録者は、18名となった。授業は計画の通り、前半において田中先生と辰巳の講義を中心とし、そこで得ることのできた基本的な知識を踏まえた上で、10月19日(土)午後に誉田八幡宮、応神天皇陵、大蔵屋等を見学し、誉田八幡宮と大蔵屋ではそれぞれ学生によるインタビューも実施した。

講義と現地で撮影した写真やインタビュー内容等をふまえ、松井先生による演習を通じて、各自が当該地域の魅力を発信するためのパンフレットを作成した。

【成績評価】

平常点50%、成果物50%の比率で成績評価を行った。

Check (評価)

各受講者が地域の歴史や文化に関する知識を持ち、実際にフィールドを巡って情報やデータを得るとともに、これらの魅力を動画で表現することが出来た。

Act (改善)

前年度と比較して履修者が大幅に増加し、学生への個別指導が困難であった。しかし授業時間外も積極的に編集作業を進める学生もあり、そのうち2名の学生の作品については実際に印刷物として発行し、古市駅、大蔵屋、はびきの観光局に配架するとともに、オープンキャンパスでの配布を行うなど、本学のPRにも繋がる結果となった。

日本学科としては引き続き本授業を地域連携の中核科目と位置づけ、学生への周知をより進めるとともに、地域連携活動へ学生が取り組む意義についても理解を深めるようにしていきたい。

(文責 辰巳俊輔)

以上

人文社会学部 国際キャリア学科／文学部 国際コミュニケーション学科

1. はじめに

国際キャリア学科では、教育課程編成・実施の基本的な考え方として、グローバル化した社会、より複雑になりつつある国際問題に対処できる能力・知識・スキルを体系的、実践的に学ぶことを目的として教育課程を編成している。1、2 年次では語学力の向上に重点を置き、さらに 3 年次からは各自の進路・適性に応じて、①英語・英語教育コース、②国際理解・協力コース、③国際ビジネスコースの 3 領域からそれぞれ指定の科目を選択履修します。3、4 年次では「専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(ゼミ)」を受講し、希望者は「卒業研究」に取り組む。

1) 1 年次においては、「英文法Ⅰ・Ⅱ」「Extensive Reading 初級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」「キャリア英語入門Ⅰ・Ⅱ」を必修とする。加えて、マクロ経済学、英語圏文化概説の授業が選択し、世界の文化や経済についての基礎的知識を学んでいる。

2) 2 年次においては、中級レベル以上の英語力や国際的な感覚を身に付けるために、「Extensive Reading 中級Ⅰ・Ⅱ」「ベーシックコミュニケーションⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ」を必修として受講する。また、それら学科共通領域に加え、3 年次からのコース制のコアであるゼミ(専門演習)での教育に向けて、①英語・英語教育コースでは、「Reading(Culture)」「Reading(Society)」「Reading(Literature)」「英語学概説」「英語学」、②国際理解・協力コースでは、「国際理解教育」「異文化共生論」、③国際ビジネスコースでは、「国際ビジネス論」「国際経済学」「グローバル・ファイナンス」、の 3 つの領域を土台として科目を選択し、次年度への知識固めに取り組む。

3) 3 年次からは、各自の所属する専門演習(ゼミ)を中心に、学生は各自、コース領域や進路・適性に応じて科目を選択し、履修していく。①英語・英語教育コースでは、「Reading(Language)」「Extensive Reading 上級Ⅰ・Ⅱ」「アドバンストコミュニケーションⅠ～Ⅷ」等、②国際理解・協力コースでは、「国際政治学」「国際問題論」「英国史」「社会情報論」等、③国際ビジネスコースでは、「貿易実務Ⅰ・Ⅱ」「金融システム論」「貿易理論」等の授業が選択できる。また、学科共通領域として、「英米文化論」「異文化理解」「国際コミュニケーション論」等も履修することができ、ゆるやかなコース制として学生の卒業要件を満たすようにしている。

近年、社会において、英語の能力がより一層問われるようになってきている。このような背景の下、本学科としては、学生の英語の能力向上のため、TOEIC や英検などの資格取得を学生に促していくとともに、異文化に対応できる柔軟な考えを持った学生を育成したいと考えている。したがって、詳細については後述するが、このような授業を通した指導に加えて学生の自主的学習をサポートする e-learning を希望者に無償で提供し、さらに自主勉強会を応援することで学生の学びの質的保証を確保するように取り組んでいる。加えて、観光・ホスピタリティ領域を拡充し、「使うための英語」を実践的に学ぶ取り組みに参入している。また、地域連携の取り組みについても、地元をはじめとしたさまざまな企業と提携した活動を行ってきた経験から、今年度は学生の希望をもとにさらに導入し

ていく。さらに今年度も去年度に引き続き、インドネシア、ベトナムなどの大学とのオンライン交流を進め、多くの学生が参加するなど世界とつながりたいと考える学生の意識を高める取り組みを進めている。

令和 6 年度発足の国際コミュニケーション学科はその基本的な考え方として、世界が注目する日本の観光等の場面でホスピタリティをキーワードに多文化やコミュニケーション力を身に付け、より実践的な知識とコミュニケーション力を養うべく、「国際文化」「ホスピタリティ」「外国語・英語教育」の 3 領域から構成している。そして、グローバルな視野に基づいた幅広い知識・技能を獲得するため、「英語圏文化概説」「アジア文化概説」「世界体験入門」などの授業で、欧米・アジアの言語・文化を目的に応じて学ぶ。また、「ベーシックコミュニケーションⅠ～Ⅳ」「ビジュアルメディア演習Ⅰ～Ⅳ」などの授業で、実践的な外国語能力と多様なメディアによるコミュニケーション能力を高め、自らの思考や見解を表現し、グローバル化した社会において、異なる文化背景をもつ他者とコミュニケーションを図る能力を養う。さらには、「海外体験実践演習」「国際キャリアインターンシップⅠ・Ⅱ」「観光英語-実践演習（実地演習）」などの体験型学習を伴う授業に加え、日本学科と協同の「地域における多文化共生Ⅰ・Ⅱ」「グローバルスタディーズ」の授業を設けることで、国内外の多様な場面での学修の機会を設け、グローバル社会や、多様な文化における様々な事象に関心をもち、主体的な取り組みや他者とのコミュニケーションによって課題を発見・検討し、社会貢献に向けて他者と協働して改善・解決を図ることができる力を育む。

1 年次には「海外体験実践演習」（選択）を配置し、学生は海外で異文化を実体験する中で、異文化を理解し、その後の学びへの動機づけを図る。また、2・3 年次には学科共通科目「地域における多文化共生Ⅰ・Ⅱ」（選択）や、学科専門科目「英語指導技術演習」、「観光英語実践演習（実地演習）」、「国際キャリアインターンシップⅠ・Ⅱ」（いずれも選択）を配置し、学生個々の目的に照らして、他者と地域社会・海外などでの体験型活動に取り組むことにより、他者と協働し主体的に課題を解決する能力を高める。このように国際コミュニケーション学科では、理論と実践の往還を図り、グローバル社会や、多様な文化・言語への「知識・技能」を深め、自ら「思考力・表現力・判断力等」を高め、主体的な取り組みや他者とのコミュニケーションによって課題を発見・検討し、他者と協働して改善・解決を図る「主体性、多様性、協働性」を修得することができる。

2. 大学基礎演習について（国際コミュニケーション学科）

1) 大学基礎演習Ⅰ

全学共通の初年次教育の一環として、建学の精神を基に、大学における専門能力の滋養と大学生活を有意義に送るために必要な情報や技能を提供する。大学生として求められる基礎的な知識・技能・態度を修得し、大学および学部・学科・専攻コースへの所属意識を持ち、4 年間の大学生活を見通して、学科の特色が身に着くような講義を展開する。

大学基礎演習Ⅰを通じて、国際コミュニケーション学科に所属している学生は、自ら学ぶ意義と課題を把握することになる。まず、本学の建学の精神について理解させ、卒業後の進路について話し合い、キャリア形成のための大学生活について教員が学生に説明し

ている。

また、本学科の1年生はほぼ全員が海外体験に参加することから、異文化理解や異文化交流についての知識や心構えを身につけるとともに、海外への事前準備としてオンライン英会話を各自授業時間内に実施している。

2) 大学基礎演習Ⅱ

大学基礎演習Ⅰで学んだ学習の意義を踏まえながら、より主体的に大学の学修に取り組むことができるよう、アカデミック・スキルを向上させることを目標とした。初年次の学びをより確実にし、2年次以降の高度な学びへスムーズに移行できるように講義を展開した。大学基礎演習Ⅰでも行われたプレゼンテーションをより発展させ、充実した内容となるよう、プレゼンテーション大会の指導が行われたほか、アカデミック・スキルなどの授業については3人の本科目担当者が分担して授業を行った。

授業の内容は、図書館の活用方法や文章の読み方、発表の聞き方・質問の仕方、調査・分析結果のまとめ方、プレゼンテーションの構成・引用の規則・参考文献の提示方法などであった。また、大学在学中と卒業後に必要とされるリテラシー能力として、情報収集力や情報分析力、課題発見や問題解決のための考察力、プレゼンテーション準備における協働力や発信力について取り上げ、こうした能力の向上を目指すにはどのような方法があるのかについて理解できるように授業を展開した。

3. 授業相互参観について

以下の日程で授業相互参観を実施した。

整理番号	所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔あり(○)	合評会(実施時期)
1	国コ	奥羽 充規	7月10日	水	3	教育実習指導	4-212		授業後
2	国コ	神野 雅代	6月13日	木	4	キャリア英語Ⅰ(ペー	6-303		授業直後
3	国コ	宮脇 敏哉	6月3日	月	2	国際問題論	2-311		授業終了時
4	国コ	山崎 英一	6月13日	木	3	Extensive Reading中	4-259		授業後教室にて
5	国コ	李 美子	6月12日	水	4	基礎中国語Ⅰ	4-316	なし	授業の後
6	国コ	上野 舞斗	6月11日	火	3	英文法Ⅰ	4-212		授業後に実施教室にて
7	国コ	ハート・ケリガン	6月21日	金	2	ベーシックコミュニケーション	4-306		授業直後
8	国コ	平田 和義	6月13日	木	4限	ビジュアルメディア技	ラーニングコモンズ		授業後
9	国コ	村端 啓介	6月19日	水	4限	ビジネス英語Ⅰ	4-412		授業終了時
10	国コ	米田 晶	6月18日	火	4	世界体験入門	2-205	なし	講義終了後、講師室で実施
11	国コ	若松 正晃	6月21日	金	3	英語文学概説／英語圏	4-215		授業後教室にて

上記授業を参観した授業参観者のコメントを授業ごとに記す。

英語圏文化概説 若松正晃 6月21日 4-215

参観者：李美子

授業の出席者は9名でした。英文の資料1枚が配られました。教師がまず内容を纏めて後、学生に質問をするのです。学生はスマホで調べて内容について英語を交えて先生の質問に

答えました。学生の答えた内容について時代背景を紹介した上、また学生に「リアリズム」という概念について質問しました。概念を説明するために学生に配布の資料の部分的内容について読ませながら概念の理解に導いていました。学生は真面目に調べながら先生の質問に真面目に答えながら「リアリズム」の概念の理解に努めました。最後に、学生に作家の経歴を調べさせ、作家の背景にあるアメリカ南北戦争にも触れながら受容内容のまとめに進めていきました。全般授業の中で真面目に教師と応対しながら真面目に授業に取り組んでいる学生もいれば、興味を示さない学生もいました。教師と学生の応答は非常にスムーズに行われたので、私の授業にも取り入れたい点だと思いました。

ベーシックコミュニケーションⅠ ロバートケリガン 6月21日 4-306

参観者：村端啓介

全体的に学生のクラスルームエンゲージメントが高く、学生が受動的に授業を受ける時間が少なかった。担当教員はアクティビティを多用し、対象言語使用時間をできる限り多くしようという試みが見られた。アクティビティの前後や次の展開への移行の際には学生へのアイコンタクトを欠かさず、学生の学習理解度を随時確認しながら授業を進行していた。学生が教員の問いかけに自発的に答える頻度も高く、教員が授業の雰囲気をよくするための工夫をうけ、学生もそれぞれの活動に意欲的に取り組んでいる姿が見られた。また、授業の展開を学生の受け答えや流れに合わせて流動的に変えているであろう箇所が見られ、学生の学びの場を少しでも増やそうという態度が印象的であった。また、課題の管理等授業内外にて Google Classroom を活用し、ICT を利用した授業運営が意識されていた。

言語学習という授業形態であること自体の難しさでもあるが、日本人学生にいかに関英語を使わせるかが課題であると感じた。例えば学生同士でライティングの活動にて書いた成果物を確認し合い、そしてリアクションとしてコメントを書かせるような、学生同士の学習進捗状況機会があれば、より学生の競争心や共同学習への意欲が湧く可能性を感じた。同じ学科の先輩教員として、今後の自身の授業運営に活かせるテクニックや学生への態度が学べた良い時間だった。

英文法Ⅰ 上野舞斗 6月11日 4-212

参観者：米田晶

アクティブラーニングをうまく活用し、学生の主体性を引き出そうとする有意義な授業でした。

最初に小テストを実施し（レベル別に10題出題）、学生同士で採点しあってすぐに結果を出し、何ができていないかがすぐに目に見えるように工夫されていた。また、間違えた時点で座らせ、誰ができたかが見た目に分かる工夫をすることで、お互いに褒めあえるような仕組みになっていました。

次に、不規則動詞（過去形）についての学習方法として、みんなが知っているトランプ遊びの要素を取り入れておられました。原型と過去形のカードをセットにすることでスペルを確認し、発音し、耳で聞く→覚えるという工夫が込められた授業方法で、学生も楽しそう

に取り組んでいました。1回戦が早く終わったグループは、「もう一回する？」ととても前向きに取り組めていたのもよかったと思いました。

高速インプットではこの日のテーマ「助動詞」を使った文章を日本語と英語対訳付きの教材を使ってインプットし、その後、隣の席の人とペアになってアウトプットする流れになっていました。

最後に、助動詞についての動画を使った「ジグソー法」という学習法を導入されていました。はじめに学生にこの学習法のメリットについて説明した後、作業手順を説明しておられたので、学生たちも、なぜこの新しい学習方法に取り組むのかを理解したうえで、取り組んでいたのがよかったと思いました。分担して学び、それぞれがグループメンバーに教えるという体験を通じて、学生の記憶に残すような工夫となっていました。

上野先生とは同じ科目を担当させていただくことも多く、常によりよいものを探し、取り入れる工夫をしておられますが、今回の授業でも工夫が見られ、とても参考になりました。自分自身の担当科目でも新しい学習法に取り組むなど、より効果的な学修につなげていきたいと思いました。

ビジネス英語 I 村端啓介 6月19日 4-412

参観者：上野舞斗

本授業は、TOEICの演習問題に沿って、ビジネスにおける英語やビジネスパートナーとのスモールトークのための日常的英語使用を学んでいくものである。授業内では、単語や文法といった構成要素を受け身的に学ぶのではなく、前時に学習した単語を用いたオリジナル英文の作成・提出や、「高速インプット」形式のペアワークなど学生を飽きさせない工夫が散見された。実際、ウトウトとしていた学生もこうした作業・ワーク時には自律して取り組むことができおり、有効な取り組みであることがわかる。

こうした、いわゆる「アクティブ」な学びのほかにも、テキストとしっかりと向かい合う学びの時間も保証されている。こうした時間では、学生間の学力差によって早く作業が終わる学生、すなわち暇になる学生が現れることがある。本授業においては、これを防ぐために、はやく作業を終えた学生への次の指示がなされていた。

その一方で、いくつか改善点もあるように思われる。たとえば、学生の理解度の確認の仕方である。今回の授業では、(時間的な制約もあったかもしれないが)基本的に教員が一方的に答えを伝える形式で、学生に指名して、ないし学生同士で問題の解答を確認する時間がとられていなかった。これにより、問題に解答することに消極的な学生も一定数見られた。指名するかどうかは別として、その可能性があることを学生たちに伝えることなど内的なアウトプット(リハーサル)の必要性を感じさせることが一つの対応策だと考えられる。

基礎中国語 李美子 6月12日 4-316

参観者：神野雅代

授業開始前には複数の学生が礼儀正しく中国語で先生に挨拶してから着席した。

出席者は20名余りであった。

授業開始直後の瞑想と出欠確認の際の学生の呼称や返事などが中国語で行われた。その後、前回までの内容を振り返りつつ今回の授業内容にスムーズに導入されていた。準備された確認テストではまず用紙に中国語を書かせ、答え合わせの際学生は、その場で赤ペンでスクリーンに映し出される正解を書いており、誤りをその場で確認することができているようであった。

人称代名詞、姓名の聞き方、「是」の構文に関する復習のプリントも配布されており、併せてオーセンティックな動画も視聴されていたので、プリントや動画が文法の繰り返し練習に役立っていると思われた。スクリーンは音読練習にも効果的に活用されていた。ペアでの会話練習において、学生は私語をせずに熱心に参加していた。非常に密度の高い授業となっていた。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 『てんしば』プロジェクト

「てんしば」プロジェクトとは、天王寺の「てんしば」エリアにあるゲストハウスで国際キャリア学科の学生たちが研修も含むインターンシップ業務に参加するというプロジェクトである。学生は、国際キャリアインターンシップという科目を履修登録すれば、卒業の際の単位としても認められる。

国際キャリア学科の学生たちは、様々な国からの観光客の方々に、いかにおもてなしできるかを考え、日々行動している。毎年、ゲストハウスでの接遇やイベントプロデュースをより良いものに仕上げるためイベントチームごとの中間発表会が行われている。令和元年度までは学生たちがゲストハウスでお茶（茶道）の指導をしたり、習字を教えたりと海外からの旅行者がこれまでに経験したことがないイベントを企画したが、令和6年度は、昨年同様、ゲストハウスでの外国人観光客への接遇ができなかったため、てんしば公園を使った来園客向けサービスやSNS（特にInstagram）のフォロワー獲得のための記事の作成、そして夏期には四天王寺にて「七夕のゆうべ」にて外国人観光客に英語で観光案内をする等の活動を行った。

(2) Jump-Start English (JSE)

Jump-Start English (JSE) は、国際キャリア学科の学生たちが、A0あるいは、推薦入試に比較的早い時期に合格し、本学科に入学するまで時間のある高校生に向けて、土曜日の夕方に実施している入学前英語指導プログラムである。学生が中心となって、高校生に英文法、英文読解、コミュニケーションを基礎から教えるもので、毎年実施されている。授業実施に際する細かな指導技術については担当教員が指導しているが、実施に際して、国際キャリア学科の全教員が交代で毎回本プログラムに監督者として参加し、学生の指導にあたっている。入学予定者にとって、入学前に英語力の基礎部分を築き直すことができるだけでなく、新入生同士、在学生との関係性を築くこともできることもあり、本プログラムは毎年好評を得ている。令和6年度も前年度同様に対面で実施した。あべのハルカスサテライトキャンパスにて学生が授業を行った。ここ3年間の中で最も参加する高校生の数が多かった。

(3) 「海外体験実践演習」を通したアジア圏の3か国への異文化体験プログラム

令和6年度より発足の新学科、国際コミュニケーション学科では希望者全員に、現地での授業料や滞在費を大学が負担し、フィリピン・インドネシア・ベトナムの3か国のいずれかの国に3週間の海外体験プログラムに参加するよう強く奨励している。令和6年度の初年度では43名の入学者のうち、36名が参加した。8月～9月にかけて、参加者は無事に現地での学修を終えて帰国したが、プログラム中には学生のインフルエンザへの罹患や現地特有の気候による体調不良や食当り、そして台風でのプログラムの変更などの予想外のアクシデントもあったが、無事に乗り越えることができた。帰国後、学生は海外体験の振り返りとしてプレゼンテーションを大学基礎演習Ⅱの時間に行った。

(4) TOEIC e-learning プログラム

1年生の冬学期、2年生以上には夏学期より Really English の TOEIC 講座を、条件を満たした学生に無償でアカウントを提供し、自律的に学ぶ学生への動機づけを行なった。

(5) 教員採用試験対策勉強会

国際キャリア学科には少数ながら毎年、中高の英語教員を志望する学生がおり、教職科目担当教員（奥羽教授、上野講師）が指導にあたっている。授業外でも、春休みには、教育実習、教員採用試験を見据えた授業力を身につけるために「模擬授業練習会」と称した実践型の集中勉強会を開催している。また、4月初旬から8月末にかけては教員採用試験を受験する4回生を対象にした学科独自の勉強会を開催している。令和6年度も、こうした取り組みを続け、2名の教員採用試験受験者のうち、1名が大阪市の教員採用試験（中学校英語）の1次試験を突破したが、2次試験には手術のため受験できず、合格者を出すことがかなわなかった。

(6) アジア圏の大学との国際文化交流会

日本国内にいながら、学生の異文化交流を図るべく企画したオンラインプログラムである。令和7年の1月にネパールと交流会をオンラインで実施した。交流会の中で、それぞれの国の学生が自分の国や地域の文化や歴史、慣習などを紹介し、お互いに質問しあったり、疑問点などを旧友することで、異文化交流を図った。参加した学生もそれぞれ20名以上の本学の学生が参加しており、今後も継続して実施していく予定である。

(7) 帝国ホテルとフィンランドエア関係者によるワークショップ

かつてより航空会社へ関心がある学生は国際キャリア学科には多く存在したが、それに加え近年、日本国内を訪れる外国人観光客向けのホテルが次々と開業している実態からも学生に関心を持ってもらうべくそれぞれの企業の就職担当者に来学していただき、学生への講演や指導をしていただいた。それぞれに30名前後の学生が参加する等、その関心の高まりを期待させるものであった。今後とも、このような学科独自の取り組みは続けたい予定である。

5. その他

国際キャリア学科は、実践的な外国語能力とコミュニケーション能力を習得し、変動する国際問題に関する基盤となる知識を身につけ、さらに、卒業後のキャリア形成に必要な知識とスキルを獲得し、グローバル化社会で活躍できる人材の養成を目的としている。

そのため、学生は、①外国語能力として、「読む・聞く・話す・書く」の各言語能力において実践的な教育を受け、②高い外国語能力に基づき、グローバル化した社会に即応したコミュニケーション能力を習得し、③環境・民族紛争・宗教・経済・金融等の国際的な問題を認識し、国際社会における日本の役割を実践的に把握する能力を身につける。④言語の背景にある歴史・文化・政治・経済等に関心を持ち、異文化理解への関心と意欲を身につける。⑤自ら課題を設定し他者と協働しながら問題解決にあたり、グローバル化社会で有為の人材となるために必要な知識とスキルを獲得することになる。

国際コミュニケーション学科は、英語や英語圏の文化、中国語やアジア文化などを目的に応じて学び、実践的な外国語能力を習得し、言語およびメディアによるコミュニケーション力を身につけて、異なる考え方や異文化を受容する思いやりの心を養い、社会に貢献する人材の育成を目的としている。

そのため、学生は①知識・技能として英語圏、および、アジアの言語・歴史・文化について、グローバルな視野に基づいた幅広い知識・技能を修得し、応用でき、②思考力・判断力・表現力等として客観的に思考し判断する能力を身に付け、外国語および多様なメディアを用いて、自らの思考や見解を表現し、グローバル化した社会において、異なる文化背景をもつ他者とコミュニケーションを図ることができるとともに、③主体性、多様性、協働性としてグローバル社会や、多様な文化における様々な事象に関心をもち、主体的な取り組みや他者とのコミュニケーションによって課題を発見・検討し、社会貢献に向けて他者と協働して改善・解決を図ることができるための必要な知識とスキルを獲得する。

FSD 活動を通じて、グローバル社会で活躍できる人材を育成するため、今後も様々なイベントや企画を学生に提供するとともに、授業の進め方を工夫し、学生が積極的に授業に参加できるような環境を提供できればと考えている。

以上

人文社会学部 社会学科／社会学部 社会学科

1. はじめに

社会学科では卒業認定・学位授与の方針として、以下の4つのディプロマ・ポリシーを掲げており、これらを教育の柱としている。

1つ目は、「関心・意欲・態度」である。これは、ローカルからグローバルまで、さまざまなレベルで生じている個人や社会の問題に対して、意欲的に取り組み、創意工夫しながらそれを乗り越えようとする姿勢を育むことを意味する。

2つ目は、「知識・技能」であり、人間や社会、地域やメディア、心理、歴史といった多様な領域の専門的な理論や調査・分析手法を身につけ、それらを課題解決に活用できる力を重視している。

3つ目は、「思考力・判断力、表現力」である。自ら課題を設定し、理論や調査手法、さらにICTを活用しながら、情報を多角的に収集・考察し、その成果を的確に表現できる力の養成を目指している。

そして4つ目は、「主体性・多様性・協働性」である。多様化する現代社会において、異なる立場の人々を認め合いながら積極的にコミュニケーションを取り、自分の考えを的確に伝えつつ、他者と協働して物事に取り組む能力の育成である。

2024年度は、大学における合理的配慮の提供が法的に義務化された初年度でもあり、あらゆる学生が安心して学ぶことのできる教育体制の強化がこれまで以上に求められた。また、社会全体が多様性を重視する傾向にある中、大学生活でアップデートされた自分で社会に何らかの形でかかわっていく道をみつけることが重要であると思われる。

このような制度的・社会的背景を踏まえ、社会学科では、ICT技術を活用した授業支援や、学生に丁寧に関わっていく教育運営を実践してきた。これらの取り組みは、前述のディプロマ・ポリシーの理念と深く結びついており、特に「主体性・多様性・協働性」を育む基盤として機能している。

本報告では、2024年度における「大学基礎演習Ⅰ」および「大学基礎演習Ⅱ」の授業実践を中心に、その運営内容や教育的成果、学生の反応、今後の課題について述べる。さらに、授業相互参観や合評会における授業運営方法の教員間での共有、学科独自の取り組みについても述べる。

2. 「大学基礎演習」について

(1) 大学基礎演習Ⅰについて

大学基礎演習Ⅰの概要は次のとおりである。「本科目は、全学共通の初年次教育として、建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、大学での学修に必要な技能を獲得することを目指しています。初年次における課題を自覚し、求められる基礎的知識・技能・態度を修得し、四天王寺大学社会学科の学生としての所属意識をもち、大学生活全般および卒業後の進路についての見通しを持てるようになります。大学では、高校までとは違ったアクティブ（能動的）な学びを身につける必要があります。レポートやディスカッションなどの方法で自分の考えを表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします。」令和6年度の授業計画は、次のとおりであった。

第1回 オリエンテーション・履修指導、IBU.net等の使い方の確認

- 第2回 本学での学び① 建学の精神
- 第3回 本学での学び② 個人面談、メールの書き方、学修ポートフォリオの入力
- 第4回 本学での学び③ 学内スタディツアー
- 第5回 本学での学び④ ノート・テイキング、テキストの読み方
- 第6回 【学科合同】大学生活について（先輩の話）
- 第7回 本学での学び⑤ 社会問題に関する映像資料の視聴と意見文の作成
- 第8回 図書館の利用方法（図書館ツアー）
- 第9回 レポートの書き方① レポートの書き方について
- 第10回 レポートの書き方② ミニレポートの作成
- 第11回 レポートの書き方③ ミニレポートの発表と講評
- 第12回 ディスカッション① ディスカッションの方法について、資料収集
- 第13回 ディスカッション② グループでのディスカッション
- 第14回 【学科合同】キャリアについて 先輩の話（卒業生）
- 第15回 まとめ（期末レポートの作成など）

令和2年度以降、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、授業運営に様々な制約が生まれた。しかし、令和5年5月8日から、新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類感染症へと変更になり、令和6年度はほぼコロナ禍以前の授業運営に戻ってきている。とはいえ、単に従来の授業運営を踏襲しているのではない。各クラス担任が新入生の実態把握に努め、それを学科の教員で共有しながら、柔軟に運営している。特に、入学後のオリエンテーションや、大学基礎演習Ⅰの第1回目の授業においては、大学の授業の仕組みや、授業を受講するのに必要なツールの使い方を理解できるよう、PIATAの学生の協力も得ながら、指導・支援をおこなっている。

その上で、令和6年度の大学基礎演習Ⅰの授業運営の特徴を挙げると、次の2点である。

第一に、学生と学生、学生と教員（クラス担任）とのコミュニケーションを大切にしながら、「大学での学修に必要な技能」を修得できるよう工夫している点である。第3回目に、クラス担任による学生との個別面談を位置づけ、個々の学生が抱えている不安を把握し、その解決/解消に向けて適切な指導・助言をおこなっている。また、第4回目の学内スタディツアーは、本来の目的は学内の重要施設の位置を把握することにあるが、学生にとっては、そのこと以上に、グループで協力しながらキャンパスをめぐるなかで、お互いの交流を深める機会となっているようである。このような試みを基盤にしてその後の授業を運営したことで、学生がお互いに切磋琢磨しながら、レポート課題やディスカッションに取り組む姿もみられた。大学基礎演習Ⅰの単位不認定者が例年に比べて少なかったことも、こうした試みの成果と言える。

ただ、レポートの作成やグループでのディスカッションの際に、書籍や資料の読み取りに苦戦する学生が多いことを、今後の課題として明記しておきたい。大学入学までに、「自分の考え」や「自分の意見」を表現することが強調されているためか、他者の主張や見解を理解しようとすることや、それを踏まえて「自分の考え」や「自分の意見」を練り上げる志向性が弱い。このような課題は、2年次の「基礎演習」や3・4年次の「演習」（ゼミ）での学修にも影響するため、初年次の段階でどう指導していけばよいか、学科内で議論を深める必要がある。

第二に、学科合同授業として、大学生活やキャリアについて、在学生や卒業生の話を聞く機会を設けている点である。この取り組みは、社会科学の「伝統」と言っても過言ではない。

5月に実施した「大学生活について」の回では、社会科学に在籍している5名の学生に、学生運営委員会、ピアサポーター、クラブ・サークル、教員免許や認定心理士などの資格取得について話を聞いた。いずれの学生も、1回生が学生生活を具体的にイメージできるようなスライド資料を作成してくれた。質疑応答の際には、LiveQという匿名で質問することのできるアプリを用いたこともあり、学生から多くの質問が挙がった。特に教員免許や認定心理士の資格取得をめざす学生が多いこともあり、しっかりとした質問が寄せられ、先輩の学生は本音も交えながら答えてくれた。5月ごろになると、学生生活に悪い意味で慣れてしまう学生も少なくないが、先輩の話を聞き、これからの学生生活について考え直した者も少なくない。

7月に実施した「キャリアについて」の回では、社会科学の卒業生に、現在の職務内容や学生時代のエピソード、就職活動や後輩へのメッセージなど多岐にわたる内容をお話し頂いた。令和6年度は、民間企業、放課後等デイサービス、大阪市立中学校にお勤めの3名の卒業生に登壇

頂いた。ここでも、LiveQを用いて質疑応答の時間を設けたが、卒業生のお話に刺激を受けたからであろうか、多くの質問が寄せられた。それに対して卒業生からは1回生が前向きになれるようなメッセージを多く頂いた。授業後の感想シートの記述から、学生が夏学期の大学生活を振り返るとともに、大学卒業後のキャリアについて考える契機となったことがうかがわれた。

なお、新入生オリエンテーションや履修指導（時間割の作成）などの様々な場面でPIATAに所属する学生の協力を得た。また、学内スタディツアーや図書館ツアーについては、本学の職員の皆様のご協力のもと、円滑に実施することができた。ここに謝意を表したい。

(2) 大学基礎演習Ⅱについて

大学基礎演習Ⅱの概要は、以下のとおりである。「この科目は、大学における学修と生活の課題を自覚し、必要な技能を獲得することを目標としています。具体的には、夏学期の演習をふまえて、レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させることを狙いとします。大学では、高校までとは異なったアクティヴな学び方を身につける必要があります。この科目では、さまざまな社会問題を取りあげ、テーマについてのグループ学習をすすめるなかで、「生きた学び」を体験します。そこから得たものをもとにいろいろな角度からディスカッションし、自分なりに表現できるようになることを目指すとともに、将来の「生き方」を考えるための機会とします」。

今年度の授業計画は以下のとおりであった。

- 第1回：オリエンテーション（夏学期の振り返りと冬学期の学修計画）
- 第2回：個別面談とポートフォリオ入力（1）
- 第3回：個別面談とポートフォリオ入力（2）
- 第4回：社会問題について考えるために（1）（社会問題へのまなざし）
- 第5回：社会問題について考えるために（2）（関心のある社会問題について調べる）
- 第6回：社会問題について考えるために（3）（関心のある社会問題についてディスカッション）
- 第7回：【学科合同】社会問題について考える（1）（ゲストスピーカーによる講演）
- 第8回：社会問題について考える（2）（意見発表とレポート作成）
- 第9回：【学科合同】社会問題について考える（3）（ゲストスピーカーによる講演）
- 第10回：プレゼンテーションの基本と準備（1）（振り返りとディスカッション）
- 第11回：プレゼンテーションの基本と準備（2）（テーマ設定と個別・グループ作業）
- 第12回：プレゼンテーションの基本と準備（3）（資料整理と情報収集）
- 第13回：プレゼンテーションの実際と演習（1）（プレゼンテーションに向けた役割分担とリハーサル）
- 第14回：プレゼンテーションの実際と演習（2）（プレゼンテーションの実施と相互評価）
- 第15回：まとめ

授業概要に沿った今年度の授業運営の特徴である「生きた学びの体験」と「レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させること」について、実施内容と成果をまとめておきたい。

まず「生きた学びの体験」について、今年度は、ゲストスピーカーを招いて社会問題について考える機会を、コロナ禍以前と同じ対面での合同授業というかたちで、第7回、第9回に設けることができた。具体的には、第7回では子ども食堂をはじめ、子どもやその家族を中心に地域を巻き込んだ支援をおこなっているNPO法人の方々に、自らの活動の来歴や困難や成果について語っていただいた。質疑応答の際には匿名質問アプリのLiveQを用いたことで学生ならではの視点にもとづいた率直な質問が多く寄せられた。また第11回では、視覚障害の当事者の方に登壇をお願いし、見えない経験とはいったいどういうものなのか、当事者はどのようなかわりや支援を求めているのか等について学んだ。いずれも、当事者の経験を媒介にしながら、社会問題を肌で感じ、考える機会になった。

社会学科の大学基礎演習Ⅱでは長年にわたり、このように社会問題を感じ考える視点をもつ

機会を提供しており、この授業をきっかけに子ども食堂に関心をもって卒業研究のテーマにした学生がいるなど、その後の学科での学びにもつながっていることがわかる。

他方、「レポートの書き方、ディスカッションやプレゼンテーションのスキルなどをさらに向上させること」については、クラスごとに多様な試みが実施された。基本的なプレゼンテーションの方法（パワーポイントの作り方など）は数年前に比べて高校までの学びで獲得済みの学生が多い。となれば問われるのは、いったいなにをプレゼンテーションするのかである。あるクラスでは、新聞紙面の読解をとおして現代社会における諸課題を学んだ上で、各人がそれぞれのテーマを設定した。そして、設定したテーマについての社会的背景、多様な意見や立場を各種媒体から調べてレポートを作成し、その成果を冊子にまとめて、プレゼンテーションを行った。プレゼンを聞く学生たちからはさまざまな質問が出され、応答も含めた議論が盛りあがる場면을体験することができた。現代社会を読み解くリテラシーは、経験の積み重ねのなかで獲得されていくものであり、大学基礎演習IIも、その蓄積の場のひとつとして機能することができていると考えられる。

3. 授業相互参観について

(1) 相互授業参観の実施

6月3日（月）～ 6月29日（土）にかけて、社会学科の専任教員が担当科目のいずれかを公開し、各自ひとつ以上の公開科目を参観する、という形式で実施した。公開科目と授業担当者、参観した教員は以下のとおりである。

担当教員	日時	時限	公開授業科目名	教室	遠隔	参観者
大関 雅弘	6月12日 水	2	社会学概論	2-209		五十川
曾野 洋	6月26日 水	3	演習 I	7-114		
田原 範子	6月24日 月	1	医療社会学	6-351		
藤谷 厚生	6月5日 水	2	仏教実践演習	701		
茂木 洋	6月12日 水	5	犯罪心理学	zoom	○	牧野
五十川 飛暁	6月21日 金	5	地域社会学	4-263		
上野 淳子	6月3日 月	5	幼児児童心理学	2-305		勝間（教育）
津崎 克彦	6月3日 月	4	産業社会学	2-305	○	藤谷、座主
丸岡 稔典	6月5日 水	2	地域活性化概論	5-210		田原、天野（経営）
三宅 麻希	6月19日 水	3	カウンセリング方法論	4-316		
藏口 佳奈	6月3日 月	4・5	心理学基礎実験 I	4-B155		
座主 果林	6月28日 金	1	ジェンダー論	2-205	○	田中、茂木、平田（国際）
田中 誠	6月21日 金	2	基礎演習 I	4-416		
中村 洋樹	6月14日 金	4	社会地理歴史教科教育法	4-208		藏口
吹上 裕樹	6月24日 月	4	文化研究概論	2-311		上野、大関
牧野 雅子	6月18日 火	4	刑事司法の社会学	5-210		津崎、中村、吹上

(2) 合評会の開催

合評会に先立ち、合評会資料を作成した。参観者は参観シートにコメントを記入し提出し、このコメントに対し授業担当者がリプライシートを作成し提出した。参観シートとリプライシートはIBUポータル上で学科教員が共有できるようにした。全24ページから成る合評会資料の一部を以下に示した。

令和6年度参観シート			
参観した授業科目名		産業社会学	
授業担当教員名		津崎克彦 先生	
令和 6年 6月 2日 (月)	教室: 2-205		
参観した授業に関して、お気づきの点などご記入ください。			
【授業内容】			
今日の授業のテーマは、前半が前回の授業の「距離とアノミー」、後半が「規制」であった。教室の出席者は約40名であり、遠隔授業での参加者も数人いた(参観者補足: 参観シート提出時点で参観者は把握していませんでしたが、実際は80名以上が遠隔で参加していました)。課題は、詳細なレジュメが配布され、パワーポイントのスライドにそって解説が行われた。 【授業の工夫について】 課題は、社会学の理論から最新の社会状況とデータおよびその分析にまで及んだが、受講者が理解しやすいよう、さまざまな工夫されていた。いかに5点について述べる。 ①スライドの活用: 学生は基本的に教室で受講していたが、Zoomによる同時配信も行われ、教室で受講できない学生にも十分な情報提供が行われていた。 ②詳細なレジュメ: レジュメには課題内容が事例やデータを含めて詳細に記載されている。このため、情報量が多い課題であるが、課題内容を自分のペースで理解しやすいだけでなく、あとで復習しやすい。 ③変化に富む課題スライド: 授業はパワーポイントで前にスライドを映しそれによって解説する形ですめられたが、短時間の動画やデータ・写真、分かりやすいイラストなど、変化に富んでおり、理解しやすく飽きないように工夫されていた。 ④最新のデータと分析: ②③と関連するが、「人口増減率と自殺率」の2023年のデータと分析など、最新のデータと課題で取り上げた社会学理論と関連付けた分析が取り上げられた。教員の研究をベースとした、授業でしか得られない最新の知見を学ぶことができ、参観者にとっても学ぶことが多く興味深かった。取り上げられたのは学生が関心を持ちやすいテーマに関するデータでもあり、受講生が課題と関りの事象を関連付けて考察するきっかけにもなる。 ⑤学生の課題への応答: 前回のリフレクションペーパーの紹介の時間がもたれ、学生がリフレクションペーパーに熱心に取り組んでいることが分かる。授業でも普及されていたが、学生に関心があるテーマ「現代日本と自殺」をとりあげていること、また、授業中に丁寧に応答されていることから、課題へのモチベーションが高く維持されていると考えた。			
参観者所属		参観者氏名	
社会学部社会学科		座主 黒井	

R.65

<授業担当者からのコメント>

このたびは授業を参観いただきまして、ありがとうございました。授業はレジュメをIBUネットで事前配布、授業形式はレジュメに深いながら別途作成したパワーポイントや関連映像を投影、Zoomで同時配信(ハイブリッド)、毎回のリフレクションペーパー、レポート全体で5本、という形で進めています。授業の基本構成は事前に作成していますが、学生のリフレクションペーパーや、関連する時事問題をできるだけリアルタイムで反映しようと思ひ、内容の完成は当日授業直前になることが多いです。

授業参加については、まれに通信トラブルがありますが、特に授業配信申請がなくてもZoom参加でも対面参加でも構わないと事前に周知しています。当日は教室40名程度、Zoom参加が81名ぐらいでした。録画については、要望があった場合に要望された箇所のみ、当事者に配信しています(授業配信申請者から復習したいということで要望あり)。以前は全員に録画のZoomアドレスを配布していましたが、高等教育支援センターはサーバーの容量の関係から録画にあまり積極的でないらしく、高等教育支援センターには、問題があったら勝手に削除してかまわない、学生には録画は基本的に配布しないという形で居ていますが(毎回録画を直後にZoomからダウンロードしてYouTubeにアップロードすれば問題ないのですが、さすがに大変なので)。

オンライン授業についてですが、今年3月に日本私立大学連盟から「オンラインを活用した大学教育の現状と強化・拡充」という報告書が出ています。コロナ終息後のオンライン授業について、割合を高くするが22.2%、現状維持が46.5%、割合を低くするのは8.1%(それ以外は未決断)と、コロナ後もオンライン授業に積極的な大学が多いようです。企業側ですが、この議論としては意見が割れていますが、実態としては、育児介護の社会問題化、対面が多かったエッセンスワークの機械化・合理化、意思決定層の世代交代と若年の若年力不足で、結果として、オンラインの導入が拡大、働き方はハイブリッド化していくように思います。現在の社会学科の在学生の4.4%が遠隔制高校出身で、全国平均だと恐らく2%弱程度、先日、本学社会学科希望の学生が在学中の遠隔制高校の先生と話したのですが、自由度の高いカリキュラムがニーズにフィットしているようです。参観大にいる遠隔制高校の例は遠手先を探していており、オンラインの課題導入は恐らくプラスに寄与すると思います。完全オンラインというのは議論があると思いますが、オンライン化に抵抗がない先生方は、ある程度、意図的に授業のオンライン推進に取り組み、そのことをプロモーションしてもよいように思っています。

令和6年7月11日(木)の学科会議終了後、資料に基づきZoomにて合評会を行った。参観者が参観した授業で評価できる点についてそれぞれ述べたあと、授業担当者が先にあげられた点について工夫している点などを述べ意見交換を行なった。

とくに話題にあがったのは、授業におけるICTの活用についてであり、オンラインハイブリッドやオンラインを活用した授業中の学生からの意見の集め方について、活発に意見交換が行われた。オンラインハイブリッドについては、大規模講義授業での実施例をもとに、今後の社会学科におけるオンラインハイブリッド授業の活用の可能性について議論された。社会学科は通信制高校出身の学生も多いので、講義科目についてはハイブリッド授業を推進してもよいのではないか、という意見が出された。実施例においては、パワーポイントと配布資料の準備にはある程度手間がかかるということも紹介された。オンライン出席者の出欠管理については、Googleフォームを作成しておいてその場で入力するというやり方、Zoomの参加者をダウンロードして使用することや出欠を取る際に画面をオンするなどの工夫が共有された。

Zoomを活用したある授業では、チャットを活用することによって、大規模な講義科目においても対面授業以上に学生の質問をその場で授業に組み込むことができるということが紹介された。ほかの講義科目では、学生からの意見の集め方として、質問がある程度決まっている場合はGoogleフォームを活用できるという実施例が紹介された。

講義科目において読み原稿にレジュメを用意する形の授業は、もともと聴覚障害学生向けに準備したものがほかの学生、とくに意欲のある学生にとって有益であるということが紹介され

た。今後も、さまざまな学生が入学し学ぶことを念頭におき、学科教員全体で工夫を共有しながら学びを深めることができる授業を展開していきたい。

4. 学科独自の取り組み

(1) 社会生活基本調査データを活用した授業展開

社会学科では決められたいくつかの科目を履修すると社会調査士の資格を取得可能である。その科目の一つが社会統計学である。この授業では実際に手を動かしながらデータの統計的解析手法を学習する。授業では総務省が国民の普段の行動や時間の使い方を知るためにおこなっている社会生活基本調査のデータを扱った。社会生活基本調査のデータは個人情報を除いた匿名の個票データが学術利用などのために限定して公開されている。そこで、授業ではこのデータを利用し、SPSSの操作方法の練習と実際のデータ分析の機会を提供した。身近なデータなので興味も湧きやすく、解析の方針をイメージしやすくなった。

(2) 合理的配慮を必要とする学生への支援と教育環境の工夫の共有

2024年度は、私立大学における合理的配慮の提供が法的に義務化された年度であり、社会学科においても、あらゆる学生が安心して学ぶことができる教育体制の強化が求められている。これまで社会学科では様々な合理的配慮を行ってきたが、こうした制度的背景を受けて、合理的配慮を必要とする学生に対して、状況に応じた丁寧な対応を行う取り組みを進めた。

とりわけ、対面授業が主となる現在の授業形態においても、コロナ禍で培われたICTスキルを活かし、オンラインによる補助的な参加手段や、オンデマンド教材の提供、クラウドを活用した資料配布など、授業へのアクセスを多様化する工夫が継続されている。これにより、体調や心理的要因等により通学が困難な学生にも、学びの機会を保障することが可能となった。字幕をリアルタイムで提示する方法やオンデマンド教材の自動字幕生成の方法などを活用し、聴覚障害をもつ学生に合理的配慮を行った。これはほかの学生にも多様な学びの手段を提供することとなった。

また、こうした実践は個別の教員にとどまらず、学科全体での意識共有と連携を図るために、3. に挙げた授業相互参観と合評会ではもちろんのこと、必要に応じて学科会議や教員メーリングリストを通じて積極的に共有されている。各教員が自身の対応例や工夫を紹介することで、他の教員にとっての参考となり、教育活動の質の底上げにもつながっている。

本FD活動は、ディプロマ・ポリシーが掲げる「多様性を認め、他者と協働できる人材の育成」という目標の実現に資するものであり、今後も継続的に実践と共有を重ねていくことが重要であると考えられる。

人文社会学部 人間福祉学科／社会学部 人間福祉学科

本報告書の構成は以下の通りである。

1. はじめに
2. 大学基礎演習について
3. 授業相互参観について
4. 学科独自の取り組みについて
 - (1) ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会
 - (2) ソーシャルワーク実習・実習報告会
 - (3) 社会福祉実習懇談会（社会福祉士・精神保健福祉士）
 - (4) 社会福祉士国家試験対策講座
 - (5) 精神保健福祉士国家試験対策講座
 - (6) 福祉系公務員受験対策講座
 - (7) その他

1. はじめに

本報告書は、令和6年度に行った人間福祉学科のFD活動をまとめたものである。

本学科のFD活動は、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに則って、以下の2点（Ⅰ、Ⅱ）を目的としてA～Hの活動に取り組んでいる。

- Ⅰ 講義・演習との緊密な協働を通して実習教育を充実させる。
 - A. 大学基礎演習
 - B. 授業相互参観
 - C. ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会
 - D. ソーシャルワーク実習・実習報告会
 - E. 社会福祉実習懇談会（社会福祉士・精神保健福祉士）
- Ⅱ 受験対策講座を充実させることを通して国家試験（社会福祉士・精神保健福祉士）の合格率を向上させる。
 - F. 社会福祉士国家試験対策講座
 - G. 精神保健福祉士国家試験対策講座
 - H. 公務員社会福祉職受験対策講座

以上のA～Hについて、FD活動としての概略を説明する。

A. 大学基礎演習

従来のこの科目の目的は、1年生にこれからの学習、進路、関係づくりの基礎を提供しながら、「学びのスキル」を習得させることである。教員の提示する課題設定に対し、学生が主体的に取り組む発表するものであり、「学生が主体的に学ぶ」ことを目指している。夏学期は①学びのプランを組み立てる、②学びのスキルを高める、③コミュニケーションスキルを高める、を中心に構成し、教員は課題レポートや個人面談を利用して学生の状況把握

に努め、学生が大学生活に円滑に適応できるようにサポートしている。冬学期は、11月末および12月初に実施する見学実習を軸に、そのための事前学習と事後のプレゼンテーションで構成し、2年次以降の専門的な学修への動機づけを高めるようにしている。なお、本科目は学科の全教員で担当している。

B. 授業相互参観

令和6年度は夏学期の開講科目から「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目を中心にした参観科目とは決めずに授業相互参観をおこなったが、公開科目としては「社会福祉士」「精神保健福祉士」養成の指定科目が多く公開された。また参観者があった科目については事後に合評会を実施した。

C. ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会

講義科目と並んで実習を支える基礎となる演習科目に関して、原則年度末に年1回、新旧の科目担当者が一堂に会して、授業方法の実際を相互に開示し、課題等について議論している。この打ち合わせは、第1に教員のファカルティの中核である教授力（とりわけ演習及び実習指導）を高める場、第2に実習生としての態度形成にかかわる個別指導上の課題を共有する機会、第3に社会福祉士養成カリキュラムの課題や改善点を見出す場として機能している。

D. ソーシャルワーク実習・実習報告会

A～Cの活動の集大成として学生主体による「ソーシャルワーク実習報告会」を開催した。実習報告会は学生（3年生中心、編入生など一部4年生）の主体性を高める目的で、準備から当日の進行においてもすべて学生が行うものであり、文字通り主体的な学びになっている。

昨年度と同様に全体発表は実施せず、分科会形式で開催、聴講者を変え同じ発表を繰り返して意見交流を行った。昨年度は4回の繰り返しであったが、発表は録画しており後からでも視聴が可能であることと、対面では質疑応答時間を多くとりたいという学生の意向を反映し、30分の発表を3回繰り返す形としている。

聴講者は次年度「ソーシャルワーク実習B」を希望する学生（大半が2年生）である。それに加えて当日の発表を録画したものを後日1年生にも視聴させた。この実習報告会によって、24日間、180時間以上に及ぶソーシャルワーク実習Bのイメージや自分の目指すべきキャリアとしての社会福祉士像を確立させてもらいたいと考えた。

また、今年度も、実習の履修を希望する1年生には、「社会福祉士に向けての実習」のイメージを早くより持ってもらう目的で、それぞれのグループの発表をZoomシステムの活用によって録画し、その中で関心のある発表4つを選択し、ビデオ聴講することを春季課題として義務付けた。1年生の段階から実習報告会に参加することで、自分の目指すべきキャリアとしての「社会福祉士」をイメージし、意欲を持って学ぶ姿勢にもつながってくる重要なものであると考えている。

E. 社会福祉実習懇談会（社会福祉士・精神保健福祉士）

社会福祉士および精神保健福祉士養成に携わる実習指導者と教員とで、実習指導のあり方を振り返る実習懇談会は、例年2月に行われ、実習教育に関する特定のテーマについて議論する機会である。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を理由に昨年度までは開催を見合わせていたが、社会福祉士実習懇談会は今年度より再開した。懇談会には17施設24名の実習先関係者が参加、実習担当教員と実習教育の課題について懇談した。精神保健福祉士実習懇談会は実習参加学生が少なく、実習先とも日頃から十分にコミュニケーションが取れていることから開催は見送っている。

F. 社会福祉士国家試験対策講座

講義を担当するのは東京アカデミーのインストラクターであり、本学科の教員は「国家試験受験支援委員会」のメンバーとして、授業の円滑な運営にかかわる業務を担当する役割を担った。3年生は、夏期と春期の休暇中に集中講義を実施している。前年度から対面授業で実施している。新カリキュラムでの初の試験となったが、新卒者の合格率は78.4% (29/37) で、例年より高い合格率となった。一方、既卒者は34.0% (16/47) と、昨年度の41.5% (22/53) に比べ低くなっている。旧カリキュラムで学修した既卒者への受験支援が今後の課題である。

G. 精神保健福祉士国家試験対策講座

昨年度までと同じく、本学科の石田が引き続いて講座を担当している。新卒者の合格率は100.0%（5名中5名合格）で、全員が社会福祉士とのダブル合格である。なお既卒者1名も受験しているが不合格であった。

H. 公務員社会福祉職受験対策講座

公務員社会福祉職に求められる資格（必須ではないが）として、社会福祉士や精神保健福祉士が位置付けられる。公務員社会福祉職受験対策として集中講義で開講している。公務員社会福祉専門職採用試験の過去問を取り寄せ、社会福祉に関する専門試験を中心に講座を組み立てている。公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な講座であるが、社会福祉協議会や独立行政法人などの採用試験にも役立っている。

2. 大学基礎演習について

（1）大学基礎演習Ⅰ

建学の精神をもとに、大学における学修と生活の意義を自覚し、必要な技能を獲得することを目標とする。大学において、求められる基礎的知識・技能・態度、ソーシャルワークに関する基本的な知識を修得し実践する。また、人間福祉学科への帰属意識を高め、学科内における仲間意識を育み、大学生活全般への見通しをもてるように、授業計画を策定する。授業形態は、全学共通の到達目標に則りながら、演習の形で行う。

今年度は、コミュニケーションスキルを高めるためのグループワーク、学びのスキルを

高めるためのノートテキングやレポートライティング・スキルの講義、学びのプランを主体的に組み立てるための卒業生の講義、学習ポートフォリオを活用した学びの目標の設定などを実施した。

	日 程	内 容
1	4月5日(金)	履修登録説明(大西) 履修相談: 和の精神・授戒会説明(原・上横)
2	4月11日(木)	「ボタジエプロジェクト」紹介(学生) コミュニケーションスキルを高める① 他者紹介・自己紹介(石田)
3	4月18日(木)	P R O G動画視聴, P R O Gテスト(上横)
4	4月25日(木)	図書館ガイダンス(図書館課)
5	5月2日(木)	学修ポートフォリオ入力(石田・上横) クラス別個人面談①(各教員)
6	5月9日(木)	学びのプランを組み立てる① 学生企画プロジェクト紹介(学生)
7	5月16日(木)	学びのスキルを高める① ノートテキング・スキル(鳥海)
8	5月23日(木)	学びのスキルを高める② レポートライティング・スキル(山下)
9	5月30日(木)	コミュニケーションスキルを高める② 答えのあるグループワーク(濱田)
10	6月6日(木)	コミュニケーションスキルを高める③ 答えのないグループワーク(山下)
11	6月13日(木)	学びのプランを組み立てる② 卒業生講師 P R O Gテストについて(各教員)
12	6月20日(木)	学びのプランを組み立てる③ O S A K A 6 S M I L E S 紹介(四天王寺福祉事業団他)
13	6月27日(木)	学びのプランを組み立てる④ 児童福祉分野(上横) 障害者福祉分野(原) 高齢者福祉分野(笠原)
14	7月4日(木)	学修ポートフォリオ入力(石田・上横) クラス別個人面談②(各教員)
15	7月11日(木)	学びのプランを組み立てる⑤ 高齢者福祉・認知症サポーター養成講座(外部講師・笠原) クラス別個人面談③(各教員)

(2) 大学基礎演習Ⅱ

「大学基礎演習Ⅰ」で学んだ「建学の精神」と「本学で学ぶ意義・目的」を深めるとともに、11月と12月に実施する見学実習を含む学外活動等とその事前・事後学習を通して2年次以後の学修に必要な基礎的知識・技能・態度のステップ・アップを図る。また、授業全体を通して、自分の進路について考えることができるよう学修を深める。

見学実習先に高齢者施設や障害者施設が含まれることや、学生が健康管理や衛生管理の意識を身につけることを目的とし、すべての実習参加学生と引率教員に「健康管理表」(学科独自作成)を配付して、実習2週間前から毎日検温および体調チェックを求め、その提出をもって見学実習参加を認めることとした。

	日 程	内 容
1	9月26日(木)	シラバスの確認と授業計画について クラス別個人面談①
2	10月3日(木)	見学実習について、謝礼金の説明 見学実習予定先の調査①(児童福祉施設)
3	10月10日(木)	見学実習予定先の調査②(高齢者施設) 学位授与方針の自己評価入力
4	10月17日(木)	見学実習予定先の調査③(障害者施設) 健康管理表、誓約書の説明と配付
5	10月24日(木)	各施設説明・実習先希望調査・実習先決定 実習の心得(濱田)
6	10月31日(木)	実習ノートの書き方(原) 実習ノート配付 誓約書提出
7	11月7日(木)	特別講師
8	11月14日(木)	事前学習をもとにプレゼンテーション資料作成
9	11月21日(木)	見学実習先最終確認と実習ノート作成
10	11月28日(木)	見学実習① 12月5日見学実習の学生は休講
11	12月5日(木)	見学実習② 11月29日見学実習の学生は休講
12	12月12日(木)	実習ノート作成・提出、プレゼンテーション資料作成
13	12月19日(木)	実習ノート返却、プレゼンテーション資料完成・提出
14	12月26日(木)	プレゼンテーション、実習ノート提出
15	1月9日(木)	学科目標の省察、3セメ学科目標作成 来年度以降の実習に関する授業について、実習の手引き配付 クラス別個人面談②

見学実習一覧表（37名）

実施日	見学実習先	参加学生数	引率教員
11月28日	ぼんぽこはうす	9人	原
11月28日	羽曳野荘	9人	上續
11月28日	清心寮	6人	笠原
11月28日	大阪市中央こども相談センター	8人	川下
12月7日	四天王寺悲田院養護老人ホーム	1人	大西
12月5日	四天王寺悲田院在宅	1人	鳥海
12月5日	四天王寺悲田富田林苑	3人	笠原

3. 授業相互参観について

（1）実施計画

本学科の授業相互参観は、「社会福祉士」「精神保健福祉士」国家試験受験資格取得のための指定科目および「教科に関する科目」を中心に、所属教員が公開授業を計画し、その後予定された日程等をふまえて授業相互参観を実施した。公開する科目は例年冬学期開講科目から設定していたが、全学の方針として、夏学期と冬学期を隔年で実施することになったことから、今年度は夏学期開講科目の中から設定している。その詳細は（2）の通りであり、参観者のあった科目についての合評会および参観シートの概要は（3）の通りである。

（2）授業相互参観の実施

授業相互参観・合評会の実施は下記の表の通りである。

担当教員	月日	時限	公開授業科目名	教室	合評会
石田 晋司	6月4日	火1	精神保健福祉の原理	6-301	授業後
上續 宏道	6月12日	水5	児童・家庭福祉	6-351	授業後
笠原 幸子	6月11日	火2	高齢者福祉	6-351	授業後
鳥海 直美	6月13日	木1	ソーシャルワークの基盤と専門職Ⅰ	6-301	授業後
濱田 佐知子	6月12日	水4	介護福祉	6-351	授業後
原 順子	6月3日	月2	障害者福祉	6-254	授業後
川下 維信	6月7日	金3	心理学と心理的支援	6-352	授業後
大西 敏浩	6月21日	金5	加齢・障害の研究	4-306	授業後

（3）合評会の内容

授業参観者がいた科目については予定通りに合評会が実施された。その後授業参観者が「参観シート」を作成し高等教育推進センターに提出した。以下の内容は授業参観者の「参観シート」を転記したもので、書式および文体は不統一である。

科目名：精神保健福祉の原理

- ・丁寧な説明と必要に応じての問いかけにより、学生の理解に繋がっているように感じた。
- 特に学ぶ側の立場に立った授業運営などは参考にしたいと考える。また、リアクション

ペーパーを通じて学生の理解度や意見・感想を積極的に聞きだそうとしておられた。自身も行っているが、よりきめ細やかな対応がこれからの学生には必要なのだということを改めて考えさせられた。

- ・音楽療法を題材に学生が理解しやすいように授業展開がなされていました。さらに、これらの取り組みは、生活支援や療法、情報科学などのフォーマル・インフォーマルからなるソーシャルワークであること、オープンダイアログは、議論ではなく対話を通して当事者が自発的に発言することによってシンプルに能力を発揮することの大切さが学生に伝わる内容でありました。

科目名：高齢者福祉

- ・出席確認時も学生に声をかける。教員の声は後ろまでよく聞こえる。座席指定ではないが、学生は全員前に座っている。
- ・15回を通した全体としての「みんなで作ったマイ高齢者福祉テキスト」というテーマがある。ほとんどの学生がノートパソコンを持参し、授業を聴きながら作成できるようになっており、自然と学習できるように工夫されている。
- ・本日のテーマは「介護保険制度について」。学生に身近な話題から入る。例えば自動車の保険などと比較し、説明はわかりやすい。また、教壇に立って授業をするのではなく、教室をまわるなどしながら授業をするので、寝ている学生はいない。45分を過ぎたところで、一度理解度の確認をする。ポイントを示し時折指名して質問をする。
- ・国家試験問題にも言及し、国家試験に出やすいところは、例えば「認定調査は誰がするのか。介護支援専門員と間違いやすいが、介護認定調査員がする」など強調し覚えやすくしている。最後に Kahoot を活用し小テストを実施していたが、学生は全員積極的に参加していた。

科目名：介護福祉

- ・当日は「入浴・清潔保持の介護」「排泄の介護」についての講義であった。出欠確認については一人ずつ個別に名前を呼ばれながら確認されていた。学生との関係性・距離感も近くなり、正確な本人確認にもつながると思った。
- ・教科書のみならず、配布プリントやパワーポイントを使用され、ビデオを交えての授業内容の説明や確認、プリントへの書き込みなどさせることを通じて、学生の理解を促す工夫をされていた。
- ・先生ご自身の、福祉現場での職場経験や、北欧へ視察体験などから、具体的な事例を織り交ぜて講義をすすめておられ、学生にとってはより身近で具体的な内容となり、理解しやすい内容にもなっていたと感じた。
- ・社会福祉士受験予定学生のために必要な重要事項についてもピックアップされてお話をされている所も参考になった。
- ・我々の日常生活の中で基本的かつ重要な内容に関する支援にまつわる授業内容でもあり、学生も興味深そうに受講していた。また、私語など授業進行を妨げるような態度の受講者はおらず、指定された座席で静粛に授業に臨んでおり、日頃のご指導の賜だと感じた。

科目名：障害者福祉

- ・スライドの事前掲示、リアクションペーパーの提出に IBU.net が活用されていました。
- ・冒頭の挨拶の場面で発声を促すことによって授業への参加態度が形成されていました。
- ・「大学で合理的配慮は提供されているか」という質問がみられましたが、障害者福祉を机上の知識ではなく、大学生活に引き寄せて現実的な理解が促されていました。
- ・強制不妊手術の違憲判決を取り上げながら、憲法の具体的な理解が促されていました。
- ・動画の視聴にあたって「障害者の方は『大変だった』で終わるのではなく、現在はどうなのか、という視点をもってほしい」という問題意識が共有されていました。
- ・日本の障害者運動を拓いた花田春兆氏らのインタビューを初めとする動画は、障害当事者の視点から日本の障害者福祉の歴史が捉えられ、教材研究の成果が表れていました。
- ・動画の解説にあたって、原先生が経験されたエピソードや、教科書のデータが適切に用いられていました。

科目名：加齢・障害の研究

- ・授業準備をととてもよく行っておられると感じ入りました。PPTの内容も詳しく、視覚効果（写真や色使い等）をうまく使っておられました。
- ・通常テキストには書いていない情報、例えば都道府県により療育手帳の名前が違ふことを表作成されるなど、学生にとってとても興味深い内容になっていました。
- ・テキスト使用ではなく大西先生手作りのプリントを使用され、写真を利用されたり重要な部分を太い線で囲み、穴あき問題を一緒に考えて回答をパワーポイントで示すなど、「とてもよくわかる授業」をされておられました。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会

年1回、「ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会」を開催し、「ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の担当者7名（非常勤講師1名を含む）の参加のもと、今年度の授業の振り返りと次年度の演習指導にかかわる改善点及び留意点の確認が行われている。今年度は令和7年3月31日に担当教員による打ち合わせを実施した。

議事録は次のとおりである。

(以下、議事録を転載)

2025年4月5日

ソーシャルワーク演習 担当者打ち合わせ 議事録

日 時:2025年3月31日(月)10時00分~12時00分

会 場:四天王寺大学 事務局棟1階 第1会議室

出席者:脇田, 大西, 濱田, 吉田, 鳥海(敬称略)

欠席者:上續,原(敬称略)

1. 2024 年度をふりかえって

担当教員一覧(敬称略)

科目	学期	時間割	担当者
ソーシャルワーク演習Ⅰ	冬	月曜 5 限	上續, 鳥海, 原, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅱ	夏	月曜 5 限	鳥海, 濱田, 原, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅲ	冬	月曜 4 限	鳥海, 濱田, 原, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅳ	夏	月曜 4 限	大西, 鳥海, 吉田, 脇田
ソーシャルワーク演習Ⅴ	冬	水曜 2 限	大西, 川下, 鳥海, 濱田, 吉田

・受講状況(単位修得状況, 授業内容の工夫, 授業運営にかかわる課題など)

・受講アンケート(自由記述回答)の情報共有

→授業中に時間を確保しても授業評価アンケート(IBU-net)の回答率が低い。別途、学期末にふりかえりシートを用意して、自己評価を兼ねて授業への感想や意見の記載を求める。

2. 2025 年度に向けて

・担当予定教員一覧(敬称略)

科目	学期	時間割	担当者	最大履修人数
ソーシャルワーク演習Ⅰ	冬	月曜 5 限	上續, 鳥海, 脇田, 吉田	48
ソーシャルワーク演習Ⅱ	夏	月曜 5 限	鳥海, 濱田, 脇田	34
ソーシャルワーク演習Ⅲ	冬	月曜 4 限	鳥海, 濱田, 脇田	36
ソーシャルワーク演習Ⅳ	夏	月曜 4 限	大西, 鳥海, 吉田, 脇田	39
ソーシャルワーク演習Ⅴ	冬	水曜 2 限	大西, 川下, 鳥海, 濱田, 吉田	39

・演習Ⅰのクラス数について

→個別指導を充実させる観点から吉田先生のご協力を得て 4 クラスで運営する。

【全クラス共通】

・初回オリエンテーション

→共通シラバスと各クラスの授業計画を配付する。

・14 回 100 分授業に向けて

→前年度の授業計画 15 回目「ふりかえり・まとめ・自己評価・相互評価」を削除して 14 回目とした。

→受講者にとって集中力がもたないことも考えられ、教員の裁量で小休憩を取り入れる。

→リフレクションペーパーの記載時間を十分に確保することができる。

・補講

→原則、対面とする。やむを得ない場合はオンデマンドとする。

・欠席遅刻の取り扱い

→「実習の評価方法に準じて遅刻・欠席は認められない。体調管理も実習の評価項目に含まれることによる。遅刻も欠席として取り扱うとともに、欠席は原則として2回までとする。」

・学校感染症による登学停止

→実習に向けた事前学習の機会を保障することを目的として、課題(レポート、ワークシート等)を提示し、提出期日までの提出をもって出席として取り扱う。

・評価方法

→「レポート(各授業回の小レポート、最終レポート等)60%

平常点(振り返りペーパー、ロールプレイの参加態度、グループディスカッション中の発言、授業内での発表等)40%」

→「各授業回の小レポート」には、毎回の課題・宿題・ワークシートを含め、評価配分を受講生に説明できるようにしておく。

【演習Ⅱ】

→期末課題(各クラス共通)は個別支援計画書とする。

→脇田先生クラスでは2回にわたって高齢者(利用者)の方に授業にZoomで参加いただく。
手土産代(3,240円)にかかわる学科予算の追加申請を行う。次年度は予算申請に含める。

【演習Ⅲ】

・ソーシャルワーク実習A[実習期間:11月10日(月)~11月23日(日)]

→2コマの補講を実施する(各クラスにおいて学生との協議を要する)

→今年度、脇田先生クラスは土曜日に実施、鳥海クラスは土曜日に和らぎ苑との地域連携活動(障害児のアート活動)にレクリエーション実習として参加した。

→期末課題はクラスによって異なり、レクリエーションのプログラミングに関連するテーマや個別支援計画書の作成となっている。

→次年度も小林弘先生による「手づくりおもちゃ」ワークショップを合同授業にて実施する。

【演習Ⅳ】

・ソーシャルワーク実習B[実習期間:6月2日(月)~7月3日(木)]

→5コマの補講を5月24日(土)に合同授業(羽曳野市社会福祉協議会による特別講義/6-253)として実施する。

→5月12日に合同授業として脇田先生による特別講義を実施。地域での実践を社会福祉士の専門性・視点に引き寄せた解説をご依頼する。(6-301)

3.クラス・担当者(別紙)

- ・配慮を要する学生等にかかわる情報共有(略)

4.その他

- ・障害学生には授業方法を説明した上でピアサポーターの要否について本人に決定してもらう。
- ・教育実習と同様にソーシャルワーク実習にも GPA の基準が必要ではないか。
- ・時間割の配当時間や担当教員についての協議(略)

以上

(転載終わり)

演習科目において、対話や討議などの受講生間のコミュニケーションや、グループによる協働作業は授業の大きな構成要素である。実習に対する動機形成や、コミュニケーションにかかわる主体性の涵養に向けて、教員が継続的にかかわり、実習生としてのレディネスを培う機会となることが期待される。

打ち合わせでは、学生について気になったことや、担当教員が把握した実習意欲などを共有し、実習科目と関連づけていくことが目指されている。

なお、「打ち合わせ会」および「ソーシャルワーク演習」全体の主担当は鳥海である。

(2) ソーシャルワーク実習・実習報告会

「ソーシャルワーク実習B」は、社会福祉士の指定実習として5週間にわたり現場施設等に通う実習である。例年6月上旬から7月上旬に大半の学生が実習に行き、若干名が8月の夏季期間中に実習を実施している。実習先の受け入れ状況に応じた実習期間を設定したこともあり、スケジュールにずれは生じたものの、いずれの施設でも規定の実習時間を満たすことができた。

令和6年12月14日(土)に「実習報告会」を実施した。約5週間の「ソーシャルワーク実習」を終えた3回生など(一部4回生)が発表学生となり、2年生など(一部3回生)の聴講学生に対してその経験とそこから得られた知見を毎年報告している。

この「実習報告会」は、当日の司会進行など、すべて学生主体で行われている。プログラムや役割分担の企画などについて従来は教員が主に担当していたが、平成28年度から学生の主体性を高めるべく学生による実行委員会を作り、プログラムの変更などを企画している。

今年度も昨年度と同様に対面開催を前提に分科会形式で行うことにした。また、昨年度は1発表25分間を4回繰り返していたが、質疑応答時間を多くとりたいという実行委員会での決定を反映し、1枠を30分に拡大し、それ3回繰り返す形としている。学生の発表は、いずれのグループ(分科会)も優れたプレゼンテーションとなっていた(参照:[i] プログラムおよび[ii] グループ発表会のテーマ等)。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前は実習の履修を希望する1年生にも対面で聴

講することを義務づけていたが、昨年同様に記録した動画を視聴することを「ソーシャルワーク実習指導A」の事前課題の一つとした。今後も学生の主体性を高める場、学年を越えた学びの交流の場となるように引き続き展開していきたい。

なお、「ソーシャルワーク実習・実習報告会」の担当は大西（主）、鳥海（副）、川下、濱田、吉田〔教育学部〕であり、報告会には学科の教員も参加している。

[i] プログラム

令和6年度 社会福祉施設実習報告会 プログラム
12月14日（土） 9:50～14:45

「同じ目標を目指すみんなへ～実習でみつけた学びと成長～」

1 グループ発表会（第1部）

9:30 午前発表者準備

9:50 資料配布 連絡事項等説明

【グループ発表】30分（発表+質疑交流を含む）

10:00	1回目 発表/質疑交流 発表A-Fグループ
10:30	移動・休憩（10分間）
10:40	2回目 発表/質疑交流 発表A-Fグループ
11:10	移動・休憩（10分間）
11:20	3回目 発表/質疑交流 発表A-Fグループ
11:50	
11:55 休憩	

2 グループ発表会（第2部）

12:30 午後発表者準備

【グループ発表】30分（発表+質疑交流を含む）

12:45	4回目 発表/質疑交流 発表G-Lグループ
13:15	移動・休憩（10分間）
13:25	5回目 発表/質疑交流 発表G-Lグループ
13:55	移動・休憩（10分間）
14:05	6回目 発表/質疑交流 発表G-Lグループ
14:35	
14:40	会議アンケート記入 14:45 聴講計画書・交流アンケート・出席票提出

ポイント

- 1) 発表時間（15分目安）と質疑交流の時間配分は各クラスに任せます。
- 2) ノートを見る時間は質疑交流以外に時間を決めて全員に回るようにします。
- 3) 質問紙を通して書いてもらい、それを回収することで質疑交流していきます。

[ii] グループ発表会のテーマ等

3 グループ発表会 資料目次

【発表方式】 発表+質疑交流30分（発表15分以上）

【発表形式】 第1部 発表A-F

1回目 10:00～10:30

2回目 10:40～11:10

3回目 11:20～11:50

第2部 発表G-L

4回目 12:45～13:15

5回目 13:25～13:55

6回目 14:05～14:35

発表者	分野	テーマ	グループ	教室
発表A	児童福祉 児童虐待防止	こどもYQをめぐり	発表A-Fグループ	A-209
発表B	福祉	遠慮ではたらくソーシャルワーカー	発表A-Fグループ	A-260
発表C	障害・地域 福祉など	多職種・他機関連携	発表A-Fグループ	A-261
発表D	障害者	地域の居場所について	発表A-Fグループ	A-206
発表E	障害・地域 福祉など	在宅で生活する高齢者	発表A-Fグループ	A-207
発表F	障害・地域 福祉など	認知症との関わり	発表A-Fグループ	A-208
発表者→2000字以内で発表内容を要約し、発表資料に添付し、発表資料の裏面に貼付してください。				
発表G	障害者 福祉など	本人の視点に立った支援	発表G-Lグループ	A-209
発表H	福祉事務所	社会福祉士の専門性	発表G-Lグループ	A-260
発表I	福祉	障がい者を取り巻く見解～必要不可欠な社会へ	発表G-Lグループ	A-261
発表J	障害者	ふつたにくりすしあわせ～障害者福祉施設生活センターの意義へ	発表G-Lグループ	A-206
発表K	障害者	障害者の権利と活動	発表G-Lグループ	A-207
発表L	障害福祉 施設/福祉 施設	利用者によりあう支援	発表G-Lグループ	A-208

（3）社会福祉実習懇談会（社会福祉士・精神保健福祉士）

社会福祉士および精神保健福祉士養成に携わる実習指導者と教員とで、実習指導のあり方を振り返る実習懇談会は、例年2月に行われ、実習教育に関する特定のテーマについて議論する機会である。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を理由に昨年度までは開催を見合わせていたが、社会福祉士実習懇談会は今年度より再開した。17施設24名の実習先関係者と本学実習担当教員が参加し、以下のプログラムに沿って、実習教育の課題について懇談した。

日時：令和7年2月15日（土）13時～15時

場所：四天王寺大学4号館アクティブラーニング教室（4-B152）

内容：1 学科からの説明

- ・令和6年度の実習依頼状況
- ・令和6年度の実習実施状況
- ・令和6年度の実習の課題

2 グループ討議

- ・新カリキュラムでの実習（2か所実習）を終えて
 - ・実習カリキュラム（「実習A」と「実習B」の実習内容の棲み分けなど）
 - ・実習評価
 - ・実習学生の情報共有
 - ・配慮が必要な学生の実習
 - ・実習巡回
 - ・実習施設・機関と養成校（本学）との連携
 - ・その他

3 まとめ

- ・グループ討議を終えて（各グループからの報告）
- ・令和7年度実習に向けて

精神保健福祉士実習懇談会については、例年実習参加学生が少数で、実習先も限定されており、日頃から十分なコミュニケーションが取れているため、今年度も開催を見合わせることにした。

（4）社会福祉士国家試験対策講座

1. 全体の概観

3年生、4年生対象の国家試験対策講座は、東京アカデミーと協働で実施している。講義を担当するのは東京アカデミーのインストラクターであり、本学科の教員は「国家試験受験支援委員会」のメンバーとして、授業の円滑な運営にかかわる業務を担当する役割を担った。東京アカデミーとの連絡調整は、原（夏学期）、笠原（冬学期）、上續が主として行った。

3年生の社会福祉士国家試験対策講座である「社会福祉探求Ⅳ」は、これまでの指定科目や関連専門科目の学びと連動させながら、国家試験受験を視野に入れた科目である。具体的には「福祉行財政と福祉計画」、「福祉サービスの組織と経営」、「就労支援サービス」について体系的に学んでいる。「社会福祉探求Ⅴ」では、「社会福祉探求Ⅳ」で学んだ科目を中心に復習の講義時間を取り入れ、今回は「社会調査の基礎」、「相談援助の理論と方法」、「社会保障」「権利擁護と成年後見制度」「更生保護制度」について講義を実施した。

4年生には「社会福祉研究Ⅰ」「社会福祉総合研究Ⅰ」「社会福祉研究Ⅱ」「社会福祉総合研究Ⅱ」を毎週火曜日と夏季休暇中に実施した。授業に係るさまざまなこと（講師との連携、小テストの準備、出欠等）は担当教員がローテーションを組んで行った。

令和7年2月2日（日）に実施された第37回社会福祉士国家試験は新カリキュラムでの初の試験となったが、本学科の新卒者の合格率は78.4%（29名/37名）で、例年より高い合格率となった。

2. 各講座科目日程等

学年	セメスター	科目名	開講期間	担当者
3年	5	社会福祉探求Ⅳ	夏学期集中講義期間	石田

	6	社会福祉探究Ⅴ	冬学期集中講義期間	石田
4 年	7	社会福祉研究Ⅰ	夏学期・火曜 4 限・5 限＋集中	全員＊
		社会福祉総合研究Ⅰ		全員＊
	8	社会福祉研究Ⅱ	冬学期・火曜 4 限・5 限	全員＊
		社会福祉総合研究Ⅱ		全員＊

■社会福祉研究Ⅰ・社会福祉総合研究Ⅰ 夏学期

夏学期

	2024			2 限 (10:55~12:25)	3 限 (13:15~14:45)	4 限 (15:00~16:30)	5 限 (16:40~18:10)
回	月	日	曜	科目	科目	科目	科目
0	4	9	火			オリエンテーション (15:00~15:30) / 夏学期プレ試験 (第1回学内模試) (15:40~17:55)	
1		16	火			権利擁護を支える法制度①	権利擁護を支える法制度②
2		23	火			刑事司法と福祉①	刑事司法と福祉②
3		30	火			心理学と心理的支援①	心理学と心理的支援②
4	5	7	火	医学概論①			
5		14	火			地域福祉と包括的支援体制①	地域福祉と包括的支援体制②
6		21	火			ソーシャルワークの理論と方法【共通＋専門】①	ソーシャルワークの理論と方法【共通＋専門】②
7		28	火			社会学と社会システム①	社会学と社会システム②
*	7	30	火			社会福祉研究Ⅰ定期試験	

集中講義

8	8	2	金	社会保障①	社会保障②	社会保障③	
9		6	火	社会保障④	保健医療と福祉①	保健医療と福祉②	
10		8	木	社会福祉の原理と政策①	社会福祉の原理と政策②	社会福祉の原理と政策③	
11		9	金	高齢者福祉①	高齢者福祉②		
12		22	木	貧困に対する支援①	貧困に対する支援②	児童・家庭福祉①	国家試験受験手続説明会 (教務課)
13		23	金	児童・家庭福祉②	障害者福祉①	障害者福祉②	社会福祉総合研究Ⅰ定期試験

■社会福祉研究Ⅱ・社会福祉総合研究Ⅱ 冬学期

冬学期

	2024			2 限 (10:55~12:25)	3 限 (13:15~14:45)	4 限 (15:00~16:30)	5 限 (16:40~18:10)
回	月	日	曜	科目	科目	科目	科目
0	9	24	火			オリエンテーション及び冬学期プレ試験	
1	10	1	火			福祉サービスの組織と経営①	福祉サービスの組織と経営②
*		5	土	ソ教連模試 (10:00~12:15/13:00~14:45)			
2		8	火			社会福祉調査の基礎①	社会福祉調査の基礎②
3		15	火			社会保障⑤	社会保障⑥
4		22	火			医学概論②	保健医療と福祉③
5	11	29	火			心理学と心理的支援③	社会学と社会システム③
*		9	土	中央法規模試 (10:00~12:15/13:00~14:45)			
6		12	火			貧困に対する支援③	貧困に対する支援④
7		19	火			障害者福祉③	障害者福祉④
8		26	火			ソーシャルワークの理論と方法【共通＋専門】③	ソーシャルワークの基盤と専門職【共通＋専門】
9	12	3	火			社会福祉の原理と政策④	高齢者福祉③
*		7	土	東京アカデミー模試 (10:00~12:15/13:00~14:45)			
10		10	火			児童・家庭福祉③	児童・家庭福祉④
11		17	火			権利擁護を支える法制度③	刑事司法と福祉③
12		24	火			地域福祉と包括的支援体制③	地域福祉と包括的支援体制④
*	1	4	土	学内最終模試 (10:00~12:15/13:00~14:45)			
13		7	火			模試解説会①	模試解説会②
14		14	火			総まとめ①	総まとめ②
15		21	火	定期試験 (10:00~12:00)			

3. 既卒者（卒業後3年以内）向け

働いている卒業生が受講しやすいように、年末年始にオンデマンドで社会福祉士国家試験講座を配信している。今年度の配信期間と実施内容は以下の通りである。受講申込者は、

在學生は30名、既卒者は0名であった。既卒者に向けた周知方法や実施の時期について課題が残る。

配信期間：12月28日（土）～1月4日（土）

開講科目：保健医療と福祉、社会保障、社会福祉調査の基礎、ソーシャルワークの理論と方法、ソーシャルワークの基盤と専門職、社会学と社会システム

配信期間：1月5日（日）～1月10日（金）

開講科目：医学概論、心理学と心理的支援、社会福祉の原理と政策、刑事司法と福祉、権利擁護を支える法制度、高齢者福祉

配信期間：1月11日（土）～1月16日（木）

開講科目：地域福祉と包括的支援体制、貧困に対する支援、障害者福祉、児童・家庭福祉、福祉サービスの組織と経営

（５）精神保健福祉士国家試験対策講座

令和7年2月1日（土）・2日（日）に実施された第27回精神保健福祉士国家試験において本学科新卒者の合格率は100.0%（5名中5名合格）であった。なお全員が社会福祉士とのダブル合格である。なお既卒者1名も受験しているが不合格であった。精神保健福祉士の国家試験対策は、本学科教員の石田が担当し、12月4日（水）1限・2限、12月11日（水）1限・2限で実施した。内容は模擬試験形式の問題演習と解説を中心としている。

（６）福祉系公務員受験対策講座

社会福祉特別講義は、公務員採用試験受験支援講座として、東京アカデミーと協働し平成29年度より、集中講義で開講している。

社会福祉特別講義Ⅰは、公務員試験の1次試験対策として位置づけられており、一般教養試験の数的処理、文章理解を中心とした授業内容となっている。本講座は、短期大学部保育科との合同開講となっており、受講対象学生は保育科1年生（1セメスター）と人間福祉学科2年生（3セメスター）である。

社会福祉特別講義Ⅱは、社会福祉専門職採用試験に関わる社会福祉の専門知識を確実なものにするための本学科独自の講座である。授業内容は、社会福祉全般・社会学概論・心理学を中心に社会福祉の専門用語の理解、社会福祉に関するテーマの論文対策となっている。また、本講座は社会福祉専門職公務員採用試験のみならず、社会福祉協議会採用試験、独立行政法人となる国公立の病院機構等の採用試験などにも有効で、加えて社会福祉士国家試験、精神保健福祉士国家試験の学習にも役立てることが可能である。

いずれの社会福祉特別講座も公務員試験を視野に入れた就職活動をする学生増加に貢献し、進路選択を広げる重要な科目である。

（７）その他

（１）～（６）に示した学科独自の演習、実習指導、受験支援は、授業時間内だけでは成立しない科目である。常に学生一人ひとりと向き合い、その学びの質と成果を学生と共

に確認していく取り組みが求められている。令和6年度は基本的に対面による授業実施が平常化しコロナ禍以前の学修形態に戻ることができたが、一方で、学生のニーズや学習効果に応じて、遠隔授業等さまざまなICTを活用した教授方法の向上にも努めていくことも必要である。学科のすべての教員がチームとして学生を育てていく体制を実施しているが、今後はそれらをさらにブラッシュアップして取り組んでいくことが求められている。

なお、この報告書は以下の担当者からの情報提供を受け、FD委員の川下が全体の取りまとめを行い作成した。

- 4－（１）ソーシャルワーク演習担当者打ち合わせ会：鳥海直美
- 4－（２）ソーシャルワーク実習・実習報告会、社会福祉実習懇談会：大西敏浩
- 4－（３）社会福祉士国家試験対策講座：笠原幸子、原順子
- 4－（４）精神保健福祉士国家試験対策講座：石田晋司
- 4－（５）福祉系公務員受験対策講座：石田晋司
- 4－（６）その他：川下維信

*本原稿は、学科教員に回覧した上で承認を受けたものである。

教育学部 教育学科 小学校教育コース（学校教育コース）

1. はじめに

1.1 小学校教育コースの現状

教育学科小学校教育コースは、多様なニーズのある社会や学校、子どもたちに応えることができる豊かな人間性と、教育に関する専門的知識・実践力・指導力を備え、「いい先生」とは何かを問い続けながら、生涯にわたって学び続け、社会や教育現場で活躍できる優れた小学校教員を養成している。

令和6年度の卒業生115名の就職決定率は97.2%であった。進路の内訳としては、公立学校教員（小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）への就職が最も多く、教育学部全体の教員採用試験合格者数は過去8年間で最多を記録した。常勤講師を含めると、90%以上が教育職に就いている。また、教職以外の進路としては、一般企業への就職者が18名、公務員が3名、福祉職が2名であった（令和7年4月4日時点）。これらの成果は、学生の基礎学力向上の取り組みや、教員採用試験・就職試験対策の充実に加え、本コースの教員および教職教育推進センター・キャリアセンター等による継続的な支援の結果である。教員をめざす学生に対しては、教採スタートアップ講座、エントリーシートや小論文等の添削、面接・集団討論・模擬授業・場面指導のロールプレイ指導の他、さらには卒業生の教員や合格した先輩との交流会、自主勉強会のフォローなど、学生のモチベーションを継続的に促す環境づくりを行っている。また一般就職をめざす学生についても同様に、エントリーシートから最終面接に至るまで、長期にわたる就職活動支援を行っている。

取得可能な免許状は、小学校教諭一種免許状を基盤に、選択するプログラムに応じて、特別支援学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、中学校教諭一種免許状（英語・数学）、高等学校一種免許状（英語・数学）がある。

カリキュラムの特徴として、1年次では「学びなおし・学びほぐし」を目的とした「扉シリーズ」（例：「数理探究の扉」「英語探究の扉」）や、プログラム選択の判断材料となる「お試し科目」（例：「多様な子ども理解入門」「子育て支援論」「ベーシックコミュニケーションⅠ」「数学的リテラシー」など）が開講され、多様な子どもや社会に対応できる「いい先生」をめざして学修している。また、2年次では小学校教育実習の実習要件である「インターンシップ」や「スクールサポーターⅠ」が開講され、インターンシップと連動しながら、実地演習での学修をふり返し支援する「多文化探究の扉」や「教科探究の扉」といった選択科目を設定している。さらに、3年次では本学独自の配属実習を基本とした教育実習（週1回の実習を2か月間行い、その後連続して2週間の実習を実施）を通して、大学で学んだ理論と現場での実践とを往還することで、実践的な学びの深化を図っている。

1.2 今後の課題

授業運営においては、学生が「学習者」として受け身になるのではなく、「授業者」としての視点を持ち、主体的に参加できるような工夫が求められる。そのためには、教職科目で学んだ理論的内容を、実習科目・演習科目、さらに教科教育法科目における模擬授業へと有機的に接続し、理論と実践の往還を意識した授業設計が必要である。

また、評価方法については、相対評価ではなく絶対評価を用いることで、学生が授業の到達目標に応じた自己の目標設定を行い、成長を自覚できるようにする。これらの取り組みにより、学生の学修意欲を高く維持することを目指す。

学習環境においては、対面授業が基本となっているが、オンライン教育やデジタル教材を取り入れた教育環境が充実してきている。今後はこれらの教育資源を効果的に活用し、より柔軟で充実した教育方法の開発が課題となる。

今後、学生によるプログラム選択が本格化していく中で、各プログラム選択者が必修であるプログラム科目を漏れなく履修しているか、プログラム別の卒業必修単位数を正しく理解しているか、また各プログラムで行われる各種教育実習の実習要件を満たしているかなど、学生へのきめ細やかな履修指導が一層求められる。また、2年次になってからプログラムの選択を変更する学生も見られるため、より充実した履修指導が不可欠である。特に、教育実習については、実習先との内諾交渉時期に支障をきたさないタイミングでのプログラム変更を徹底しなければならない。さらに、今年度から小学校教育コースが旧カリキュラムとされているなかで、プログラム非選択者に対しても、選択科目の充実や卒業必修単位の取得の保障などが必須である。こうした課題への対応として、今年度からは各プログラム別の「チェックリスト」を導入し、学生自身が履修した科目および今後履修すべき科目を視覚的に把握できるよう支援している。今後は、このツールをより効果的に活用できるよう、ガイダンスや面談における活用方法の指導に加え、学生自身による学修計画の立案を支援する体制の強化が求められる。引き続き、各プログラムにおける卒業必修単位の取得をいかに保障するか、また学修の充実をどのように実現していくかが、重要な検討課題である。

2. 「大学基礎演習ⅠⅡ」の取り組み

2.1 「大学基礎演習」を実施するにあたって

「いい先生になる」という一貫した理念に基づき 4 年間のカリキュラムを設定しているが、「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」は、そのもっとも基礎的部分をなすものと言える。大学ディプロマポリシーを受け、大学基礎演習の学修内容をマネジメントした。

1) 教育学部ディプロマポリシー

① 多様な子どもをとりまく現代的課題に対応する力

多様な立場、考え方の存在を認め、強い意志と情熱および教員、保育者としての使命感や責任感を持って、子どもの個々のニーズに共感的に理解し、子どもの学びと育ちに関わり、取り組むための「子ども理解」に関する専門性を獲得する。

② 個別最適な学びを求めて専門的な知識と実践力を追求する力

多様な社会、学校・保育施設等において、子ども一人一人の興味・関心を引き出し、子どもの課題に応えるために、「教科等の専門性」として、ICT の活用も取り入れた実践的指導力の獲得を目指して、粘り強い省察・研鑽の力を獲得する。

③ 変化する社会、学校・保育施設等で活躍するための包括的な協働の力

急激に変化する環境の中で、すべての子どもの可能性を引き出すには、チームの一員として、多様な人々と協働で課題解決を図り、持続可能な解決を遂行する力や種々の活動を繋ぐ横断的なファシリテーション力を身につける。

以上、未来を拓く子どもの成長と発達を支援するために、「子ども理解の専門性」と「教科の専門性」を身に付け、「協働」の力を発揮する教員養成に取り組んだ。

2) 2024 年度「大学基礎演習」のめざすもの

- ① 大学における有意義な生活や学修を図るうえで必修の基礎的な知識やスキルを修得している。
- ② 学生同士の協働的な学びを通してコミュニケーション力・対人関係能力を高めている。
- ③ 学修ポートフォリオやリフレクションを活かし、自己の学びを振り返り、改善点に気づきながら、自己の成長につなげ、今後の学びのデザインを描くことができる。

研究へと展開する学修の、初年次前半に位置づけられるものである。この科目は、大学における学修や生活をより有意義なものにしていくうえで必修の基礎的な知識やスキルの修得を行い、大学及び教育学部の一員としての所属感を高め、以降の学生生活への見通しを持てるようにするものとする。授業形態としては、学修の内容に応じて、学年全体での授業、クラス別の授業を行う。内容としては、まず、新しい人たちとの交流を深め、安心、安全が大学生活を送るようにする。そして、学校教育の基盤となる「多様な子どもとのかかわり」について学び、考え、理解を深める。また、「いのちをめぐる様々な問題」等を主題とし、防災等について主体的に学び考える機会を持つ。これらを通して、自分の考えを深め、真理を探究していく討議の力、自分の学びや生活を自身でマネジメントし主体的で目的をもった学生生活を送ることのできる力、様々な教育問題に関心をもち、探究していくことのできる力を高めていく。

2024 年度より学部内編成が行われ、学年 250 名 10 クラスによる大学基礎演習の運営となった。これまでの方法では対応できないことも多く、様々な工夫が必要となる。本年度の取組が、今後の教育学部学校教育コースにおける大学基礎演習の一つの指針ともなる。そのため、作成した資料や成果、課題等を整理し、今後へつなぐことができるよう、残していく必要がある。また、本年度より、『大学生 学びのハンドブック』（世界思想社編集部，2024）を共通教材とすることで先生方の資料作成等の仕事を軽減した。

2.2 「大学基礎演習Ⅰ」の内容

<シラバス>

	テーマ及び内容	テキスト
1 全体	ガイダンス（IBU ネット・G メール・委員等）	
2 全体	PROG テスト ノートの取り方・ファイリング	1 章「ノートの取り方」
3 学級	教えて先輩<2 年生との交流>	0 章「はじめての大学生活」
4 学級	クラスづくり・和の精神の記入	
5 全体	探究学修について・図書館の使い方	7 章「大学図書館の使い方」
6 全体	メモのとり方	1 章 4 章「レポートの書き方①」
7 全体	テキストの読み方と講話の聴き方	2 章「テキストの読み方②」
8 学級	レポートの書き方（1）	5 章「レポートの書き方②」
9 課題	面談	
10 課題	多様性についての課題レポート	
11 学級	レポート報告会	
12 全体	レポートの書き方（2）	5 章「レポートの書き方②」
13 学級	1 分間スピーチ（学級）	10 章「大学の試験と評価」
14 全体	1 分間スピーチ（全体・学級代表による）	
15 全体	いのちをめぐる問題 ―原爆の語り部の方のお話―	

<学修の様子>

学生 250 名が一堂に会してガイダンスや授業を進めていくにあたり、初期段階では学修規律を整え、授業に臨むための心構えができるよう配慮した。本学で毎時行っている「瞑想」は、その際に非常に効果的に機能した。

夏学期の特徴として、4月に2年生が1年生の学級を訪れ、小グループになって情報交換を行ったことである。1年生が10学級であるのに対し、2年生は6学級だったため、組み合わせには苦労したが、非常に有意義な活動となった。来年度も実施する場合は、学級数がいずれも10学級となるため、組み合わせは容易になるだろう。また、継続的に交流活動を進めていくことも考えられる。夏学期の終わりに実施した1分間スピーチでは、学級代表による全体での交流も活発で魅力的な活動となったが、各学級内での発表会も充実したものとなり、3か月の学校生活を振り返りその成果やこれからの目標を語る学生も多く見られた。また、夏学期の最終回には、広島から原爆の語り部の方をお招きし、講演をしていただき、たいへん有意義なものになった。無償でご講演いただいている。今後も継続的に取り組んでいきたい内容である。今回は日程上、最終回での実施となってしまったが、時期を考えて講演をもとにした探究学修を構成していくことも可能である。

2.3「大学基礎演習Ⅱ」の内容

<シラバス>

回	テーマおよび内容	テキスト
1 全体	防災教育に関するリレートーク／四天王寺大学の「防災」の取り組み	
2 全体	防災教育ミニシンポジウム（消防署、市役所の方による講話）	
3 学級	ハロースクール振り返り	
4 学級	文献の読み方／備蓄倉庫見学	2章「テキストの読み方」
5 学級	個人での探究活動（テーマ案の検討、文献検索など）	7章「大学図書館の使い方」
6 学級	テーマ案プレゼンテーション／探究グループ編成／グループ探究テーマの設定	7章
7 全体	探究の在り方とプレゼンテーションについて	8章「ゼミ発表の仕方」
8 学級	グループでの探究活動	8章
9 学級	探究活動中間報告会	
10 学級	グループでの探究活動（中間報告会をふまえてさらに深める）	
11 学級	選修・ユニット最終確認説明会／インターンシップ配属説明会／発表準備	
12 学級	探究成果発表会（クラス発表）	
13 学級	探究成果発表会（クラス発表）／クラス代表選出	
14 全体	探究成果発表会（学年：クラス代表） ＊コメンテーター：消防署の方、市役所の方など	
15 全体	まとめ（2）学修ポートフォリオの作成（教職履修カルテ／自己評価）／授業評価アンケート	

※水曜日にハロースクール（小学校訪問）を実施し、1組から10組まで順番に訪問を行った。

※小学校の先生から学生に直接お話しいただく会は、開講前の9月17日に実施する大学ガイダンス内で行った。

※ハロースクール終了後、学んだことの振り返りと交流を大学基礎演習の授業内で行った。その関係上、同様の内容であっても各クラスによって実施時期が異なることから、クラスごとの予定表を作成し、それに従って授業を進めた。

＜学修の様子＞

基本的には、計画通り実践することができた。冬セメスター期間中は、ほぼ常にどこかのクラスがハロースクール後の「学びの交流会」を実施していたため、大学基礎演習の内容をできる限り学年団で共有するようにした。細かなことまで共有したことで、トラブルもなく、予定通りに進めることができた。

○ ハロースクール 2024 について

ハロースクールは、小学校などでの日常を体験し、課題や目標を発見するために行われている、1年生冬学期に行う実習である。本年は、四天王寺小学校1年生～6年生までの午前中の授業を参観させていただいたり、休み時間には子どもたちと遊んだりする時間を設定した。これまでは6クラスであったが、今年度から編成で10クラスでの取組であり、9月スタートから12月の中旬までの長い取組となった。

本年度は、ほとんどの学生が遅刻もなく参加することができ、小学生との交流を大いに楽しむことができた。後日の振り返りでは、教師の子ども達への声かけや教室環境の観察などを通して、多くのことを吸収し、事後は、それらをクラス内で交流を行った。初めて小学校の現場を訪れる学生も多く、2年のインターン、3年の実習へとつながる大変有意義な活動であり、今後も継続していきたい。

○ 防災をテーマとした探究活動について

教育学科学校教育コースの「大学基礎演習Ⅱ」（2セメスター開講）では、研究テーマの設定や文献の読み方、研究成果のまとめ方、研究成果の報告など、大学生活で必要な研究力（アカデミック・スキル）の基礎を身につけることをねらいとした学びに取り組んでおり、2024年度は、防災・減災をテーマとして、グループ研究に以下のような流れで取り組んだ。

① 学校教育コース教員による防災に関するリレートーク

東日本大震災での事実から学ぶべきことは何か（学校教育の立場から）、「学校保健」の意味から防災をどのように捉えられるか（保健の立場から）、地震はどのようなメカニズムで起こるのか（地学の立場から）などのリレートークから、防災を考える上でさまざまなテーマや視点、立場があることの重要性について学んだ。

② 大阪南消防局・羽曳野市役所・学校教育コース教員による防災教育シンポジウム

大阪南消防局の消防士と羽曳野市役所危機管理課の職員を講師に招いて、「主体的に判断し行動することのできる子どもを育成する防災教育とは」をテーマとしたシンポジウムを実施した。震災の実際の現場での経験談なども交えながら「自助」「共助」「公助」の重要性を考えるとともに、学校教員は守られる立場だけでなく守る立場でもあることなど、一人ひとりが防災についてこれまでとはちがった関わり方があることに気付くきっかけとなった。

③ 四天王寺大学の防災計画についての説明と備蓄倉庫見学

総務課より四天王寺大学の防災体制や防災計画についての説明をしていただいた。また、備蓄倉庫見学を行い、どこにどのようなものがどれだけ備蓄されているのかを実際に見学した。

④ グループ共同研究／クラスでの研究成果の発表

文献の読み方や探し方、発表の仕方などのアカデミック・スキルの基礎を身に付け、防災をテーマとして、個人の興味・関心に基づいて学びを深めるとともに、その成果をグ

グループ共同研究の形で協働しながら学びを深めていった。また、中間発表会では各グループの進捗状況を発表し、質疑応答を行った。この質疑応答やコメントをふまえて、さらにグループでの研究を進め、学びを深めた。そして、各グループの関心に応じたさまざまなテーマを、互いに発表し、防災に関する知識を深めるとともにさまざまな視点を身に付けることができた。

⑤ クラス代表による研究成果発表会

前半クラスと後半クラスに分かれて、各クラスの代表グループによる発表を行った。また大阪南消防局と羽曳野市役所危機管理課の方に来ていただくとともに、副学長の和田先生と教育学部長の佐藤先生にも来ていただき、発表に対する講評をしていただいた。充実した発表内容に加え、講師の先生方の講評を聞くことを通して、防災についての知識を深めるとともに、防災への関わり方について学ぶことができた。

2.4 成果と課題

<成果>

- ・今年度からテキストを購入したことで、そのテキストにいつでも立ち返って見直すことができた。教師による自作資料配布やパワーポイント作成等が少なくなった。併せて、学生たちがPCを常にもっているのも、紙媒体の使用量が大幅に軽減された。
- ・学生自身が作成したパワーポイントも、小グループの活動であれば、自分のパソコン画面を周りの人たちに示すことができるため、効率的に発表や意見交流を行うことができた。
- ・アカデミック・ライティングの基礎を学ぶ機会を設定することで、高校生までの「作文」から、大学生としての「論文」や「レポート」を意識しながら、論理的な文章を作成できるようになってきた。こうした力に対する学生たちの意識が、少しずつではあるが高まりつつある。
- ・「教えて先輩」と題して2年生全員が1年生のクラスに来て交流を図ったが、大変盛り上がりを見せ、意義あるものとなった。
- ・大学のポータルのところに、資料や学年会の議事録、学生の様子等を残したので、今後に活かすことができる。

<課題>

- ・10人の担任団なので、学年会を開催できる日があまりない。共通理解を図るのにいろいろと工夫しなければならない。
- ・個人面談の設定が難しい。大学基礎演習の時間でも行うようにもするのだが、各クラス25人程度いるので、その時間だけでは終わらない。
- ・ハロースクールは、9月から12月までかかる。今年度はなんとか全員が参加できたが、12月に入ってからクラスの学生は、病気等で参加できなくなってしまう可能性もある。大学基礎演習の運営においては、ハロースクールの日程調整が非常に難しい点が課題である。

3. 授業相互参観について

3.1 公開授業一覧

今年度も多くの教員がお互いに授業を参観しあった。以下に、小学校教育コースで公開授業を実施した担当教員とその授業実施月日、科目等を示す。

No	担当教員	月日	曜日	公開授業科目名	教室	合評会
1	佐藤 美子	7月9日	火	教科内容論(理科)	5-204	授業終了後すぐ
2	福本 義久	7月8日	月	初等算数科教育法	4-316	授業終了後すぐ
3	永田 麻詠	7月9日	火	教科内容論(国語)	4-213	授業終了後すぐ
6	浅田 昇平	6月17日	月	教育制度論	6-301	授業終了後すぐ
7	今井 真理	6月17日	月	初等図画工作科教育法	2-405	授業終了後すぐ
8	及川 久遠	6月21日	金	教科内容論(算数)	4-213	授業終了後すぐ
11	木原 俊行	いつでも	木	教育方法・技術	4-314	授業終了後等(ご相談)
12	木村 雅則	7月1日	月	教職研究Ⅱ	6-303	授業終了後すぐ
14	坂井 啓祐	6月3日	月	教職研究Ⅱ	6-353	授業終了後すぐ
15	坂本 暁美	7月3日	水	教科内容論(音楽)	8-210	授業終了後すぐ
16	杉中 康平	いつでも	月	道德教育の理論と方法	2-305	授業終了後すぐ
17	谷川 直也	7月10日	水	教科内容論(理科)	5-204	授業終了後すぐ
18	千葉 一夫	6月24日	月	子ども理解とケア	2-205	授業終了後すぐ
19	土口 千恵子	7月1日	月	教職研究Ⅱ	4-207	授業終了後すぐ
21	早川 透	7月3日	水	障害者指導法	6-211	授業終了後すぐ
22	船所 武志	7月5日	金	教科内容論(国語)	4-412	授業終了後すぐ
23	間辺 広樹	7月4日	木	情報処理演習Ⅰ	2-209	授業終了後すぐ
24	和田 良彦	7月1日	月	教育研究Ⅱ・教職研究Ⅱ	6-302	授業終了後すぐ
25	生駒 英晃	6月18日	火	線形代数学	6-352	授業終了後すぐ
27	小柴 和香	6月26日	水	中等英語科教育法Ⅲ	7-116	授業終了後すぐ
28	鈴木 浩太	6月27日	木	知的障害者の心理・生理・病理	4-308	授業終了後すぐ
29	堂上 雅三	6月24日	月	教科総合演習Ⅰ	5-210	授業終了後すぐ
30	長澤 洋信	6月8日	土	特別支援教育	4-314	授業終了後すぐ
31	仲野 純章	6月18日	火	教科内容論(理科)	5-204	授業終了後すぐ
32	西岡 智	6月3日	月	教職研究Ⅱ	6-304	授業終了後すぐ
33	原田 三朗	6月20日	木	教科内容論(算数)	4-416	授業終了後すぐ
34	丸山 聡	6月24日	月	教職演習Ⅰ	5-301	授業終了後すぐ
35	井村 有里	6月18日	火	教科内容論(理科)	5-204	授業終了後すぐ
37	勝間 理沙	6月26日	水	保育の心理学Ⅰ	4-216	授業終了後すぐ
38	西口 卓磨	6月26日	水	初等社会科教育法	4-307	授業終了後すぐ
41	森田 英俊	6月28日	金	微分積分学	4-207	授業終了後すぐ

3.2 相互授業参観報告書

今年度の相互授業参観の中から4名の報告書を以下に例示する。これらに限らず、様々な観点で各教員が他教員からの学びを得た様子が各報告書に記されていた。

(1) 報告者：杉中康平

参観した授業科目名	教科内容論「算数」
授業担当教員名	原田三朗
令和6年7月17日(水)	教室：4-412
本日は、原田先生のこれまでの豊かな指導経験と学生たちへのやさしいまなざしを感じることができる授業であった。	
まず、小学校4年生レベルの算数科の図形の面積や辺の長さを問う問題を何問かを、	

学生にチャレンジさせ、自分が小学生なら、どのように問題を解くのかを考えさせた後に、単に解を出すということだけではなく、途中の「正解」に至るまでのプロセスとしての考え方をそれぞれに話し合わせながら、考えさせていた。 次に、算数科の副教材として使うドリルを数冊配布し、各社のドリルの良さと共に、課題などを、自分たちのグループが想定した「児童像」に基づいて、吟味し、「もし、自分が当該の学年の担当教師だったら、どのドリルを選ぶか？」という課題について、グループで話し合い、その根拠を示しながら、「報告書」を作成するというワークに取り組ませていた。 教科内容論の「算数」について、自分が現場の教師になったつもりで最適の教材を選ぶという形で取り組んだために、学生たちはとても意欲的に取り組んでいたと思う。 各グループの発表の後、本時の学びについての振り返りを学生主体で行っていたが、次時にもつながる意欲のあふれたものになっていた。ぜひ、自分の授業でも、このような実践的な学びを取り入れたいと思えた授業であった。
--

(2) 報告者：堂上雅三

参観した授業科目名	教職演習 I
授業担当教員名	丸山聡
令和 6 年 6 月 24 日 (月)	教室：5-301
・3年生からの各自治体の採用テストの早期実施に伴い、教員への自覚と教職教養の重要性について、考えさせる授業を通して、意欲の醸成に取り組んでいた。 ・授業は、主体的に考え発表することを中心に授業を進めている。 ・パワーポイントやYouTubeなどを活用し、理解や考えを深めるアイテムを効果的に使用している。 ・本日は人権教育に関する授業で、グループワークをふんだんに取り入れ、主体的に学習に取り組み、発表する形態をとり、積極的な授業を進めていた。 ・また、過去の教員採用テストを活用し、教員として認知しておくべき人権に関する条約や法規、通知等を通して、教員としての人権感覚と法規の学習を進めていた。人権教育の法的な知識の習得と人権について考えることは、教員としての資質向上につながる。 ・講義形式でなく、学生の主体的な対話的な学習形態での重要性を感じた。 自らの授業について、これからも授業改善につなげていきたい。	

(3) 報告者：永田麻詠

参観した授業科目名	教科内容論 (理科)
授業担当教員名	佐藤美子
令和 6 年 7 月 9 日 (火)	教室：5-204
理科室での授業で、アンモニアの噴水実験を行う内容だった。実技にも通じる内容で、主体的な学習をいかに展開していくかについて、参考になるものだった。まず、今後の展開を提示することで、学習の見通しをもたせ到達目標を確認している点、卒業生のレポートを示して例示している点など、履修者の理解を深める工夫がなされていた。 また、実験に取り組む前に履修者の関心・意欲を高める発問や、既習事項とつないだ説明を行うなどの学習展開も非常に重要だと考える。以上のような点は、自分の授業でも気をつけているつもりではあるが、1回1回の授業で改めて心がける必要があることを実感することができた。さらに、実験を行うにあたり、「楽しいということはわかるということである」という声かけも自分の授業をふり返ることとなった。「楽しい」こと	

はもとより、「楽しい」が「わかる」につながっているか、アクティブラーニングが「活動あって学びなし」となっていないかどうか、今後も授業づくりで考えていきたい。
なお、今後科学レポートを提出とのことだが、科学レポートの作成が本日のアンモニアの噴水実験、あるいは本日を含むこれまでの実験とどう関わるのかについて興味がある。こういった主体的学習活動が、演習問題やレポート作成、定期試験などと十分に関わらせることにより、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等をより修得できるように思われる。そういった学習内容の見通しを履修者と共有できればよりよいし、小学校教員をめざす者として、こうした展開の工夫を考える時間を設けてもよいかもしれない。

(4) 報告者：西口卓磨

参観した授業科目名	教育方法・技術（情報通信技術の活用含む幼小中高養）
授業担当教員名	木原俊行
令和6年6月27日（金）	教室：4-314
・Google クラウドルームをLMSとして活用し、Google フォームを活用することで、リアルタイムの学生の考えや意見を集約し、共有しながら授業を展開されており、学生に対して、授業への参加を促す工夫がなされており、参考になった。 ・動画コンテンツ等を活用し、授業内容に関する具体的な事例について学生に考察させたり、解説したりすることにより、理解しやすい仕掛けがなされている。 ・授業のポイントが明確に示されており、何を理解しておく必要があるのか、またなぜ理解しておくことが重要であるのかについて説明がなされていて、わかりやすい。 ・授業内で、セクションごとに課題や問いが設定されており、個人で考え、なかまとの共有、全体との共有、ポイントの解説といった形で、ただ聞くというインプットだけでなく、学生自身が自分の意見を考えながら授業に参加できるような工夫がなされている。 ・教育方法・技術という科目の特性をふまえ、学校現場や子どもに根差した学修内容や具体的な事例が選択されるとともに、大学生や学校教育現場の教員という立場を学生に意識させることにより、当事者性を持って学修内容を捉えさせるような指導の工夫がなされていた。	
以上の点が、自身の授業における改善につながる点でしたので、今後の自身の授業改善につなげていきたい。	

今回は、上記4名の報告書を挙げるにとどめるが、全体として、今年度も教員同士による相互授業参観と合評会が実施され、相互に研鑽を積むことができた。現時点の課題として、各授業における効果的なICT活用が挙げられる。現在、パソコンの必携化、各教室の環境整備、IBU.net・Zoom・Google Classroomなどの活用により、プリント類の配布物や課題の提出物のペーパーレス化が着実に進みつつある。一方で、学生に対する教育効果（学修内容の理解、プレゼンテーションスキルの育成ほか）を従来よりも落とさず、むしろ促進するためにICT活用をどう進めるか、教員間で議論・情報共有を重ねていく必要がある。

4. 学科独自の取り組み

小学校教育コース独自の取り組みとして、プログラム選択と「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組みの2点を挙げる。

4.1 プログラム選択

小学校教育コースでは、小学校教諭免許の取得を基本としながら、多様な子どもや社会に

対応できる「いい先生」とは何かを問い続けるため、「特別支援教育プログラム」「幼稚園プログラム」「英語教育プログラム」「数学教育プログラム」の4つのプログラムが設定されている。各プログラムには、いわゆる「お試し科目」が1年次に開講され、学生はその履修を通して、自分がどのプログラムを選択することで「いい先生」をめざすのかを考える機会を得る。こうした検討を経て、年度末に1年生のプログラム選択が決定される仕組みとなっている。

プログラム選択の特徴としては、「プログラムで学ぶ＝各プログラムでの教員免許取得」ではないこと、プログラムを選択しないという選択も尊重することが挙げられる。各プログラムでの学修により各種教員免許取得をめざすことは基本ではあるが、かりに教員免許取得を希望しなくても、その分野に関心を持ち学びたいという学生の意思を尊重している。そのため、今年度も2年生夏学期にプログラム選択変更の機会を設け、3名の学生がプログラムを選びなおした。ただし、4年間で各種教員免許の取得もめざしている学生に対しては、プログラムの選び直しが履修計画や実習要件に影響を及ぼす可能性があることから、慎重に行うよう注意喚起を行っている。

また、初等教育をより深く学びたい学生や、進路変更によって教職以外の将来を考える学生が「プログラムを選択しない」という選択を行うことも尊重している。プログラムを選択しないことにより、プログラム科目が開講されている時間に初等教育に関する科目や、教員採用試験対策科目を受講することができる。また、教職以外の進路を希望する学生に対しては、「子ども理解領域」として、「子ども支援ボランティア論」「インクルーシブ教育の理論と方法」などの選択科目を設定し、学校教育の内外から教育をとらえ、そのうえで改めて学校教育をとらえなおす学びを提供している。以上のような小学校教育コースでの学修が、学生一人ひとりにとって充実したものとなるよう、カリキュラム上の工夫を行っている。

4.2 「教育基礎演習Ⅰ・Ⅱ」の取り組み

教育基礎演習は、教育学部独自の必修科目である。学修内容は、大学のディプロマ・ポリシーに基づき、1回生の「大学基礎演習」で培った知識・技能を基に設定した。さらに、大学卒業後のキャリアデザインを見据え、3回生からの専門分野研究への橋渡しを意図した。

特に、インターンシップや介護等体験といった学外実習に取り組む学年であることから、教育および福祉現場での学びと大学での学修を関連付け、学びを深めることをめざした。

<令和5年度「教育基礎演習」の到達目標>

教職に向けた意識を高めること、2回生のインターンシップや介護等体験、3回生からの専門分野研究や教育実習に向けて、技能を修得することを目的とする。

- ① 大学2年生の1年間の学びの見通しをもち、それを大学在学中及び卒業後のキャリアデザインとつなげて考え、教職への意識を高めていくとともに、具体的な行動目標を設定する中で実践していくことができる。
- ② 体験や講話、文献講読、意見交流等を通して、教育に対しての自分の「問い」をもち、探究するとともに、それを表現することができる。
(レポートを書く力、プレゼンテーションする力、討議する力等の向上)
- ③ 教育実践現場において、周りの人たちや子どもたちと適切に接すること、責任をもった行動をとることなど、一社会人としての社会性を身に付け、自分が関わっている教育現場に参画する基礎を身に付けることができる。また、具体的実践について振り返り、次の目標を設定し、実践していくことができる。

＜教育基礎演習の内容作成にあたって考えたこと＞

- ・大学ディプロマ・ポリシーと内容を関連付けること。
- ・大学基礎演習での学び（他者の意見と自分の意見を分けること・関連付けること、発表の仕方、発表スライドの作り方、など）を土台として、さらなる資質・能力の向上をめざして、様々なスキルを身に付けるような活動をする事。
- ・大学での学修と実習先での学びを往還させ、実習先で主体的に学べるようにすること。
- ・実習等での学びを発表や小論文というアウトプットを意識して、他者と意見を交わし合うこと。
- ・グループで役割を分担し、主体的・対話的に探究活動に取り組み、学びを深めること。
- ・3年生以降の大学生活への発展を意図して、その基盤を培うこと。

「教育基礎演習Ⅰ」の内容

上記の目標を実現するために、「教育基礎演習Ⅰ」では、次の6つの取り組みを設定した。

1) 新入生に大学生活を紹介することとおして、自らの在り方を見つめ直す取り組み

今年度も、昨年度の大学基礎演習において実施してきた「ようこそ、先輩①」（＝先輩講話）をとおして、大学生活の見通しを持つとともに意欲を高めこととした。第2回の授業において、3年生の先輩3名から「大学2年生をどう過ごすか？」と題して、語ってもらった。

また、「ようこそ、先輩②」では、海外教育実践研究で、ベトナムの現地の学校での実践と語学研修に参加した学生が、日本国際学校で日本語を学ぶベトナムの児童（小学校3年生、5年生）、FPT スクールの中学部にあたる生徒を対象に日本の絵本（セロ弾きのゴーシュ）読み聞かせを日本語と英語それぞれで行った実践を、その準備段階から実際の様子、そこから得られた学びや今後の課題などについて発表してもらった。

今年度は、新たに、「教えて！先輩」を、同時時間帯に開講している教育学部学校教育コース1年生の「大学基礎演習Ⅰ」の授業と連携して行うこととした。この企画のねらいとしては、1年生にとっては、2年生の先輩の話を聞くことによって、新しい生活に対する不安を低減し、大学生活に対する期待と意欲を高める。また、2年生にとっては、1年生に、大学生活の紹介をするとともに、1年生からの質問や不安に答えることによって、先輩としての自覚を持つと共に、自分の大学生活を見つめ直し、意欲の向上につなげるというものである。

事前に「大学基礎演習Ⅰ」の授業で、「大学生活について聞きたいこと」のアンケートを1年生からとったうえで、「教育基礎演習Ⅰ」の授業では、各クラスにおいて、2年生が、自分たちの昨年1年間の大学生活を振り返るとともに、1年生への回答を考えてまとめたうえで、第3回の授業において、1年生の各クラスに出向き、小グループに分かれて、交流した。

1年生からは、「先輩方からのアドバイスを聞いて、実際に経験された人からの意見を聞けて、非常に貴重な時間になった。特に、サークルや部活のことを聞くことができて、自分はありがたかった。」「免許取得のことや、2年生になってからのことを聞けて、覚悟もしていかないという考えにもなり、良い刺激になった。」「今は入学してすぐだから、わからないことだらけだが、先輩方からのアドバイスを参考にして、頑張っていきたいと思う。」「来年自分が先輩になった時には、先輩のよう上手く後輩に思いを伝えたいと

思った。」等の振り返りがあった。

2年生からは、「1年生の不安そうな顔を見ていると、去年の自分の不安な思いがよみがえってきた。自分の体験を話すことで、少しでも1年生の役に立ててよかったと思う。」

「1年生からたくさんの質問を受けて、1年前の自分があんなにも、何事にも意欲を持っていたのだということを思い出した。少し、だらけがちな今の自分を反省させられた。

『初心忘れるべからず』という言葉思い出した。」「1年生と話をしていて、人に教えることの楽しさを再確認した。改めて、先生になりたいという思いが強くなった。」等の振り返りがあった。

2) 「介護等体験」を前にして、問題意識と責任感を持って臨む気持ちを高める取り組み

「介護等体験」の実習を前にして、人文社会学部人間福祉学科の笠原幸子教授と(株)山勝ライブ러리代表取締役社長 山下勝巳氏による講演「介護の現場で実習をするために知っておくべき現場の状況と心構え」を行った。

3) 「インターンシップ」での体験を交流しながら、その学びを次につなげる取り組み

インターンシップを前にして、和歌山県田辺市立稲成小学校の鳥山修身校長先生に「インターンシップで学んでほしいこと」と題して、講話していただいた。鳥山先生は、四天王寺国際仏教大学の卒業生であり、同窓生としての思いも、また、本学の実習生を受け入れる立場からも温かい励ましの言葉をいただいた。

「インターンシップ交流会」は、各クラスにおいて、小グループに分かれて、それぞれのインターンシップでの学びや各自の課題を交流した。インターンシップは、それぞれ配属された学校が活動の場であるということもあり、学びが個別であるため、互いの取り組みの様子や悩み、困りごと等を交流し合うことで、各自の抱えている課題や問題意識を共有しつつ、現代の教育現場の課題と関連づけることで、自分のインターンシップでの体験をより広い視野から、学ぶ機会とすること、また、実習先の教職員、子どもたちから多くを学ぶ為に必要となる資質・能力を高めることを目指して実施した。

4) 1年次で学んだアカデミックライティングの技術を各自の発表につなげる取り組み

大学基礎演習で学んだ「アカデミック・ライティング」の基礎を基にレポートを作成するとともに、今学期は、「インターンシップでの学びと課題の発見」と題してPowerPointを作成し、発表会を行った。また、夏セメの終わりには、学んできたことを限られた時間で話すという表現方法(1分間スピーチ)で、経験したことを言葉や表情・しぐさ等を使って伝えることにも取り組んだ。

5) 広島市の被爆の「語り部」さんの講話を聴き、「平和」への思いを新たにする取り組み

被爆体験伝承者 山口恵司氏をお招きし、講話をしていただいた。

6) 個人面談の実施

授業開始の第1回(4/11)からゴールデンウィーク明けの第5回(5/9)までの期間で、各担任が、空き時間や昼休み等を利用して、各学生と個人面談を実施した。

<シラバス>

	日時	内容	授業形態
1	4/11	オリエンテーション：自己紹介・履修登録、クラス組織づくり 「教えて！先輩」のグループ分け・準備。 個人面談開始	学級
2	4/18	講話「ようこそ！先輩①(大学2年生をどう過ごすか?)」	全体
3	4/25	「教えて！先輩」2年生が1年生の各クラスに出向き、交流。	学級

4	5/ 2	アカデミックライティング①（1年生の復習と次の課題）	全体
5	5/ 9	講話「ようこそ！先輩②（海外教育実践研究に参加して）」	全体
6	5/16	講話「介護体験の現場で働くこと～介護現場で働く方のお話」	全体
7	5/23	講話「インターンシップで学んでほしいこと」	全体
8	5/30	「インターンシップ体験交流会」	学級
9	6/ 6	「インターンシップ学びと課題の発見」PPT づくり①	課題
10	6/13	「インターンシップ学びと課題の発見」PPT づくり②	課題
11	6/20	「インターンシップ学びと課題の発見」PPT 発表会	学級
12	6/27	アカデミックライティング②	学級
13	7/ 4	アカデミックライティング③	学級
14	7/11	1 分間スピーチ「今学期のまとめ」	学級
15	7/18	「平和学習」被爆体験伝承者の方の講話	全体

「教育基礎演習Ⅱ」の内容

「教育基礎演習Ⅱ」では、次の 5 つの取り組みを設定した。

1) 将来のキャリアにつながる講話から自己のキャリアを考える基盤となる取り組み

3 年生および 4 年生の先輩や卒業生（現職若手教員等）から、将来のキャリアにつながる講話や話題を提供してもらった。これは、職業に対する視野を広げ、多様な選択肢の中から自分のキャリアデザインを考える基盤を培うためであり、同時に現代の教育現場の課題や、それに根差した社会の課題についての探求を進めることを目的としている。

2) 「教師の基礎力」を培う取り組み

教師の基礎力を、「学習指導」「生徒指導」「教師としての在り方（心構え）」の 3 つの視点から、それぞれテーマを設定して取り組んだ。

3) 3 年生からの「ゼミ」を選ぶ取り組み

5 セメスターからのゼミ活動の意義を伝え、自分の学びを拡張できるようなゼミを選択できるように、各教員からのゼミ紹介を通じて研究活動の意義や実際について考える機会をつくった。

4) 専攻ごとの学びを深める取り組み

今年度の「教育基礎演習」は、各自がそれぞれ、主たる免許である小学校教諭の免許以外に取得をめざしている幼稚園・特別支援学校・中高英語、中学数学の 5 つの免許種ごとにクラスを編成している。そのため、本授業においては、クラスごとに 3 時間、それぞれの専攻ごとの学びを深める活動を取り入れた。

5) 大学基礎教育の仕上げとしての小論文作成の取り組み

本講義の締めくくりとして、2 年間に渡る大学基礎演習のまとめとして、小論文を作成した。

<シラバス>

	日時	内容	授業形態
1	9/26	オリエンテーション：履修指導、ゼミ指導、大学生活他 「ようこそ！先輩①（この夏頑張った先輩）」	全体
2	10/ 3	教師の基礎力を培う①「学習指導（副教材を選ぼう）」	学級

3	10/10	教師の基礎力を培う②「生徒指導（体罰について）」	学級
4	10/17	教師の基礎力を培う③「教師としての在り方を学ぶ」 対談・講話「ようこそ先輩②（現職若手教師のお話）」	学級
5	10/24	講話「ようこそ先輩③（教師以外の道を選んだ先輩のお話）」	全体
6	10/31	専攻ごとの学び①	学級
7	11/ 7	専攻ごとの学び②	学級
8	11/14	専攻ごとの学び③	学級
9	11/21	ゼミ担当教師によるゼミ紹介①	全体
10	11/28	ゼミ担当教師によるゼミ紹介②	全体
11	12/ 5	ゼミ生によるゼミ説明会	全体
12	12/12	教員採用試験に向けて～1 分間スピーチ&小論文～	全体
13	12/19	小論文を書こう①（アカデミックライティングまとめ）	学級
14	12/26	小論文を書こう②（執筆と提出）	課題
15	1/ 9	2回生のまとめと3回生に向けて 「ようこそ先輩④（卒業する先輩から在校生に）」	全体

＜成果と課題＞

（１）成果

学生は初めての校外実習（介護体験やインターンシップなど）に臨む際、不安と緊張を抱えることが多い。学生同士の交流をとおして、他の学生も同様の感情を持っていることを知るだけで、安心感を得ることができ、実習に向けた意欲が高まる様子が感じられた。さらに、互いに体験を報告し合う中で、学びや困りごとを共有し、自分たちで問題解決の方法を考えたり、教師に相談したりして課題を解決しようとする姿が見られた。

学外実習を通じて具体的な「問い」を立て、「探究」する課題を設定した結果、学生は実習現場での児童の様子、教師の姿、児童同士、および児童と教師との関わり合いをしっかりと観察するようになったと感じられる。この観察から、自分が教師として実際に教育現場に立つことを想定した「問い」を立て、関連する文献を探究し、学んだ内容を体験と関連付けて報告することが可能となった。このような学びは、その後のインターンシップや今後の教育実習においても大いに活かされると考えられる。

このような実習と大学の学修の連動は、学生の不安を解消し、意欲を高め、意欲を高めるだけでなく、学びを深める効果がある。さらに、実習先の児童の学びと成長にも良い影響を与えると期待される。

また、夏セメ、冬セメいずれにも、アカデミックライティングの手法を学び、それを活用して、自分の考えをカタチにする活動に取り組んだが、伝えたいことを自分の言葉で相手意識をもってしっかりと伝える場を経験することで、面接や自分のことを伝えなければならない場面での力を培っていくことになった。

（２）課題

2 回生という時期は、学外実習を経験する一方で、教員を目指すか他の職種を目指すかを考え始める重要な時期である。教員を目指す学生のキャリア支援はおおよそ実施できたが、教員以外の職を検討し始めた学生にも意義ある内容を提供することが必要である。自分のこれからのキャリアデザインを描くことを目的に行う講話の内容について、多様な学生の

キャリア支援につながるものを考慮する必要がある。これは、今後、さらに工夫が必要な課題である。

以上

(附記)

本原稿は、学部長・学科長およびコース主任の回覧を経て、FD 委員が取りまとめたものである。なお、「2. 大学基礎演習Ⅰ・Ⅱの取り組み」は原田三朗先生に、「4.2 教育基礎演習Ⅰ・Ⅱの取り組み」は杉中康平先生にそれぞれご執筆いただいた。ここに附記し、御礼申し上げる。

教育学部 教育学科 幼児教育保育コース

1. はじめに

本コースは、平成 31 年度学部改組に伴い設置されたコースであり、令和 6 年度末で開設後 6 年が経過した。令和 5 年度入学者より「領域」に関する科目が設置されたことを受け、カリキュラムが変更された。新カリキュラムにおいても、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得に向けた養成を主とし、小学校教諭一種免許状の取得が可能である。コースの基本方針として、この 3 種の資格・免許取得を推奨し、コース運営を行っている。

入学定員 60 名に対し、令和 6 年度末の在籍学生数は、1 年次生 62 名、2 年次生 58 名、3 年次生 66 名であり、9 名のコース教員で運営を行っている。コース教員の専門分野は、幼児教育学、保育学、教育社会学、発達心理学、健康・スポーツ科学、児童福祉学、音楽教育学など多岐にわたり、それぞれの専門性を活かしながら保育者養成に従事している。

本コースは、以下の 3 つのディプロマポリシーを設定し、学生指導にあたっている。

1) 保育者としての自己分析・自己研鑽の力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもに応えることができる専門的知識および実践力、指導力を身につけ、「いい先生」とは何かを常に問い続け、自己の実践を振り返り、自己を高めていくことができる。

2) 保育者としてふさわしい豊かな人間性

多様な立場、考え方の存在を認め、「いい先生」になるという強い意志と情熱および保育者としての使命感や責任感を持ち、子どもの多様なニーズを共感的に理解し、課題の解決に他者と協働して取り組むことができる。

3) 変化する社会、保育施設等で活躍できる力

学びや実践を通して多様なニーズのある社会、保育施設等、子どもを的確に理解し、専門的知識および実践力、指導力を基に協働して課題の解決や改革に取り組み、実現することができる。

2. 大学基礎演習について

大学基礎演習は 4 年間の学びを豊かなものとし、大学全体やコースのディプロマポリシーを実質化する上で、極めて重要な科目である。本コースでは、60 数名の学生に対し、3 名の教員が担当者となり、1 クラス 20 数名による少人数授業を基本とし、授業内容によってクラス別／コース全体を使い分け、授業を展開した。

夏学期の大学基礎演習Ⅰ及び冬学期の大学基礎演習Ⅱの到達目標は以下のとおりである。

<大学基礎演習Ⅰ 到達目標>

- ① 大学での 4 年間の学びを理解し、自分自身の目標と見通しをもって学習をするための心構えをもつ。
- ② 大学で学ぶ上で必要なスキルと知識を習得する。
- ③ 幼児教育の現状と教員の仕事について理解する。

＜大学基礎演習Ⅱ 到達目標＞

- ①論理的に考えて発表したり、意見交流したりする中で柔軟に考える力を習得する。
- ②基本的な学びのルールを知る。
- ③将来の展望を持つ。

これらの到達目標を掲げた上で実施した、具体的な授業内容は以下のとおりである。

＜大学基礎演習Ⅰ 授業内容＞

- 第1回目：オリエンテーション・大学での4年間の生活を意識しよう
- 第2回目：大学での学びと生活（1）クラス交流、履修登録の確認、IBU ネットの使い方
- 第3回目：大学での学びと生活（2）PCをマスターしよう
- 第4回目：大学での学びと生活（3）キャンパスツアー 大学を活用しよう
- 第5回目：大学での学びと生活（4）先輩から大学生活の話を聞こう お困りごと相談会
- 第6回目：大学での学びと生活（5）高校と大学の違いを考えよう
- 第7回目：大学での学びと生活（6）担任との個別面談 大学生活をみつめよう
- 第8回目：大学での学びと生活（7）大学での学びを考える ―教職教育推進センターから―
- 第9回目：大学生としてのマナー講習 ―先輩と講師によるレクチャー―
- 第10回目：読み方（1）文献に触れる
- 第11回目：読み方（2）文献の読み方
- 第12回目：読み方（3）文献を使って交流しよう
- 第13回目：レポートの書き方（1）レポートのルール
- 第14回目：レポートの書き方（2）レポートの表現の実践
- 第15回目：どんな教員・保育士をめざすのかを考えよう

＜大学基礎演習Ⅱ 授業内容＞

- 第1回目：冬学期オリエンテーション
- 第2回目：キャリアデザイン（1）いい保育者について考えよう
- 第3回目：キャリアデザイン（2）いい保育者になるための学びとは
- 第4回目：キャリアデザイン（3）先輩の話や模擬保育から保育者を意識する
- 第5回目：ハローナーサリー事前学習（1）オリエンテーションと学びたい内容をとらえる
- 第6回目：ハローナーサリー事前学習（2）園の先生から現場の視点を学ぼう
- 第7回目：ハローナーサリー（1）こどもたちと出会おう
- 第8回目：ハローナーサリー（2）こどもたちを観察しよう
- 第9回目：ハローナーサリー事後指導：ハローナーサリーの学びの整理
- 第10回目：多様な教育の取り組みを聴く 幼稚園の園長先生をお招きして
- 第11回目：「読み」の交流（1）―専門文献の読みのレジュメ交流
- 第12回目：「読み」の交流（2）―専門文献の「読み」を深める
- 第13回目：「読み」の交流（3）―「対話型論証」を読み解き、自分の見解をつくる
- 第14回目：教育・保育という仕事について考えよう
- 第15回目：1年間をふりかえりとこれからの大学生活・実習などについて考える

令和 6 年度の夏学期以降は、授業運営に関してもコロナ以前の状況とほぼ同様に行うことが可能であった。大学基礎演習においても、グループワークや学生の活動を制限することなく実施することができた。授業内外における担当教員の細やかで丁寧な対応により、当初掲げていた到達目標は概ね達成できたものとする。特に、コースのディプロマポリシーのポイントの 1 つとなっている「他者と協働する」ことの具体的な取り組みについて進めていった。本コースの先輩による講話や交流、模擬保育の見学といったコース内の学生の縦の関係づくりなどを行った。この取り組みを進める際に教育専門演習（2 年次配当）担当者と連携し、学生指導に当たった。これらの教育活動により、各回の学生のリフレクションでは学びが深化している様子が明らかとなり大変有意義な機会となったことが窺われる。また、希望者が企画・運営し、学年内の交流を図るために運動会を行った。

3. 授業相互参観について

令和 6 年度は前年度の話し合いにおいて決定されたように、例年とは違い、夏学期に授業相互参観が実施された。コース教員が設定した公開授業一覧を以下に示す。授業相互参観終了後には合評会を開催し、参加教員相互による授業運営の方法について協議を行った。今後も授業相互参観の機会のみならず、よりよい授業運営に向けて、コース教員間で情報共有を密に行っていきたい。

担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室
小磯 久美子	6 月 21 日	金	2	保育内容理論と方法「環境」	6-304
吉田 康成	6 月 26 日	水	1	初等体育科教育法	総合体育館ダンスルーム
田辺 昌吾	6 月 25 日	火	4	子育て支援	6-213
今野 賛	6 月 20 日	木	4	初等体育科教育法	体育館 3 階サブアリーナ
鳥越 ゆい子	6 月 7 日	金	1	子どもと遊び	6-252
丹羽 智美	6 月 18 日	火	2	保育の心理学	4-412
門谷 真希	6 月 18 日	火	2	保育内容総論	6-253
吉田 祐一郎	6 月 18 日	火	3	子ども家庭福祉	6-253
矢倉 瞳	6 月 6 日	木	3	音楽への扉	8-328

4. コース独自の取り組みについて

(1) ハローナーサリーについて

幼児教育保育コースでは「いい保育者」になることを目指し、4 年間の教育活動を進めている。免許・資格取得に向けて定められる実習とあわせて在学期間の早期から子どもに関わる機会の提供に取り組んでいる。その取り組みの 1 つがハローナーサリーである。ハローナーサリーでは大学基礎演習Ⅱ（1 年次冬学期配当）の授業時間を利用し、大学に隣接する幼

保連携型認定こども園の四天王寺悲田院こども園にクラス別で訪問している。訪問前の事前学習では教員による指導とあわせ、以前にハローナーサリーに参加した4年生よりハローナーサリーの参加の意味についての経験談を聴く機会を設けた。併せてこども園の主任教諭を招聘し、園の概要などを中心に参加者に講話していただき、その後にこども園に訪問した。

今年度は従来通り、園内において園児とかかわりをもつ形での参加となった。また、訪問後には事後指導としてハローナーサリーでの学びを整理する機会を設定した。学生からは、講義では学ぶことのできない現場での経験から、4年間の大学生活に向けた自身の意欲を持つことができたなどの感想が寄せられているなど、本取り組みの成果が確認されている。

(2) 科目「インターンシップⅠ」「保育インターンシップ」の授業運営

「インターンシップⅠ」「保育インターンシップ」は2年次(3・4セメスター)配当の科目である。コースの全教員が「インターンシップⅠ」(夏学期開講)または「保育インターンシップ」(冬学期開講)の担当者となり、週1回、保育所等の保育現場でインターンシップを行うとともに、定期的にインターンシップの振り返りを行う授業である。

履修者それぞれが、自分たちは「インターンシップⅠ」の授業で、どのような内容を学びたいのかについて主体的に考え、受講者間で議論した。その上で、希望する施設を選択した。その後、自ら希望園(所)に依頼し、学びたい内容について説明する機会をいただき、インターンシップの受け入れに関する可否を尋ねた。承諾いただいた園(所)には、5月中旬から7月上旬まで、毎週金曜日に(8～9週間)終日インターンシップとして保育に参加させていただいた。

数回に1度は全体で集まり、学びを共有した。その際、自身の目標を見直すなど、インターンシップをより有意義なものにするためにはどうすればよいかについて考え、各自取り組んだ。質問や疑問についても協働して調べたり、教員からアドバイスをもらったりすることを通して考える機会となった。

インターンシップ終了後にプレゼンテーション形式で報告するとともに、他者の報告に対して自分の経験を照らし合わせて、質問や感想を述べた。学生のアクティブラーニングを促すことができた。本授業では可能な限り学生が主体的に自身のインターンシップに関して企画し、実行するようにした。授業内容だけでなく授業の運営に関しても学生の主体性が発揮される場となった。次年度以降にも今年度の授業運営の経験を生かしていきたいが、昨年度に続き、冬学期において「保育インターンシップ」の履修を希望した学生がおらず、履修指導やカリキュラムの在り方について早急に検討する必要があると考える。

(3) 教育基礎演習における園児を招聘しての保育計画

教育基礎演習では、本学生が高校生活3年間をコロナ渦で過ごしたことを踏まえ、学生のニーズの変容を視野に、丁寧に聞き取り予想をしながら授業運営にあたった。

① 現場職員を招聘しての保育職質問会

夏学期には、学生の希望に答え、公私立の幼稚園・保育園・こども園、公立行政職員として園長、新任(卒業生)、行政担当者の方々を招聘し、質問会を行った。将来保育職をめざ

すにあたっての些細な疑問や不安を言葉に変え、直接話を聞く機会を設けたことは、学生にとって何よりの学びであったことがアンケートのみならず学生の態度からも窺えた。保育職のリアルな現状を、知識としてだけではなく、自らのキャリア形成に生かせる機会になったと思われる。

②園児を招聘しての保育計画

冬学期の「教育基礎演習」では、3園のこども園・保育園・幼稚園より5歳児の園児を本学に招き、2年生による保育実践を行った。直接園児と触れ合う機会を設けたことで、より教育保育の現場や子どもについて知りたいという学生のニーズに応えられると共に、2年生は実施に際してグループで役割分担を行い、協働する経験を重ね学生同士の協調性が高まった。専門的知識・技術を学ぶだけでなく、個人の考えを他者と共有し対話を重ねる機会となった。また、1年生は2年生の保育参観を行った。

(4) 教育実習、保育実習に係る情報共有

本コースでは、年4回の実習が実施される(4セメ2月「保育実習Ⅰ(保育所)」、5セメ8月「保育実習Ⅰ(施設)」、6セメ9月「教育実習(幼稚園)」、6セメ2月「保育実習ⅡまたはⅢ」)。令和6年度は新型コロナウイルス感染症の影響もほぼなくなり、従来の形で実習を行うことが可能となった。コロナ禍において培われたコース教員間での情報共有を迅速にかつ密に行う工夫(コース会議、メール等において情報を共有すること、Teamsを活用すること)は、今年度の実習においても大変有効であった。実習指導担当教員が中心となり、きめ細かな情報共有を行うことで、日程変更等はあったものの、全般的に無事実習を終えることができており、個々の学生理解も深まったように思われる。また、実習先の保育現場とも密な連携を取ることで、現場と協働した実習が実現できている。

(5) コース教員における相互研修

各教員がそれぞれの専門に基づき持ち回りで研修を担当し、年に数回の割合でコース独自にFD研修を行っている。海外視察における調査報告や各分野における現在の動向等について相互に学ぶ機会を設けることで、お互いの研究分野に対する理解が深まるだけでなく、幼児教育、保育における多角的な検討を行うことにもつながったと考える。今後もコース会議の前後等に時間を設定し、継続的にやっていく。

5. その他(今後について)

教育学部では今年度に向けて改組が計画されていた。幼児教育保育コースにおいてもこれまでのカリキュラムを基本としながらも改組に向けた準備を進めた。

本コースの教育研究上の目的にある、子どもに応えることができる豊かな人間性と幼児教育・保育に関する専門的知識及び実践力、指導力を持ち、生涯にわたり学び続ける優れた保育者の育成を進めるためにも、更なる質の高い教育活動を進めることが求められている。

このことから、学生の学修内容・到達状況も踏まえた学内外での教育活動を充実させることが重要である。そのためにもコース教員が一丸となり教育活動を進めることができる体制を構築していきたい。その上でこれらの教育活動の実施により入学者の確保、個々の在学

生に対するきめ細やかな指導の充実、就職を見据えた出口保障を確実に実現することができるよう、FD 活動の活発化に向けた取り組みや、関係する各部署との有機的な連携を図りたい。

教育学部 教育学科 英語教育・小学校コース（学校教育コース）

1. はじめに

本コースは、中学校・高等学校の英語教員免許状（基本免許状）を主とし、小学校の教員免許状（併修免許状）も取得できることを特色として設置されている。しかしながら、本コースへ入学してくる学生は、卒業後、英語を得意とする小学校教員になることを目指すものも半数近くいる。

2020年からの小学校5、6年生で英語教科化スタートを反映し、中学校・高等学校の英語科教員免許状所持者に採用試験時の加点を行っているため併修免許状として、本学学校教育コースの学生で英語プログラムを選び中学校・高等学校の英語科教員免許状を取得しようとする学生が増加している。また、大阪府・大阪市を始めとして、小学校の英語指導と中学校の英語指導の両方が指導できる教員を求める傾向が強くなり、本コースからは「小中いきいき」等の採用試験合格を目指す学生が増えつつある。

また入学時には、ほとんどの学生が教員志望だが様々な座学や実習を通じて自身の適性などを深く知り、「最終的に一般企業への就職を目指す」ようになる学生もいる。

このように中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の3つのグループの学生に対しての教育を担っている。1・2年生において英語基礎力やグループ協働の力を培い、3・4年生ではゼミ生どうしの英小コースコミュニティを活性化している。この取り組みによって、コース全体として、自ら学び合う学修環境が創成されつつある。

2. 講義、および講義の系統性について

2-1. 大学基礎演習について

単位未修得の若干名を対象に「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を開講した。

令和6年度入学生（英語教育選修希望者）は、学校教育コースで開講された「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を受講した。詳細は、「令和6年度FD・SD報告書 教育学部 教育学科 学校教育コース」の「大学基礎演習」のセクションに記載。

2-2. 教育基礎演習について

概要：自らの教育に関する考えを自覚的に捉えるために、言葉にして発表すること。その際自分本位にならないために、他の学生の意見をよく聞くことに努める。その上で、よい教員になるためには、今の時点で何をしなければならないかを自覚するとともに、その準備を開始する、もしくはいつでも開始できる態勢を整える。

到達目標

良い教員になるためにしなければならないことを自覚し、教員採用試験について、その概要

を理解することにより、よい教員になる意識を形成することができる。

R4 年度より、本科目は、教員養成課程学生の「21 世紀型スキル」の醸成を目指し、担当教員 2 名が意見交換を行い指導の方針を定めている。グループワークを中心とし、教師・学生間また、学生同士が円滑にコミュニケーションをとれるよう、Google Forms や LINE オープンチャットを活用した。

授業実践においては、英語科教員にとって必要な基礎英語力の育成を図るとともに、教育全般に必要な知識・技能の育成を中心に進めた。夏学期には、毎回「英語文法クイズ」を帯活動として行い、アクティブラーニングや PDCA、逆向き設計などの教育学的概念・理論を紹介してから、現代の教育問題を取り上げるディスカッション・グループプレゼンテーションを（日本語で）行った。冬学期は、それまでに蓄えた理論・概念の知識を活かしながら、教育問題をテーマに英語によるディベートを複数回行うことで、教育全般についての知見を深めた。さらに授業実践において必要な英語の抑揚・連結等、発音面の指導を目標に、グループで口頭のための演劇をする「Reader's Theatre」という活動を行って英語力の育成を図った。

本実践は、R4 年度に学内共同研究助成を受け、1 年を通して、「教員にとって必要な資質・能力」を学生に意識させながら、毎回の授業の振り返り活動を行った。R4 年度に成果を「教員 21 世紀型スキルの自己効力感尺度」（柏木他、2021）を用いた量的分析と、学期末の「振り返りレポート」についての質的分析を行った。R4 年度の分析データを活かし、R5 年度及び R6 年度の実践では、特に学生が弱いと感じている「21 世紀型スキル」の項目を中心に指導をより一層徹底した。また、R6 年度の夏学期に、SLCC の留学生を授業に受け入れ、本コースと一緒にさまざまな言語を分析する 1 授業時間の活動を取り入れることで、本コースの学生の専門内容である「外国語（英語）」を教える際に必要なメタ言語知識に対する気づきを促す試みを行った。R6 年度までの実践から得られた知見と先方との協働の体制を活かし、3・4 年生対象のゼミ、さらには「学校教育コース」（主に英語教育選修）において、今後も継続して質的・量的に検証を行い、本取組をさらに有意義なものとしていきたい。

R7 年度以降には、英小コース単独での「教育基礎演習」は開講されないが、免許科目のうち「中等英語科教育法Ⅰ～Ⅳ」の縦のカリキュラムマネジメントを行い、それぞれのステージの学びや学び合いネットワークを醸成している。模擬授業指導に加えて、帯指導で、2 分スピーチ・即興英作なども取り入れ、教える側の英語力を培っている。

2-3. 中等英語科教育法の系統性

「中等英語科教育法Ⅰ～Ⅳ」は、英小コースの学びを育てる核として専任教員が担当し、指導内容の系統表共有、講義内容の交流を Semester ごとに、主にオンラインで行い、系統性のある指導を実現している。主には、以下の内容である。その効果として、学生が中学校 1 年生から 3 年生、および高校 2 年生までの教科書の系統性を理解し、それぞれの発達段階に合致した指導を組むことができるようになった。また、重複指導となっていた、フォニッ

クラス指導や、学習指導案の書き方指導も段階的に整理でき、その余剰時間では、教えるための英語スピーキング力や文法力、ICT を用いた指導についてもモジュール学習の導入が可能となった。また模擬授業についての「評価ルーブリック」の検討が進んだ。令和4年度以降の3年生は、この系統表で学んできており、教育実習先でも比較的英語授業への準備を自律的に進めている。選択必修科目の「英語学特論Ⅱ(英語教授法)」等では、タブレットによる英語指導、SDGs等、社会の課題解決に関わる英語指導についても発展的に取り組んでいる。

2-4. 教育実習指導について

2-3. で述べた「中等英語科教育法」の系統性と並行し、「中等英語科教育法Ⅲ(2年生冬学期)」には、少人数指導を実現し2クラス分割によって、一人一つ単独模擬授業、及び授業レコーディングによる省察を実現することができた。この時期には、集中的に、現場中堅の教員を招聘し、今まさに学校現場で実施されている授業や、実習受け入れ側の視点を学ぶと共に、教師としての遣り甲斐についても話を聞いた。中等英語教科教育法Ⅲとの直結で、3年生夏学期の「教育実習指導」を、本学の専任教員と現場の中学校英語教員によるティームティーチングで実施した。学部生には身近に感じにくい「パフォーマンス評価」についても、中学校のパフォーマンステスト作成法を学んだ。教育実習を目前にした学生の集中力は高く、実習中に差し掛かった学生は熱心に指導案を持ち寄り、質問し合う姿が見られた。授業評価アンケートにおいても「自分の実践力の伸びを感じた」講義として高い評価を得た。令和4年度からの継続的取組として、令和6年度も、英小コースだけでなく、小学校教育コースの英語プログラムにおける、「教育実習指導」と指導法の共有を行い、年2回程度の小中英語教育についての合同学習会を開催した。

3. 授業相互参観について

コースとして互いの授業は常にかかれた状態であり、できるだけ相互に参観することを合意している。令和6年度も相互参観を行い、成果を共有し合うことができた。例として、いくつかの科目につき、以下に報告の概要を示す。

夏学期「英語学特論Ⅱ(英語教授法)」(担当：柏木賀津子)では、学生の英語による「和文化発表」があり、知識創出型(「こと創り」重視型)教育への足掛かりとして、また、教員養成の観点から有効な内容であった。スモール・グループでの発表及びディスカッションを通して、学生自身による自律的かつ双方向での学修が実現されていた。教員(柏木先生)は各グループを回り、ディスカッションのファシリテートをされていた。課題の目的・有用性が明示されており、学生が楽しみながらも真剣に各自のテーマでPPT課題の発表・質疑応答を行っていた。学びのプロセスをも享受している様子が印象的であった。

夏学期「異文化理解」(担当：ピアース・ダニエル)では、英語圏の芸術作品の翻訳・考察を通して、言語文化について理解を深める内容となっていた。グループ・ワークにより、

学生たちの主体的かつ自律的な学びが促進されていた。

4. コース独自の取り組みについて

例年、英小コースの学生には中学校・高等学校の英語教員志望、小学校の教員志望、一般企業への就職志望の3つのグループの存在を前提として、(1) 英語力の向上、(2) 授業の質改善へ取り組み、(3) 教員採用試験対策(授業外)、(4) 海外教育実習(ベトナム、およびカナダ)における事前事後指導をふくめた、4か月にわたる「先生をめざす留学」の指導を充実させてきた。以下、例年通りにできたものを(A)、変更あるいは実施できなかったものを(B)、逆に取り組みの質や量が増加したものを(C)として報告する。

4-1. 英語力の向上

- ① (A) 対面での在学生オリエンテーションで英語の学習法、また最新の SLA 理論をふまえた英語学習・英検対策のピア・ラーニング形式のワークショップを行い、学生の学習方略とモチベーションの向上の機会とした。
- ② (C) 資格試験受験の奨励と指導：英検などの資格試験受験を折に触れて奨励し、英語面接対策指導を行った。面接指導を受けた学生のほとんどが英検 2 級に合格した。令和 4 年度には英検準 1 級の合格者も輩出できた。その後は英検ではなく TOEIC/TOEIC Bridge で高得点を取得する学生が出てきているが、今後、改めて英検の受験奨励と(自主)勉強会等のさらなる充実をはかりたい。木曜日 1 限目には、1～3 月に IELTS 試験対策および即興 Speaking の自主勉強会の指導を行った。
- ③ (A) iTalk 訪問の奨励；i-Talk 主催のオンライン・対面交流イベント・WS への参加奨励。藤井寺市との連携による英語村ボランティア活動への参加奨励。
- ④ (C) 令和 3 年度より英語論文提出を卒業研究として 4 年生に義務付けている。令和 6 年度には、APA 形式のフォーマット、研究の進め方、評価基準等も具体的に明示し 3 年目になるため多くの学生が体系的に卒論に取り組めた。アカデミックライティングの指導を行い、英語論文の構成を含め、学位論文としての質向上に資した。
- ⑤ (A) 冬学期 1 月のゼミの 15 回目の授業を合同で実施し、各ゼミの代表が自身の卒業研究について英語で発表し、学生どうしの活発な意見交流が見られた。
- ⑥ (C) TOEIC の受験に加え、留学を目指す学生に向けて、IELTS 指導を一部の講義に取り入れており、平日の朝の帯学習で IELTS に取り組む学生が見られるようになった。

4-2. 授業の質向上に向けた取り組み

- ① (A) 全学的に年 2 回行われる授業評価「学生アンケート」を参考に授業改善に努めた他、授業改善について意見交換を行った。

- ② (A) 教職関連授業あるいはゼミ等で、その一部あるいは全部を英語で行い、学生への英語のインプットの機会を増やすと共に、英語による授業の実践例を共有した。
- ③ (A) Google Forms や Google Classroom をほぼすべての授業で導入し、学生の反応をリアルタイムで把握する、期限を決めてレポートをテキスト形式で入力させるなどの取り組みを行った。また Padlet や Quizlet など SNS 交流ツールを講義に積極的に取り入れている。
- ④ (C) ゼミの授業の質担保のために、ゼミクラスでの日本語英語両言語での論文形式のレポート提出とゼミ内英語プレゼンテーションを行った。

4-3. 教員採用試験対策に向けた取り組み

- ① (A) 3 回生対象各種セミナー・面接対策：5～6 月、月 2～3 回程度設定
教員側で設定した日時が、学生のスケジュールと合わない側面はあったが、模擬授業や英語面接指導では、数名が参加し、それぞれ合格等の成果をおさめた。
- ② (A) 4 回生対象和文英訳・英語エッセイ・英語面接およびディスカッション
対策：4 月～9 月、週 1～2 回
- ③ (C) 3 回生および 4 回生対象各種エントリーシート添削について、随時行った。
- ④ (C) 3 回生を中心に、近隣自治体の採用試験についての分析を行い、コース教員による英語口頭面接や、英語ディスカッションの指導を希望によって実施し、英語力をつけるストラテジーの相談タイムを設け、数名が参加した。
- ⑤ (C) 教職教育推進センターが組織をしておられる教採勉強グループに「小・中学校英語」が加えられ、先輩の指導で後輩が熱心に勉強しており、英小コース教員が英問英答や模擬授業対策の助言をしやすくなっている。

4-4. 卒業論文の取組

- ① (C) 教職課程において、コースの学生は普段から実践力・英語力を身につけることで多忙な状況に置かれているため、ゆっくりと「研究」そのものについて考える機会が少ない。そのため、R4 年度に各ゼミ担当者が共通で使える「卒業論文規定」及び「卒業論文執筆ガイド」が必要であるとコース内で検討した。R4 年度に以下のバイリンガル資料を学生向けに作成し、コース共通で使用している。R5 年度に資料の中身の微修正を行い、継続して共通資料として活用している。
- (1) 卒業論文の進め方：「質問紙調査」、「事例研究（授業研究・会話分析・教室観察・開発型・アクションリサーチ）」、「文献研究」などの大まかな研究手法の紹介から、具体的な卒論研究の進め方（問題提起→文献収集→「問」を立てるこ

と→研究計画→分析→執筆)の詳細な説明を載せたガイド。

- (2) 卒業論文の進め方 (English version) : 英語コースの特徴を意識した、上記1)の英語版。
- (3) リーディングメモ (Reading memo) : 参考文献から得られた知識をまとめるための構造化したメモ用紙。
- (4) Thesis template : 卒業論文執筆の書き込み可能なテンプレートファイル。

以上の資料は、通常のゼミ内容と並行に使える目的で作成された。将来教員になる学生が「授業実践力」や「教員に必要な資質・能力」を意識しながらも、研究の基礎を学び、卒業研究が実現できるための参考資料として作られた。さらに、以下の資料がコース共通資料として共有されている：

- (5) 卒業研究評価ルーブリック : 卒業研究のプロセスから論文執筆までの評価に使用できるルーブリック
- (6) 卒業研究評価表 : 「卒業研究」の評価のための、コース共通で利用できる評価表

コースとして、今後も一層レベルの高い卒業研究の成果を上げるため、以上の(1)～(4)は、初年度(R4年度)の実践を経て、多少の加筆修正が行われたが、今後も適宜、改定を検討する予定である。また、(5)と(6)の資料についても、継続的にコース内協議を経て、修正版の使用検討をする予定である。

4-5. 学生の学び合いや発信、および自立した学修に向けた取り組み

- ① (C) 英小のコミュニティや上回生と下回生の交流が活性化され、英小コミュニティスペースの活用が進み、4号館の英小・英プロの学習室で学び合いや議論ができるようになった、またゼミ代表が集まって連絡を取れるようにした。学生主体のスポーツ大会が開催された。EiBUD ホームページを立ち上げ、異回生、異・新旧カリキュラムの学生の交流や採用試験の勉強会が出来る組織作りを進めている。

4-6. 海外および国内研修

- ① (C) グローバル教育研修への参加があった。(9月 オーストラリア、2月 カナダ)。当コースから5名が参加した。帰国後は、オープンキャンパス、プレエントリー、英語関連講義で、留学での学びをプレゼンしたり、「グローバルサポートスタッフ」として、学外からの海外者のアテンドなどを行ったりし、活発な活躍が見られた。

- ② (C) 英小コース独自の講義「海外実習プロジェクト」(カナダ、ビクトリア大学、およびカモーンカレッジ等)を2月実施した。この講義では日本の「怖い話一怪談」を教材化し、四天王寺小学校の25名への訪問授業を英語で実施、提携校であるアメリカのSLCC12名へのオンライン講義、京都伏見方面の「言語景観」のフィールドトリップを実施した。

2月(1か月)のカナダ教育実習には、英小コースから学生4名が参加し、教育学部の他の参加者4名と合計8名で、現地モンテッソーリ教育校で、中学校1年生50名に対して、CLILアプローチに基づく「日本の怖い話一怪談」の複文化とCLILの授業を英語で実施した。また、モンテッソーリの教育やカナダの学校教育について直接現地の公立教員から学ぶ機会を得た。現地公立小・中学校の視察を行い、カナダの公教育の良さに学んだ。

また、ベトナム教育実習には、英小コースからの参加は無かったが、教員らが教育学部全体から応募してきた学生らへの英語指導やストーリーテリング指導を行い、ベトナム国での授業実践を指導した。

- ③ (C) 個別にも留学を目指し準備する学生が見られるようになった。カナダ、イギリス、オーストラリア、フィリピン、アフリカ等へ短期留学を実現していた。
- ④ (C) iTalk 主催の国際交流プログラムに積極的に参加した。また、iTalk 主催の「和グローバルコンペ」には、R6年度は、学内主催の「プレゼンコンペ」にも1チームが参加し本選に出場した。学外のフィールドワークにも自主的に取り組み、英語をもちいたグループでの取り組みが盛んとなっている。

4-7. 地域連携・貢献

- (C) 藤井寺市でらっこイングリッシュデー(12月)にボランティア参加

本学地域連携課の要請を受け、当コースの学生が積極的にボランティア参加。保護者や市生涯学習課・教育委員会から、例年、好評をいただいております、令和6年度についても、同市ALTと並んで本学の3年生によるブースを担当した。

5. まとめ

本年度は、グローバル社会に貢献する英語教員の21世紀型スキル、人間関係の構築力、英小コースコミュニティのお互いの尊敬と多様な価値観を認め合う、学び方をさらに深めることができた。これらの取組に加え、カナダ・オーストラリア・ベトナム等に留学した学生など延べ、15名程度に上っており、国際社会における多文化共生社会を実感し、不確実性時代を生き抜く際の豊かな人間性の大事さを実感する学生も多くみられる。

1・2年次に大学基礎演習・教育基礎演習でのグループの協働や人間関係創り、講義などでの実践的フィールドワークを行うことで築いてきた基礎学力を礎に、3年次以降では、さらに応用的・自律的な学修を積み上げ、学生の自律的学修・研究への橋渡しとしてきた。

現職教員の招聘による、最先端の小中、および高校の授業の体験、英語科教育法（Ⅰ～Ⅳ）の具体内容の共有と系統性、地域貢献や海外実習等をとおして、学生はその視野を拡げ、達成したいゴールを明確にしてきた。また、令和7年度に向けて、教小コースの「英語プログラム」選択学生と、英小コースの学生の合同勉強会組織（EiBUD）が活性化し、4年間英語教育を学びつづける基盤が創成されつつある。今後は、この学びが、令和6年度以降入学の学校教育コース1・2年生との交流にも広がり、自己のキャリア形成へと繋がり、実を結び、教職への確かな道筋になるように導きたいと考えている。

教育学部 教育学科 保健教育コース（学校教育コース）

1. はじめに

教育学部教育学科保健教育コースは、児童生徒の健全な発育発達と心身の健康の保持増進に関する専門的な知識・技能および教育現場に求められる実践力・指導力を有し、高い人格と倫理観、豊かな教養を備え、時代の要請に応える優れた養護教諭の養成教育を目的としている。本コースでは、養護教諭養成を主軸とした教育プログラムを展開しており、併せて、小学校教諭1種免許状が取得できる。

学生にとっては4年間を通じて、多忙な学習スケジュールとなるが、大学での学びの質をより向上させるため、後述する保健教育コース独自の教育活動も実践しながら、充実した魅力ある「養護教諭・小学校教諭養成課程」の構築に努めている。また、定期的にコース会議を行い、講義の進行状況、情報通信技術（Information and Communication Technology：ICT）教材を用いた講義方法の有効性、学生による授業評価、教員の教育・研究活動状況等について討議を重ね、教員の資質の維持向上も図っている。

昨今、多様な健康課題と複雑な家庭・社会環境を背景に持つ児童生徒が増加し、児童生徒の健康管理に加え、心身のケアを担う養護教諭の職務及び保健室の果たす役割が、以前にも増して、重要視されている。コース教員は、定期的に国内外の学術集会に参加し、「チーム学校」の一翼を担う養護教諭養成に関する最新情報を収集するとともに、時代のニーズに応じた教育プログラムの導入と実践、省察と改善に努めている。

（1）保健教育コースの沿革（概略）

1957年（昭和32年）四天王寺学園女子短期大学 保健科

1967年（昭和42年）四天王寺女子大学（文学部 教育学科 etc.）・短期大学部 保健科

1981年（昭和56年）四天王寺国際仏教大学 短期大学部 保健科

2008年（平成20年）四天王寺大学 教育学部教育学科 保健教育コース

2024年（令和6年）四天王寺大学 教育学部教育学科 学校教育コース 保健教育選修

＜令和6年度の現状＞

- ・ 保健教育コースには、令和3～5年度に入学した3学年の学生が在籍している。
- ・ 令和6年度、学校教育コースに入学した学生のうち、29名が保健教育選修を希望している。

（2）取得可能な免許・資格（令和3～5年度入学生対象）

主免許状：養護教諭一種免許状

併修免許状：小学校教諭一種免許状

資格：学校図書館司書教諭、ピアヘルパー受験資格、社会福祉主事任用資格、児童指導員任用資格

2. カリキュラムの概要（令和3～5年度入学生）

1年次は、教育実践理解期にあたり、教育者として必要なコミュニケーション能力や表現力及び幅広い教養を身につけ、教職への関心を深め、意欲の向上を図る。主な専門科目として、「養護概説」、「学校保健」、「解剖生理学」、「学校看護学」、「栄養学」等を開講し、養護教諭の職務遂行に必要な知識と技術を習得する。

2年次は、基礎的教育実践力養成期にあたり、「学校救急処置」、「公衆衛生学」などの専門科目を通じて医科学的知識の更なる充実を図り、「精神保健」、「健康相談」、「小学校専門科目・教科教育法」を通じて、子どもの学習能力・心身の発育発達と小児期・学童期・思春期特有の心身症及び心のケアについて学びを深める。また「臨床看護学演習」では、医療機関における機能と役割を理解し、医療・看護の最新の知識を習得するとともに、学校と医療機関との連携を理解し、生命と健康の尊さを学ぶ。本演習には、医療機関での実習が含まれ、令和6年度臨床実習対象医療機関は、四天王寺病院、城山病院、東住吉森本病院であった。

3年次は、発展的教育実践力養成期にあたり、「微生物学」、「薬理学」、「保健統計学」などを受講し、学校における保健指導や健康教育に必要な知識と技術を養う。「養護実習」では、教育現場での養護教諭の職務と役割、保健室経営および児童生徒の健康課題、保健組織のあり方等を理解するとともに、健康診断や健康相談、保健教育について学習し、養護教諭としての総合的な教育力・使命感・責任感を身につける。さらに、「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ」では、養護教諭が行う調査・研究方法の基礎を学び、自ら研究課題を見つけ、意義を見出し、積極的に研究心を高めることにより、次年度の卒業研究に繋げる。

4年次は、研究・研修期にあたり、「教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」で、大学生活の集大成として、卒業研究に取り組み、自らが立てた仮説を検証するため、収集したデータを多角的に分析し、成果をまとめ、結論を見出し、卒業研究としてまとめる。「教職実践演習（養護教諭）」では、大学4年間で学んだ知識と理論および養護実習等で修得した教科指導力や保健指導力並びに健康相談や救急処置法の技能と方法を統合し、使命感や責任感に裏打ちされた学識と技能、実践的な指導力を有する養護教諭としての資質の構築とその確認を行う。

3. 大学基礎演習

令和4年に入学した学生のうち、単位未修得者1名を対象に「大学基礎演習Ⅰ」を、単位未修得者2名を対象に「大学基礎演習Ⅱ」を開講した。

令和6年度入学生（保健教育選修希望者）は、学校教育コースで開講された「大学基礎演習Ⅰ・Ⅱ」を受講した。詳細は、「令和6年度FD・SD報告書 教育学部 教育学科 学校教育コース」の「大学基礎演習」のセクションに記載した。

4. 授業相互参観について

令和 6 年度夏学期に実施した公開授業の実施日時、担当者と担当科目、参観記録は下記の通りであった。

氏名	公開日	教室	教科
岡本啓子	7 月 5 日（金）3 限	6 号館 206 教室	養護実習指導
久保正二	7 月 3 日（水）2 限	6 号館 212 教室	学校救急処置
仲谷和記	6 月 20 日（木）3 限	6 号館 353 教室	学校看護学Ⅲ
松本珠希	6 月 18 日（火）2 限	6 号館 353 教室	国際保健学
吉村知容	7 月 5 日（金）3 限	6 号館 206 教室	養護実習指導

<相互参観記録①>

参観者：久保正二（教育学部教育学科保健教育コース）

参観した授業科目名：「国際保健学（6 月 18 日火曜 2 限）」（授業担当教員名：松本珠希）

国際保健学の授業で、「WHO と国際保健医療」について、大阪国際がんセンターの島津美寿季先生の講演とともに参観させていただいた。まず、WHO の組織について説明をされた後、日本 WHO 協会の活動として、WHO 関連ニュース、セミナー、インターンシップ支援などについて説明された。1978 年のアルマ・アタ宣言「全ての人々に健康を」との説明から、健康の定義など、基本的な事項について改めて確認することができる内容であった。また、実際の WHO の活動を成功例だけでなく、失敗例について具体的に説明され、国と国の格差や国内での格差などの課題や問題点があることが実感できた。

さらに、気候や大気汚染なども課題となることが説明され、課題が大変多いことが認識できた。これらの内容をベースに、「〇〇に興味があります」と手をあげることに、いろいろな場所に出かけること、「いいな」と思ったら手をあげることに、学生にしかできないことがあること、学生に刺激を与え、モチベーションがあがり、活動的になることを意識される授業であった。講演およびその後のディスカッションが充実しており、学生が通常の授業と違う感覚を持てたのでは思われた。90 分間が短く感じられる充実した内容であった。参観者も多く新しいことを学んだ。

<参観記録②>

参観者：松本珠希（教育学部教育学科保健教育コース）

参観した授業科目名：「学校救急処置（7 月 3 日水曜 2 限）」（授業担当教員名：久保正二）

第 12 回「心疾患（突然死の可能性）」の講義を参観した。まず、パワーポイントスライドを用いながら、心臓の解剖・生理学的機能について詳細な解説をされた。次に、突然死を起こす可能性がある疾患について、日本学校保健会より報告された「学校心臓検診での実例」を中心に、個々の病態とその対応策について説明をされた。また、外科医である久保教授が、国内外の病院で経験した数々の症例についても紹介してくださった。その際、患者対応、手術等の処置の解説が目につくほどリアルで、受講生の本授業内容への興味関心と学習意欲が一層増したと感じられた。加えて、子どもの突然死は、毎年 20 件程度

発生していることから、養護教諭として、AED・心肺蘇生法の正しい応急手当の方法についても理解を深め、スキルの習得と定期的なアップデートが重要であることも強調された。本授業のまとめとして、小テストを実施された。養護教諭教員採用試験にも出題される可能性が高い記述式問題が 5 つ出題されており、本時で学んだ「心疾患」の振り返りができるとともに、知識の定着が図れるよう工夫がなされていた。久保教授の授業は内容が充実しており、また、絶妙なトークで、学術集会の教育講演を聴いているようであった。あっという間の 90 分間であり、参観者である当方も多くの学びがあった。

5. コース独自の取り組みについて

(1)「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」

①目的

保健教育コースの「教育専門演習Ⅰ・Ⅱ／教育専門研究Ⅰ・Ⅱ」（専門ゼミ）では、下記に示す 5 領域のいずれかを選択し、2 年間に亘り、各領域の専門知識を習得するとともに、調査研究能力を養うことを目的としている。

- a) 学校保健看護学研究（担当：岡本啓子）：多様性が尊重される中、安全・安楽に生活を送るための支援が必要とされています。多様な健康ニーズを抱える子どもに対応できる養護教諭の専門性について一緒に考えていきます。
- b) 学童期・青少年期保健研究（担当：久保正二）：学童期から青少年期は人生のなかで最も発達する時期ですが、一方では様々な課題や問題を抱える時期でもあります。それには遺伝的要素、器質的要素、精神的要素に加えて家庭、学校や社会的要因が影響します。そのため、それらの課題や問題への対応には、家庭、学校、医療機関や地域の人々と連携して取り組む必要があります。様々な課題や問題に対して、広い視野を持って学習していきます。
- c) 健康科学・社会医学研究（担当：仲谷和記）：我が国の青少年を取り巻く社会環境、生活環境などの変化に伴い、家庭や学校、地域社会における健康課題は多様化、深刻化していると言われています。本演習では、そういった健康課題を様々な角度から学習していきます。
- d) 公衆衛生学・Women's Health 研究（担当：松本珠希）：「みんなの健康」を守る公衆衛生学の観点から、「各ライフステージ（小児期・思春期・性成熟期・更年期・老年期）における心と身体の相関（心と体のつながり）・心身症（心のからくりが関与して起きる体の病）」、「女性特有の健康問題」、「美容とアンチエイジング」、「生活習慣（運動・食事・休養）と健康」、「環境と健康」、「癒しと健康」、「人生 100 年時代の健康管理と生き甲斐」等、「心と体の健康」について、多角的に学習・考察します。
- e) 養護学・養護実践学研究（担当：吉村知容）これからの養護教諭は、多様化・複雑化する健康課題を抱える児童生徒への対応に加えて、児童生徒が自発的・自主的に発達していくことを尊重できるように支援する役割が求められています。「個性の発見や良さ」「可能性の伸長」等を支援する「養護教諭実践」について、学習・考察します。

② 主な内容

- a) 各専門ゼミの卒業研究作成マニュアルを作成し、そのマニュアルを基に、卒業研究への心構え、卒業論文の作成方法、年間調査研究計画の立て方、教員採用試験及び就職活動との両立の仕方、過去の卒業研究の事例等の内容を含めたオリエンテーションを行う。
- b) 各研究領域の学術論文（原著論文・総説論文・症例研究報告）を読み、研究内容を理解するだけでなく、方法論、結果の解釈の仕方を学び、また、ゼミ内で討論を重ねることにより、各研究領域への理解を深める。
- c) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、各種研究方法（質問紙調査、インタビュー調査、フィールド調査、行動観察、実験、実践研究、資料分析、文献研究、教材研究・教材制作）の実際について学ぶ。
- d) 文献検索ツールの使用、図書館利用のコツ、公的資料の使い方等、文献収集方法について学ぶ。
- e) 収集したデータの分析及び解釈の仕方、統計処理、図表の作成等の演習を行う。
- f) 学術論文及び過去の卒業研究を事例として取り上げ、卒業論文の構成（要約・諸言・方法・結果・考察・結論・謝辞・引用文献）を学ぶ。論文作成開始後は、文章の点検及び推敲の仕方についても、各専門ゼミで指導する。
- g) 定期的に研究発表（卒業研究構想発表と現況報告）を行い、4年次の最後のゼミにて、卒業研究発表会を行う。
- h) 学術研究の実際を学ぶため、学会や研究会等に積極的に参加する。

③ 卒業研究発表会：4年間の学びの集大成

月曜2限開講の教育専門演習Ⅱ・教育専門研究Ⅱを活用し、「卒業研究発表会：4年間の学びの集大成」を開催した。今年度の実施日程は、11月25日、12月2・9・16・23日であった。本発表会では、4年次生41名が各卒業研究を7分間で発表をした。3年次生と教員はルーブリックを用いて評価をし、各回の優秀賞を選出した。どの演題も、心身の健康とその関連要素について、養護教諭の観点のみならず、多角的に調査研究および考察しており、非常に興味深く、心に響く内容であった。令和3年度に入学した4年生は、Covid-19の影響を受け、多くの制約もあったが、本発表会を通して、4年間の学びの集大成としての調査・研究成果を、ともに学ぶ仲間、3年次生、コース教員間で共有することができ、有意義な時間を過ごすことができた。

(2) 先輩と後輩をつなぐ「絆」プロジェクト

2年次生を対象に、教員採用試験現役合格を果たした5名（養護教諭4名、小学校教諭1名）による「夢を叶えるその秘訣」をテーマとした講演会を開催した。本講演会では、養護教諭・小学校教諭になるための心構えや勉強方法、養護実習・教育実習（小学校）への取り組み方、学校ボランティアや課外活動、臨床看護学演習での学び、本学での4年間の過ごし方等多岐にわたり語ってもらい、その後、討論会と個別相談会を行った。なお養護教諭部門で教員採用試験現役合格を果たした4名については、Teaching Assistantとして、養護教諭を目指す3年次生を対象とした自主勉強会に参加し、後輩との交流を図りながら、各都

道府県における筆記および面接、実技試験等の対策講座の補助を担当している。

(3) 一次救命救急講習会：救急蘇生法の実際を学ぶ

2 年次生は、夏学期に「学校救急処置」を履修し、学校、職場での不慮の事故によって発生する傷病や災害事故に対して、養護教諭として迅速な判断と適切な処置が行えるように知識と技術を習得し、それらを説明できる能力を涵養した。また、6 月 29 日（土）3・4 限に、救急処置実践力の更なる向上を目指して、NPO 法人「大阪ライフサポート協会」による「一次救命救急講習会」を実施した。

(4) 養護教諭教員採用試験対策講座

3 年生を対象に、希望受験地をもとに、都道府県別のグループを編成し、受験地の出題傾向を考慮しながら、教員採用試験対策講座を実施した。筆答試験対策の主な内容は、「学校保健の構造・学校保健計画」、「からだのしくみと働き」、「学校環境衛生」、「学校給食」「健康診断」、「健康観察・健康相談」、「こころの健康」「学校安全・応急手当（救急処置）」、「感染症・疾病予防対策」、「保健室の役割・養護教諭の職務」、「保健教育・学習指導要領」、「事例・対応」、「法規・法令」、「答申・時事問題」等であった。本講座では、過去に出題された問題や実践問題を活用し、詳細な解説を加えることで、各領域の知識の定着を図った。二次・三次試験対策では、出題が予想される問題について解説と実技訓練指導を行い、併せて、模擬（集団）保健指導と授業、面接指導を行った。加えて、最近の学校保健の動向、コロナ禍における養護教諭の職務と保健室の役割、児童生徒の心身のケア等について討論をする機会も設け、学生たちの意見交換を通して思考力と判断力の育成も図った。

本年度の養護教諭教員採用試験現役合格者は 4 名（大阪府 1 名、大阪市 1 名、和歌山県 1 名、京都府 1 名）であった。伝統ある養護教諭養成機関として、有能な養護教諭を育て教育現場に確実に送ることこそ、本コースの使命ともいえる。今後は、養護教諭としての現場即戦力を養うためにも、救急処置に関する事例や判例についての学習を強化し、学校看護技術や保健指導などの実践力をさらに積む時間も確保するなど、より一層の教育プログラムの改善と発展を図りたいと考える。

(5) 高大連携事業

① 高大連携校 5 校における定期健康診断の補助実習

本実習は、学内演習（学校看護学や臨床看護学演習など）、臨床実習、養護実習を経験した 4 年次生を対象に、高大連携事業と教職実践演習（養護教諭）の一環として行われるものであり、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学ぶことにより、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることを目的としている。

令和 6 年度は、大阪府立公立学校 5 校（富田林高等学校、長吉高等学校、懐風館高等学校、藤井寺高等学校、河南高等学校）にて、検診項目の 2 測定（身長・体重）、視力検査、聴力検査、内科検診、歯科検診に携わり、計測や検査の実施、器具の準備や結果の記録などの役割を遂行した。歯科検診では、学校歯科医と事前打ち合わせを行い、生徒の動きをみながら検診がスムーズに進むように周囲に配慮しながら、歯科検診票への記入を行った。2 年

次でのインターシップ、ボランティア、3年次の養護実習と、過去2年間に亘り、学校現場での経験を積んできた4年次生にとって、本事業が最後の学外実習となった。これまでの学内外での学びを振り返りつつ、健康診断の内容及び手順、検査方法を実地で学び、養護教諭に必要な知識・技能の習得に役立てることができた。

②高大連携事業（大学授業体験出張講義）

平成25年度より、大阪府立河南高等学校のe（エスペランサ）コースで高大連携事業の一環として、教育学部を目指す生徒を対象に授業を行っている。本授業（担当者：松本珠希）では、我が国における養護教諭（保健室の先生）の歴史、諸外国の養護教諭、養護教諭の存在と役割、保健室の機能、子ども達を取り巻く現代的健康課題など、多岐に亘り、詳しく解説した。保健室は、けがをしたり気分が悪くなったりした時に処置をしてもらうところだが、心身の健康について学ぶ学習室でもあり、最新健康情報の発信基地でもある。朝食欠食や夜更かし、運動不足、喫煙や過剰な飲酒等、不健康な生活習慣が心身の健康にどのような悪影響を及ぼすのか解説するとともに、児童生徒の心に響く健康教育（保健の授業づくり）についても紹介した。

（6）学外研修

①日本養護教諭養成大学協議会への参加

本協議会は、養護教諭養成に関わる大学、短期大学（部）および大学院（以下、「養護教諭養成大学」と称す。）相互の提携と協力によって学術と教育の発展に寄与し、養護教諭養成の進展に関わる高等教育機関の使命達成に貢献することを目的とする。本目的を達成するために次の事業を行う。①養護教諭養成における教育課程（カリキュラム）の研究に関する事業、②養護教諭養成の制度及び法制度の検討と研究に関する事業、③養護教諭養成にかかわる教員の資質向上を図る事業、④養護教諭養成に関する全国的規模の情報交換、連絡協議を図る事業、⑤養護教諭養成教育に関する社会的活動・提言に関する事業、⑥その他、本協議会の目的を達成するための事業。

令和6年度日本養護教諭養成大学協議会は、令和5年9月6日（金）12時30分～16時40分にハイブリット方式で開催された。総会、講演①「障害のある学生への合理的配慮」、講演②「養護教諭の資質向上と学校保健の推進について」の内容で進められ、本コースからは、岡本啓子（代表評議員）がzoom参加を行った。

経営学部 経営学科

1. はじめに

経営学科では、大学4年間の学びを支え、目標とするキャリアを獲得するために求められる基礎学力の向上からそれぞれのキャリアに必要な基礎力などを視野に入れ、卒業時点において有意な人材として社会からの評価を得ることができる能力・知識・スキルが身についていることを目標として科目を配置している。本学科の授業科目は、経営学・法学の基本を学科共通科目として開講し、基本となる共通科目から専攻ごとの専門科目へと無理なく学び、特色を活かして専門性を深め、経営学科の専門科目を段階的に無理なく、それぞれの分野を修得できるように学年の進行に応じて深められるように科目を配置している。

平成28(2016)年度に専攻を分離後から8年経過し、2度の完成年度を迎え、令和6年(2024)年度から新たなカリキュラムがスタートしている。本カリキュラムでは関連科目をコースとして示すことによって、学生個々の適性に応じて、必要な科目を体系的に選択して専門性を深めやすいカリキュラムとしている。公共経営専攻は、普遍的に公務員に必要な専門的知識を修得するとともに、将来の課題に対応することができ、倫理観と使命感を備えた公務員として社会貢献できる人材を養成することを目標とし、毎年、安定して公務員を輩出している。一方、企業経営専攻は、希望する進路に必要な専門性を身につけるため、コースとして示した科目群から適性に応じて学びを選択し、将来、必要となる資格試験に合格する支援を行っている。さらに、体系的にインターンシップや模擬就活を体験し、適職に出会えるキャリア支援を行っている。

その結果、公共経営専攻において、令和6年度の公務員試験の合格者として32名(実数19名)を輩出することができ、令和元年度から現在までに141名の合格者を輩出している。公務員試験に対応する指導として、後述するように、基礎学力養成から始まり、寄り添うための面談、出願のためのエントリーの指導を行い、合格に至るまで個別対応で寄り添う支援をする一方、学生も長期にわたる準備を重ねた成果である。企業経営専攻では、授業の特色に応じてアクティブラーニングを積極的に導入するなど、多様なアプローチで学生の学びを支援する体制を整え、成功経験を重ねて適性にあった職業に就けるように、キャリア指導に努めている。

また、学科の特徴のひとつである特待生制度(経営学部総合奨学金制度)は社会的認知が定着するとともに、学生のモチベーション維持などに機能し、公務員や組織のリーダーとして活躍できる人材、起業家などの輩出に寄与していると考えられる。

経営学部が令和6年度に取り組んできた特色ある取り組みは、以下のとおりである。

2. 大学基礎演習について

今年度も、大学基礎演習Ⅰでは、「大学生としての基本を学ぶ」、大学基礎演習Ⅱは「大学生として学内外での学びを深める」をテーマに、学科専任教員の全員体制でクラス別授業、全体授業を効果的に行っている。授業の実施にあたって、学生に関する情報は学部会議やメール等を活用して教員間で共有しながら進めている。公共経営専攻、企業経営専攻の両専攻の学生が、進路に対する視野を広げ、積極的にコミュニケーションできる環境づくりに努めた。

大学基礎演習Ⅰは、全体での対面による履修指導を実施し、ノート PC 必携化に対応した PC の操作説明等も取り入れて万全を期した。令和 6 年度も『大学生学びのハンドブック』（世界思想社編集部編）をテキストとして使用し、前年度の授業内容を精査・検証した結果をふまえ、「テキスト編」のシリーズとして文章の書き方、レポートの書き方、ノートの取り方など、初年次に大学での学びのリテラシーの向上を図った。さらに、同テキスト「学生生活編」として「個人面談」、「キャンパスツアー」により担任教員、クラス学生との関係性の構築に注力するとともに、前年度に引き続きマルチ商法等の被害防止、卒煙プログラム、コミュニケーションゲームなどを取り入れ、学生一人ひとりの大学での学びや学生生活の意義等を紹介し、考え、実践できるよう配慮した。また、キャリア関連科目との連携強化を意図した「キャリア編」も継続して、低年次インターンシップにつなげながら、個々のキャリア意識の向上を図った。

大学基礎演習Ⅱでも、開講初期の段階での「個人面談」を実施し、クラス別授業と全体授業を織り交ぜて「テキスト編」を継続し、大学での学びが深められるよう体系的な学習を行った。また、経営学科が毎年、恒例で実施しているビジネスプランコンテストに関連し、前年度のふりかえりから少し簡易化した形で、アイデア発想、ビジネスプランづくり、各クラスでのプレゼンテーションの経験により、各自のノート PC を駆使し、特徴ある PPT を作成し、ICT スキル向上の機会とした。また、「キャリア編」では、多様なインターンシップを紹介する特別講座を設け、4 年生の公務員合格・就職内定体験談を聞く機会を設けるなど、多彩なメニューを企画・実施している。

なお、大学基礎演習の振り返りアンケートでは、1 年間の大学での学びについての総括の結果、「先輩による就職活動体験談」「キャンパスツアー」「コミュニケーションゲーム学習」が、例年同様、キャリア意識向上、今後の就職活動への興味・関心、学生間の相互理解につながったようである。このふりかえりには、学科内で情報共有することにより、今後の大学生活の満足度を高める改善につなげ、次年度も個別クラスと合同授業を併用する。

3. 授業相互参観について

令和 6（2024）年度は、以下のとおり、概要にあげた内容で授業参観を実施した。

学科選抜科目	概 要	参観日時・場所	合評会日時・場所
①公務員特別演習Ⅰ（浅野）	集団討論演習（女性の活躍推進）	6 月 21 日(金)1 限 4-314 教室	授業終了後、同教室にて
②アントレプレナー論（天野）	日清食品 安藤百福と起業家精神、世界のインスタント食品の試食	6 月 26 日（水） 5 限 4-314 教室	授業実施後、実施教室にて
③消費者心理学（伊藤）	自らのコミュニケーションのくせを意識し、さまざまな「営業トークテクニック」を学ぶ。	6 月 17 日(月) 4 限 2-205 室	授業終了後、同教室にて
④ 会社法Ⅰ（霍）	株式会社の設立手続き、定款作成、設立登記を学ぶ。	6 月 5 日（水） 1 限 5-302 教室	実施後、同教室にて行う

⑤ 地域活性化演習 I (木村)	こよみ手帳制作のための商店街への協力依頼および情報確認	6月29日(土) 藤井寺駅・道明寺駅周辺商店街	実施後、現地にて行う
⑥憲法 I (人権) (高)	国民の司法参加と裁判員制度	6月18日(火) 1限 6-206 教室	実施後、実施教室にて
⑦民法 I (総則) (後藤)	民法に関する基本的用語・概念の復習。	6月3日(月) 1限 5-210 教室	実施後、当該教室内で
⑤ 地域活性化演習 I (隅田)	こよみ手帳制作に係る情報収集。	6月29日(土) 藤井寺駅・道明寺駅周辺商店街	実施後、現地にて行う
⑨情報科学概論 (阪西)	インターネットの仕組みと今後の発展。	6月21日(金) 3限 6-351 教室	実施後、当該教室にて
⑩インターンシップ I (富田)	ンターンシップ参加のための意識付けを行った	6月7日(金) 4限 4-409	実施後、実施教室にて
⑪ライセンスセミナー簿記 I (原田)	全経簿記能力検定試験3級に出題される商品在高帳の作成について説明。	6月12日(水) 2限 2-305 教室	実施後、実施教室にて
⑫インターンシップ I (東野)	インターンシップ参加のための意識付けを行った。	6月7日(金) 4限 4-408	実施後、実施教室にて
⑬貿易実務 I (深見)	インコタームズ、貨物保険、オファーの種類の復習と英文売り申込書の解説	6月18日(火) 3限 702 教室	実施後、実施教室にて
⑭ミクロ経済学 (福田)	情報の非対称性(市場の失敗Ⅱ)	6月17日(月) 3限 5-211 教室	実施後、実施教室にて

経営学科の場合、各教員が担当する授業や学生数が多いことから、授業参観する時間が厳しいにもかかわらず、上記のとおり、授業参観を行った。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 特待生制度（経営学部総合奨学金制度）について

両専攻において、学生の学習意欲を高め、将来の目標が達成できる学生を増やすために各専攻、成績等優秀である者1学年12名(2専攻4学年計96名)を特待生とする経営学部総合奨学金制度を設けている。1年次の特待生は一般入試前期日程(チャレンジ試験を含む)の成績により決定する。

2年次以上について、公共経営専攻は成績評価 GPA に加えて公務員試験の模試の成績等を評価し、企業経営専攻は GPA に加えて各種資格検定の合格実績や、学部で取り組む様々な貢献活動などを評価している。特待生に選抜されると、学業はもちろんのこと、それ以外の活動等にも積極的に参画しようとする姿勢が見受けられる。特待生に選ばれた学生は、経営学科学生の模範として学部学生を牽引する役割であることの自覚をもって、他者を巻き込

み課題解決し、協働しながら成長してくれることを期待している。

(2) キャリア演習Ⅰ・Ⅱ

就職力をはじめとする下記に掲げる4つを目的とし、外部教育機関と連携して、「キャリア演習Ⅰ」「キャリア演習Ⅱ」を令和6(2024)年度も2年生の必修科目として実施した。

- i.大学の講義をより円滑に履修するための基礎学力の向上。
- ii.公共経営専攻では公務員試験への早期対応、企業経営専攻では就職試験で多くの企業が利用するSPI試験等について早い段階から就職に対する認識を学生に促すこと。
- iii.2年次学生の講義出欠状況・講義中の態度の把握、専門演習ゼミ選択に備えた学生状況全般についての把握。
- iv.教員(担任)と学生の円滑な関係の構築、face to faceによる学生指導の機会の確保。

① 公共経営専攻

東京アカデミーと連携し、一般教養の講義を行っている。これは1年次の公務員講座の内容と、3年次の実践的な講座の内容を架橋するもので、公務員を目指す上で重要なものである。キャリア演習Ⅱでは、2019年度から2クラス(担当者2名)に分け、一般教養に関する学習をサポートする体制を強化している。

② 企業経営専攻

株式会社イングと連携し2年次に「キャリア演習Ⅰ」(夏学期:言語分野)、「キャリア演習Ⅱ」(冬学期:非言語分野)の講義を行っている。初回授業にプレテスト、中間テスト、最終授業にファイナルテストを実施している。

効果的に学修を進めるために、2022年度より講義実践上の配慮(小テストの実施、解答テクニック指導、視覚情報教材の工夫)をさらにきめ細やかに行ったが、「キャリア演習Ⅱ」(非言語分野)では学生の理解度に二極化が進んでいる。そこで「キャリア演習Ⅰ」の最終週で非言語分野の確認テストを行い、その得点結果より、非言語分野が苦手な学生を対象に夏季休暇中に特別講座を実施し、また、その結果を踏まえ、「キャリア演習Ⅱ」(冬学期:非言語分野)では習熟度別のクラス分けを行って授業を進めている。

(3) キャリア演習Ⅲ

企業経営専攻3年次で全員が体験する「インターンシップⅠ」に向けて、事前学習として2年次にビジネスマナーの習得に加え、自己管理すること等を徹底指導している。また、3年次の6月に授業内容の習得状況を確認するため、ビジネス実務マナー検定試験の全員受験を課して合格を目指し、授業で受験対策も行っている。

2024年度は、毎回の授業内での目標の設定と振り返りをさせ、フィードバックも行った。授業実施後の感想は、例年どおり多様な視点から「役立った」、「知らなかったことや勘違いしていたマナーを正しく知ることができてよかった」という前向きな意見が多かった。授業に取り入れたパブリックスピーチ、グループワーク、グループディスカッションについては、「最初は嫌だったが、慣れるとコツがつかめて良かった」と学生の成長を確認することができた。

(4) オールインターンシップ

本取り組みは、「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」と続く必修科目で構成されており、3年生全員が実際に就業体験をするキャリア科目の授業である。授業では、事前学習（各種提出書類記入等の指導を含む）を行い、3年生夏季休暇中に就業体験を行う。3科目を受講することで仕事理解と将来の就職活動に向けてのキャリア形成促進となる重要な位置づけとなっている。

当初就職に意欲的でなかった学生も、この経験をとおして、自己理解や企業理解を深め、就職をより身近に意識し、仕事について主体的に学ぶ機会となり、例年、多くの学生にとって就業体験の経験が将来の職業選択に向けて大きな役割を果たしている。

(5) キャリア演習Ⅳ（模擬就活）

本授業は、「キャリア演習Ⅰ」「キャリア演習Ⅱ」「キャリア演習Ⅲ」「インターンシップⅠ」「インターンシップⅡ」の集大成として、2021年度より導入したプログラムである。例年3月から本格的にスタートする就職活動に向けて、企業へのアプローチから選考までのプロセスを体験する。本プログラムに、SPI試験受験や合同企業説明会を組み込み、模擬体験するグループディスカッションや面接では面接官に企業の人事担当者を起用している。学生はステップごとに、教員、企業面接官からフィードバックを受け、学生自身の課題を確認するとともに、気づいていない不安もクリアしている。事前事後で意識変化の確認アンケート（5件法）では、すべての項目で授業開始前に比べて数値が上昇した。学生は「私はグループディスカッションに自信を持って臨める」など、コメントとして前向きな回答をし、満足度も高い結果であった。2021年度は、コロナ禍のため、全面遠隔対応としたが、2022年度から本年度も前半2日間を対面とし、後半2日間は遠隔を効果的に導入している。

三省合意により、年々就職活動が前倒しになっていることを踏まえ、今後「キャリア演習Ⅳ」の実施時期についても再考の余地があると考えている。

(6) 公務員受験関連科目

公共経営専攻に所属している学生が、多様な公務員をめざすことができる支援を行うとともに、企業経営専攻においてもキャリアの選択の一つとして地方公務員や公安職をめざすことができるための支援として、東京アカデミーとの連携授業を導入している。2024年度は例年通りに東京アカデミーのスタッフ・講師と本学教員の間で、業務報告書の提出や定例会の場などを通じ定期的に授業の問題点などを共有しており、次年度は講師や学習科目の多様化など、さらに充実した授業を実施することができるよう準備している。

① 公務員基礎演習

公安職・市役所等をめざす企業経営専攻の学生と多様な公務員志望の学生を対象に、東京アカデミーとの連携授業として公務員基礎演習（自然科学、教養数学など4科目）を開講している。本授業は、多くの職種で必要となる一般教養科目として位置づけ、公務員試験をめざす学生の基本的知識を習得し、基礎力を養成する場としている。

② 行政職特別演習

公共経営専攻の2年次では、行政職を志望する学生を対象とし、東京アカデミーとの連携

授業として行政職特別演習（主に専門科目主要7科目）を開講している。国家公務員や地方上級の合格に必要な専門科目の基礎を、2年次に行政職特別演習として学び、3年次の公務員講座への橋渡しをするものとして、専攻の専門教育科目として位置づけ、卒業単位として認定している。本授業は本学教員が担当する経済学、憲法、民法等の専門科目とも連動させて公務員試験の合格につながるように、定期試験は本番を見据えた問題を出題している。共通教育科目で開講されている科目も活用しながら、3年次講座へつなげ、専門科目を伴う国家公務員や地方上級の志望者を手厚くバックアップする体制をめざしている。

③ 公務員試験に直結する特色ある授業科目

公務員試験で必要となる知識・スキルの習得を目指し、論作文、グループワーク、自治体研究、エントリーシートに関する講義及び演習課題を実施し、添削・フィードバックをする「公務員特別演習」や、近年公務員試験においても利用が増加している SPI 及び SCOA 試験への対策授業として「ライセンスセミナー公務員」を設けている。また3年次には「公共経営論」等の授業を通じて公務員の仕事への理解を深め、市役所でのインターンシップにつなげている。

④ IBU 公務員プログラム

1) 1年生講座

2024年度も4月から公務員試験の入門講座を実施した。本講座は新入生の公務員試験学習のスタートとして、その他の授業科目や2年生の行政職特別演習等につなげる役割を担っている。

2) 3年生講座

教養科目は全員受講、専門科目は国家公務員や国税専門官、県庁などをめざす学生が受講している。本年度は出席率が昨年度より改善したため、来年度もその出席率を維持することを目指す。専門科目を受講している学生が必ずしも専門科目を必要とする官庁を受験するとは限らないが、将来、志が広がることを想定し、また就職した後の仕事自体、そして昇任試験においても役立つこともあり積極的に支援している。なお、本年度より専門科目の講座の曜日・時限を調整したこともあり、専門科目の出席率も上昇した。

3) 公務員受験のための模擬試験

本年度は昨年度に引き続き授業期間外に模擬試験日を設けることにより、計画的に対面で実施することができた。また本年度は試験的に SPI 模試の導入も行った。

4) 2024年度卒業生の公務員試験合格実績

2024年度の結果は下記のとおり、のべ32名（実数19名）であった。

岡山県警(1名)、兵庫県警(1名)、福井県警(1名)、和歌山県警(1名)、岡山市消防(1名)、西宮市消防(1名)、大阪府庁(1名)、和泉市(2名)、貝塚市(1名)、羽曳野市(1名)、泉佐野市(2名)、松原市(2名)、富田林市(1名)、宇陀市(1名)、裁判所事務官(1名)、桜井市(4名)、茨木市(1名)、堺市(2名)、忠岡町(1名)、高槻市(2名)、太子町(1名)、豊能町(1名)、大阪府学校事務(1名)、相模原市学校事務(1名)。

(7) 必修化している資格取得支援

① 簿記能力検定3級1年生全員受験（必須）のための支援

例年どおり、新入生は、7月実施の全経簿記能力検定試験3級を全員受験（受験料は大学負担）した。これは、大学入学前に資格試験等に挑戦したことがない学生たちに成功体験をして自信をつける機会を与えるために設けている。しかし、コロナ禍以降、検定試験当日に体調不良などの理由から欠席する学生がいることにより、合格率は伸び悩んでいる。この資格取得を機会に頑張りはじめる学生も少なくない。

② ビジネス実務マナー検定全員受験のための支援

3年生夏学期オールインターンシップの就業体験の実施に向けた「インターンシップⅠ」の授業の一環として、授業内容の習得状況を確認するとともに、学生がビジネスマナーや社会人に必要な行動力、判断力、表現力を磨く為の知識習得を支援するために、平成30(2018)年度より、受験料を大学負担として3年生全員に受験を課している。

2024年度のビジネス実務マナー検定3級受験結果は、残念ながら受験の合格率は下降したものの、「ビジネス実務マナー検定」で使用しているテキストに関するアンケートでは、学修した内容がインターンシップや就職活動に大いに役に立っているという結果が出ている。アンケートの結果を精査し、受験に向けての支援を強化していく。また、上位級を受験する学生は個別指導を行っている。

③ 成功体験を積み将来のキャリアを考える「ライセンスセミナー」

本学部では、将来のキャリア形成に役立つ資格取得を支援する科目として、ライセンスセミナー科目を設けている。単に知識の習得レベルを確認するだけでなく、合格することによって成功体験を積み、目標にチャレンジして達成する喜びを経験するとともに、将来のキャリアにつながる資格を取得する機会としている。

(8) 企業との連携授業：「実学マネジメント論Ⅰ・Ⅱ」

「実学マネジメント論」は、社会人のリアルを学ぶ本学部の特色ある授業のひとつである。本科目は、「働くとは」「仕事とは」「社会人になるために必要なことは」などをテーマに、経営者から若手まで多様な講師の講義を通して様々な業界・職業について理解を深め、将来のキャリアを考え、職業適性を発見することを目的としている。講師は毎年入れ替えており、Ⅰ、Ⅱという形で2回受講できる。

本学の教職員の独自依頼企業を中心に、近畿経済産業局の推薦による、情報通信、金融機関、人材派遣、外食、流通、プラント、税務署、不動産、ゲーム、ホームセンター、ドローン、NPO、などの優良企業11社による講義を実施した。インターンシップや採用に繋げることも狙っており、学生からの授業感想は前向きな意見が多く、「知らなかった業界に興味湧いた」「仕事の厳しさと楽しさが理解できた」など、好評であり、実際に求人やインターンシップに応募した学生も少なくない。

(9) 海外インターンシップ

平成29(2017)年度よりオーストラリアで実施してきたが、円安や費用高騰のため、費用が高額になりすぎ希望者が出なかった。2023年度から、ベトナム・ダナン市のFPT大学と、大学で新たに連携協定を締結し、2024年春休みに1名の学生が全国の大学合同プログラムに参加したが、期間が1ヶ月と長く、内容、英語レベル的にも本学経営学科生のニーズ

と異なるものであった。

そこで、2024 年度は経営学部らしい海外研修として「アントレプレナーシップ（起業家精神）の実践」をテーマとし、語学レベルに関係なく参加できる、マーケティングや商品企画販売を主な内容とする 2 週間の新プログラムを、本学部とベトナム・FPT 大学とで共同開発し夏休みに実施した。参加費補助を受ける 2 年次特待生 2 名を含む 9 名が参加し、先方側にも好評であったことから、来年度も改良して実施する予定である。

(10) ビジネスプランコンテストと起業支援

平成 26（2014）年度から経営学科独自の取り組みとして、「IBU ビジネスプランコンテスト」を行っている。「出でよ！未来の起業家たち」をテーマに、新商品、新サービス、アプリケーション、公共サービスについての学生のビジネスプランを公募し、創造性を競うもので、恒例としている。授業で学んできた関連科目の知識を実際に活用し、事業計画にまとめることで、起業家精神を涵養し、学生起業家、経営者、マーケターを育成、輩出することを狙いとしている。

11 回目となる本年度も、大学基礎演習はじめ、関連科目等で学部を越えて全学年を対象にプランを公募、グループや個人から約 80 プランの応募があった。書類選考を通過した 12 プランについて、1 月 28 日にコンテストを実施した。学部教員全員と関連科目非常勤教員 2 名、金融機関や藤井寺市・商工会職員が審査員となり、アイデアの独創性、学生らしさや社会性、市場性、発表完成度、プレゼンテーションスキルの観点から審査を行い、優勝、特別賞、準優勝、入選作品を選定した。

単にコンテストに留まらず、実際に創業を目指す学生、プロジェクトを行いたい学生やチームには、担当教員はじめ、関西ベンチャー学会所属の教員・非常勤講師・事業化コーディネーターが、先輩起業家やメンター紹介はじめ、開業の支援を行っている。また、家業継承希望の学生についても、父兄との面談や、事業所訪問などを通じ、円滑な企業継承と発展を支援している。

(11) 学生プロジェクト活動

学生主体の下記の地域連携活動のサポートを経営学部設置当初より継続的に行っている。

① 地域連携研究会 Glanz

経営学部 1 期生（2008 年）の有志学生たちから始まった地域との協働による研究会（Glanz）活動を学部横断的に発展させて組織化した学生主体の地域貢献活動を経営学部の教員で支援している。コロナ以降、休止していた週 1 回実施していた有志の活動は、SA 学生のための活動となったが、再開を検討している。

② 「こよみ手帳」の制作

2024 年度も羽曳野市・藤井寺市の世界文化遺産やイベント、グルメ、商店街の紹介等の情報に学生デザインのスケジュール帳を掲載した「こよみ手帳」13 号を市役所や商工会、商店街等多くの方々からのご協力をいただいて完成させることができた。「こよみ手帳」の発行について、藤井寺市長をはじめ、多くの方々から応援いただき、現在は問い合わせもいただくほど地域に定着し、完成した冊子は、例年どおり地域の各所に配布した。

③ 地域イベント・まちづくりボランティア支援

地域連携関連授業の履修生や、すでに履修した有志学生が中心となり、卒業生も加わり、羽曳野市・藤井寺市などを中心に、様々なまちづくり・まちおこし活動にボランティアスタッフとして参画している。

本年度は、ボランティア学生・卒業生・教員が、津堂城山古墳・ハレマチビヨリ、道明寺歴史まつり、道明寺天満宮宮子屋、羽曳野ソニック、藤井寺ハロウィン「デラハロ」、羽曳野市古墳 DE るる、藤井寺市民まつり、辛國神社ほしまつり、シュラホールこけら落としイベント企画に参加した。さらに 2024 年度から藤井寺駅前のイルミネーションを点灯するプロジェクトについて、経営学部学生を中心に参画している。

また、卒業生の勤務する株式会社ジェイラインの運営する地域ブログ「オオサカジン・街ブラ企画藤井寺」と連携により地域の店舗やイベントの取材とページ作成を行った。

これらの活動から、地域に関心を持ち、愛する心を涵養するとともに、将来の地域を牽引する若手リーダーの育成、輩出を狙いとするものである。

(13) 公務員自主勉強会

例年通り授業時間外に個別に教員主導のもと勉強会や面接練習を行った。

1 年生は、例年通り多様な進路の 4 年生の合格体験談を対面で直接聞く機会を設けることができ、将来の公務員試験へのモチベーションを高めることができた。

2 年生は、恒例としていた警察や自治体の方々を招待しての 1 年生向公務員説明会が、コロナ禍により 2020 年度より開催できていないが、先輩と後輩とのタテの人間関係作りなどの点からも有意義な本イベントの再開をめざしている。また低学年学生は本学の短期大学部ライフデザイン学科が、社会福祉法人日本ライトハウスと連携して行っているボランティアイベントに多くの学生が参加した。

3 年生は、随時、質問への対応をするとともに、課題管理を行うなど、ゼミ前の時間等を使い、自主勉強会を開催している。3 年終了後の春休み期間（毎週火曜日）の勉強会ではイングと連携し、ゼミ担当教員全員で学習のサポートを行っている。3 年生のこの期間には公務員試験に関する対策および出願・エントリーシート等の指導に加え、各ゼミ担当教員による少人数での個別勉強会も開催し、東京アカデミーと連携した面談も実施し、進路相談なども行っている。4 年生の合格体験談を聞く機会も恒例となり、公務員試験に向けてモチベーションを高めることができた。このように、試験を控えた学年学生の長期休暇期間は、毎週 1 回、勉強会を開くことによって、一人でも多く希望の進路に進むことができるようサポートしている。さらに、市長とのタウンミーティングにおいて 3 年生 2 名が司会を務め、希望者が参加するなど、市政に直接かかわる機会等も設けている。

4 年生は、担当教員と東京アカデミーが連携して、継続的に個別の勉強会、出願先の相談、面接練習、集団討論の練習など、毎週 1 回、全体での勉強会を開くことによって、一人でも多く希望の進路に進むことができるようにサポートしている。

以上

看護学部 看護学科

1. はじめに

看護学部では、①豊かな教養と高い倫理観を醸成すること、②自ら考え、課題を発見し、解決の方法を見出し、行動できる主体性と創造性を涵養すること、③看護の本質を熟考し続け、どんな状況であっても最善の看護を提供できる実践力を身に着けること、これらをディプロマ・ポリシーに挙げている。そして、これらの卒業時に修得すべき力を学生が4年間でバランスよく修得できるようにカリキュラムをデザインし、教育活動にあたっている。看護学部は、2023年3月に、完成年次を迎え、2025年3月に3期生を社会に輩出したばかりである。完成年次までの間に、本邦における保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正がなされ、それに対応するように2022年4月以降入学生のカリキュラムを変更した。そのため2024年度は、1・2・3年次生が新カリキュラム（うち、1年次生はより順序性を重視したカリキュラム）、4年次生が旧カリキュラムとして運営し、ディプロマ・ポリシーに沿った成果を積み上げ、変化する社会のニーズに応じた看護人材養成の使命を果たすべく教育を展開してきた。また、教育の質向上には、教員の学習機会の保障や研究支援も重要であるため、学部全体で相互に支援し合える環境を整備してきた。さらに、開設時よりカリキュラム・ポリシーに挙げている教育方法として、学生の主体性を引き出し、学生自ら進んで調べる力を身につけることを重視するアクティブ・ラーニングを実践している。なかでも、看護実践でのあらゆる状況、患者の状態を学習者の学習準備に合わせて再現した環境での体験型学習であるシミュレーション教育を活用している。そして、社会の人々の健康と生活を守るために尽力されている保健医療福祉の専門機関、施設、サービス事業所などの本学の実習施設の協力のもと、対象者と学生の安全を保障し、コロナ禍を経た感染対策には留意しつつも、本格的な実習教育が従来に近い形で運営できるようになった。

これらの一年を踏まえた看護学部のFD・SD活動について、特に、教員の教育力・研究力向上のサポート、シミュレーション教育の推進、看護実践開発研究センターにおける活動を中心に報告する。

2. 授業相互参観について

全学の取り組みである授業参観では、以下の通りの相互授業参観の実施科目の公開授業を設定した。

日時	時限	領域	氏名	科目名
5月8日	2限	母性・助産看護学領域	戸田千枝	助産概論
5月13日	3限	国際・災害看護学領域	亀井縁	グローバルヘルスと国際看護
5月14日	1限	在宅看護学領域	乗越千枝	生活健康論
5月14日	5限	精神看護学領域	荒井春生	精神保健
5月15日	1限	基礎看護学領域	舟木友美	生活支援論
5月22日	3限	基礎看護学領域	今井秀人	生活支援技術演習
5月28日	2限	老年看護学領域	山崎尚美	療養生活支援技術演習 II
5月31日	1限	養護	波田野希美	学校保健論
5月31日	5限	公衆衛生看護学領域	廣地彩香	地域生活支援技術論
6月10日	3限	小児看護学領域	西元康世	成育療養生活支援技術演習
6月14日	1・2限	母性・助産看護学領域	柳澤奈美	母性生活支援演習
6月24日	4限	地域生活支援論 I	上野昌江	公衆衛生看護学領域
6月26日	3限	基礎看護学領域	中山由美	生活支援技術演習
6月27日	1限	老年看護学領域	山崎尚美	ケースマネジメントと多職種連携
6月28日	4限	成人看護学領域	福田和明	看護の歴史
7月1日 7月8日	3・4限	小児看護学領域	藤澤盛樹	成育療養生活支援技術演習
7月3日	3・4限	基礎看護学領域	中村陽子	看護治療技術演習
7月10日	3限	基礎看護学領域	重年清香	看護治療技術演習
7月15日	3・4限	小児看護学領域	宮原真二	成育療養生活支援技術演習
7月16日 7月23日	3・4限	成人看護学領域	吉川有葵	療養生活支援技術演習 I

授業科目の内容や教育手法のブラッシュアップのヒントを公開授業担当教員・参観教員が共に得ることを目的に実施した。延べ42名が参加し、今年度は全学授業参観の時期に合わせ、他学部からの参観もあり、看護学部の教育への関心が寄せられた。学部内としては、講義科目よりも演習科目への参観者が多く、シミュレーション教育を含め、看護教育における実践的な教育手法に関心の高いことがうかがえた。以下、参観者へのアンケートより自由記述の一部を抜粋する。

・実習につながるようなワークや学生への問いかけをすることで、講義で聞いた知識か

ら実習で使える知識になると感じた。

- ・個人ワークで効果的な学びを行うため、巡回し、その場で全体にフィードバックする方法を取り入れたい。
- ・シミュレーションの際に、定点カメラではなく、ハンディカメラを用いることで、実施学生の視点が他の学生にクリアに届けられる点がよいと感じた。
- ・段階毎に理解を深めて、最後に目標を達成できるように導く方法はぜひ取り入れたいと思った。
- ・事前学習に YouTube 動画を作成しておられ、テロップに注意点やコツがまとめられていてとても理解がしやすかった。手順書が丁寧に作りこまれていて、学生が一つ一つ確認しながら経験し、理解に落とし込む様子がみられた。

3. 学科独自の取り組みについて

1) 教員の教育力・研究力向上のサポート

(1) 科研費獲得支援研修

科研費申請支援に関する本学のリソースを知り、申請や申請書のブラッシュアップに向けた書き方の工夫を共有することを目的に、かつ、科研費公募日程が年々早まっていることから昨年度よりも前倒し、2024 年 5 月 20 日（月）5 限に看護学部教員 22 名、地域連携・研究推進課 2 名で実施した。朝野忠明氏（地域連携・研究推進課）より、科研費に関する研究助成制度や申請手続き方法などの活用するための基本的な知識、ならびに、本学独自の科研費獲得支援について講演いただいた。また、研究不正防止に関する具体策の周知がなされた。藤澤盛樹准教授（看護学部・大学院看護学研究科）より、若手研究・基盤研究（C）申請書の書き方のヒントとなる内容について、ご自身の経験や研究計画を基に講演いただいた。さらに、上野昌江教授（看護学部・大学院看護学研究科）より、審査員の立場から、審査員に伝わりやすい申請書の工夫方法を講演いただいた。

科研費に関する基本的な情報提供や実際の活用法、申請の工夫事項にポイントを絞った内容で理解しやすいと感じてもらい、アンケート結果から研修内容、時間、研修内容などに関しては、好評であった。実際に、本学の科研費申請支援のサービスを受けた教員もあり、申請資格のある教員 12 名のうち 11 名の 2024 年度申請につながった。

(2) トピックス研修『ループリック評価の設計とワークショップ』

学部教員のニーズから、ループリック評価の基本概要を理解し、ループリックの活用がイメージできるようにすることを目的に、2024 年 10 月 3 日（木）午後半日かけて開催し、学部教員 31 名が参加した。講師には、帝京大学ラーニングテクノロジー開発室講師で、教育

工学を専門とし、同大学でも学部を横断した教育支援に携わっておられる宮崎誠先生をお招きし、講演とワークショップの研修を行った。

研修時間、内容、教育への活用可能性など、参加者の満足度は、好評であった。以下、参加者へのアンケートより自由記述の一部を抜粋する。

- ・ループリックを組み立ていく過程が分かりやすかったので、活用しやすいと思った。
- ・ステップを踏んで作成していくことや、今まで作っていたものとは違う視点のループリックがあることを知った。
- ・ガニエの分類に基づいて内容を具体的に整理し、行動指針が明確になった。
- ・今まで使用していたループリックを丁寧に振り返り修正点が見つかった。

また、本研修後に、希望領域と希望科目に、ワークショップで作成したループリックの完成をめざした個別のアフターケア研修を実施した。今後、学部全体でディプロマ・ポリシーに基づく、ループリックの浸透を期待したい。

2) シミュレーション教育の推進

(1) シミュレーション教育に対する支援（勉強会・情報交換会の企画・開催）について

- ・新任教員向け説明会（全教員対象）を企画し、下記の通り開催した。

① シミュレーションセンターとデブリーフィングルームの接続方法

日時：5月24日（金）12：30～13：00、5月27日（月）12：30～13：00

② 実習室映像の接続方法

日時：5月17日（金）12：30～13：00、5月28日（火）12：30～13：00

③ イチロー・ラングの使用法

日時：6月7日（金）12：30～13：00

- ・シミュレーション教育に関する授業参観の企画・開催を行った。

日時：7月16日（火）2・3限

参加者：12名

内容：療養生活支援技術演習Ⅰ内におけるシチュエーションベースドトレーニング（術後1日目の観察）の見学

- ・シミュレーション教育の情報交換会を企画し、下記の通り開催した。

日時：8月1日（木）3限

参加者：22名

内容：本学のシミュレーション教育や看護学部の未来構想について、各領域における話題提供（老年「VR」、成人「電子カルテ、シチュエーションベースドトレーニング」、助産「実技試験」）、教員の情報交換会（ミッションタウン構想のアイデア）

結果：本学の取り組みについて理解が深まった、各領域でどのような学習をしているか理解できて学生のレディネスの把握につながるといった意見が得られた。

(2) 教育環境の整備について

- ・ 各種シミュレーターの保守点検等対応を行った。

① シミュレーター「フィジコ」4体の不具合に対する対応

3) 四天王寺ミッションタウンならびにVR等の教材開発について

- ・ 領域・学年横断的シミュレーション教育「四天王寺ミッションタウン プロジェクト」の教材開発に取り組んだ。具体的な活動は以下の通りである。

① 学部長戦略経費の書類作成・申請を行った。

② 新任専任教員(7名)を対象に、日本看護シミュレーションラーニング学会(JaNSSL)シミュレーション教育指導者養成ベーシックコース受講を推奨し受講料への対応を行った。

③ Google サイトを活用した教育用電子カルテサンプルを作成し、成人看護学領域内の演習内で取り入れ、学生の反応や感想、操作性ならびに改善点等を分析、考察した。

④ 教員間で情報交換会を行い、各領域で展開している事例を領域間で共有し、オリジナル教材(仮称)「四天王寺ミッションタウン」の内容、家族構成間の関係性ならびに設置施設等を検討した。

⑤ ③、④の内容を踏まえて、Google サイトを用いてオリジナル教材(仮称)「四天王寺ミッションタウン」ホームページの制作を行った。

⑥ 教材活用に向けて、環境の整備(iPad・プロジェクター等の導入)を行った。

- ・ VR導入に向けて環境の整備を行った。具体的には、昨年度に引き続き360度カメラを使用してサンプルコンテンツを制作した。VRの取り扱いにセキュリティ上の課題があること、360度動画の撮影ならびに取り込みに時間を要するため、教育的活用が容易となるようシステムを簡易化していくことが今後必要である。

4) その他

- ・ シミュレーションセンターの見学依頼に対応した。

① 6月11日(火): 岐阜聖徳学園大学(11名)

② 9月3日(火): 京都先端科学大学・藍野大学(2名)

- ・ シミュレーション教育に関する各種セミナーに参加した。

① 第9回全国シミュレーションスペシャリストセミナー(11月3日)(委員2名)

② 第6回日本看護シミュレーションラーニング学会(2月10日)(委員2名)

3) 看護実践開発研究センタープログラム実施

看護実践開発センターは、地域における教育の提供や研究の実施を通して、看護ケアの質の向上と医療提供体制の構築、また、研究実施を通して看護ケアの質の向上を図り、それらをもって人々の健康維持・向上に寄与することを目的としている。本センターの機能としては、「教育機能」、「研究機能」、「専門職支援機能」の3つの機能を有し、Ⅰ.専門職の人材育成、Ⅱ.キャリア開発支援、Ⅲ.研究実施と促進である。

開設7年目となる2024年度は2023年度の収益金を充てる看護職の実践能力・研究能力

開発プログラムの4コースが、開講最低人数5名に満たず開講できなかった。そのため、地域連携・研究推進課予算で研究助成金20万円を計上することにした。しかし、令和6年度で募集した研究助成金の申請者がいなかったことから、執行することはなかった。

2024年度は現場の看護職・介護職および大学院修了者の実践能力と研究能力向上の支援ため、複数の研修プログラムを企画した。これらは、看護職・介護職として臨床で活躍する現任教育の一環として、地域・社会に貢献することを目指し、看護基礎教育や現場での教育やケア実践の基礎的知識を修得することを目的とした。

本プログラムは各コースに分かれており、2024年度に実施したコースは①-A：認知症ケア(基礎編)、①-B：認知症ケア(ケア実践編)、①-C：認知症ケア(管理編)、③-E：基礎から学ぶ病院防災の研修内容となった。

参加者数については、①-Aコース(1日間)は定員50名に対しオンライン受講を含めて延べ28名の申し込みであり終了、①-Bコース(2日間)は定員50名に対し延べ44名の申し込み、①-Cコース(2日間)は定員50名に対し延べ35名の申し込み、③-Eコース(1日間)は定員20名に対し13名であり、実施が終了した。他の3コースについては、受講希望者が定員に満たなかったため非開講となったため、定員数を確保するためにリクルート方法および料金設定の見直しが必要である。

4. 評価と課題

1) 教育力向上

授業参観では、2コマ参観をお願いしていたが、授業や統合実習などで参観の難しい教員がいたり、アンケートの入力漏れを把握できていないこともあったりしたため、参観しやすい運用方法や参観動向の把握に改善が必要がある。また、集中講義担当教員の授業が授業参観開催時期と合致せず公開授業の提供が困難であったため、次年度は集中講義担当教員の授業が公開可能な日程で運営することが必要となる。授業参観全体としては、実習科目の少ない夏学期に実施できたことで、相互参観が可能になり、学部教員間で学び合うことができた。さらに、看護学部全体でルーブリックの手法を具体的に学べる機会も得られ、各科目でディプロマ・ポリシーに沿った評価が浸透し、ディプロマ・ポリシーに即した教育につながることを期待する。

シミュレーション教育推進では、シミュレーション教育の環境の整備、各種シミュレーターのメンテナンスを継続し、オリジナル教材(仮称)「四天王寺ミッションタウン」の活用やVRの導入等を通して、シミュレーション教育を拡大していくことや、シミュレーション教育の実績、取り組みについての広報活動が課題となる。授業参観でも演習科目に関心が高く、実践的な授業科目の質向上は、看護学部教員の総意でもあるため、引き続き、シミュレ

ーション教育推進となる教育環境の改善に取り組んでいきたい。

2) 研究支援

研修が科研費申請につながっており、今後もブラッシュアップしながら継続する。今後は、採択率向上や研究継続の支援についても検討を重ねる。学部の繁忙状況からは、教員の学習や研究機会を確保することが簡単ではないが熱い思いをもって教育にあたっている看護学部教員集団のモチベーションを維持・向上できるような研究支援を一層充実させたい。

3) 看護実践開発研究センターの活動

全日程を羽曳野キャンパスおよびあべのハルカスサテライトキャンパスとオンライン受講を利用したハイブリット研修として企画・実施したが、参加者が少なく非開講になった講座がいくつかあった。したがって、開催の時期およびリクルートの方法や受講料の改定、プログラムの外注など、受講者が参加しやすく、かつ、興味関心をもってもらえるような広報活動を検討していく。

短期大学部 保育科

1. はじめに

短期大学部保育科では、2024 年度も、これまで進めてきている「保育実践演習」の実施を中心に、科目間連携、教員間連携を深めながら、「質の高い保育者の育成」を目指す教育と研究活動の拡充を進めた。本授業では、保育者としての専門性の向上及び保育実践力をさらに育めるよう試みた。

2. 「保育実践演習」について

(1) 概要とシラバス

「保育実践演習」は、短期大学部保育科の初年次教育の授業にあたる「保育実践演習Ⅰ」を含む、「保育実践演習Ⅱ」「保育実践演習Ⅲ」「保育実践演習Ⅳ」と2年間に渡って続く授業であり、各異学年集団での学びあいも含み、保育科の核となる授業でもある。この授業は毎年の授業アンケートや学生のワークシートを参考に教員間で評価を行い、次年度の計画及びシラバスを作成している。今年度の授業概要及びシラバスは以下のとおりである。

受講者数	1 年生（保育実践演習ⅠおよびⅡ受講者）	43 名
	2 年生（保育実践演習ⅢおよびⅣ受講者）	61 名
担当教員	保育科専任教員 12 名（うち 1 名は育児休暇取得中）	
基礎グループ	A～H の 8 グループ（1 グループあたり 1, 2 年生合わせて約 13 名）	
使用教室	講堂 701 教室（メイン教室）、講堂 703 教室 音楽棟 多目的室 2 部屋及びリズム室、図工室	

表1 令和6年度夏学期「保育実践演習Ⅰ・Ⅲ」シラバス

日程	回	1年: 保育実践演習Ⅰ	回	2年: 保育実践演習Ⅲ
4月5日	—	<オリエンテーション期間> 基礎グループ発表・自己紹介・受戒会連絡等	—	
4月8日	①	オリエンテーション「今学期のテーマとねらい」 グループ内で自己紹介	①	オリエンテーション「今学期のテーマとねらい」 名札を付けてグループ内で自己紹介
4月15日	②	PROGテスト 教職教育推進センターガイダンス(岡田課員)	②	講演「社会人になるにあたって・就職活動」(キャリアセンター)
4月22日	③	幼稚園長講演「幼稚園の仕事」 幼稚園体験オリエンテーション	③	幼稚園長講演「幼稚園の仕事」 運動会実施内容報告(運動会実行委員)
5月7日	④	春の運動会	④	春の運動会
5月13日	⑤	幼稚園半日体験(保育に出会う) <羽曳野白鳩幼稚園・四天王寺悲田院こども園>	⑤	運動会振り返り 模擬授業準備
5月20日	⑥	模擬保育への参加①	⑥	模擬保育実践①
5月27日	⑦ ⑧	模擬保育への参加②(1時限) 幼稚園半日体験振り返り(2時限)	⑦ ⑧	模擬保育実践②(1時限) 模擬保育振り返り(2時限)
6月3日	⑨ ⑩	キッズシアターかみふうせん講演見学(1・2時限)	⑨	幼稚園実習で模擬保育の学びを実践(1)
6月10日	—	休講		幼稚園実習で模擬保育の学びを実践(2)
6月17日	⑪	先輩出前保育のビデオを見る(冒頭のみ) 人形劇・ペープサートの基本	⑩	出前保育の復習 1年生に伝える内容を考える
6月24日	⑫	2年生の出前保育を見て学ぶ 2年生のアドバイスから学ぶ	⑪	1年生へ出前保育を見せる 1年生へアドバイスをする
7月1日	⑬	2年生からダンスを教わる	⑫ ⑬	出前保育のダンスを作る(1時限) 1年生に出前保育を教える(2時限)
7月8日	⑭	休講(キャンプの振替)	⑭	子どもの救命救急講習
7月15日		休講(キャンプの振替)	—	休講
7月22日	⑮	実習について先輩に聞きたいことを考える(前半) 先輩の実習体験から学ぶ(後半)	⑮	保育所長講演「保育実習で学んでほしいこと」(前半) 後輩に実習体験を語る(後半)
7月29日		まとめ		まとめ

表2 令和6年度冬学期「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」シラバス

		2年: 保育・教職実践演習(幼稚園)	2年: 保育実践演習Ⅳ	1年: 保育実践演習Ⅱ
1	9月24日	オリエンテーション 子育て支援体験の説明	保育探究演習報告会準備①	オリエンテーション
2	10月1日	子育て支援体験の準備①	卒業生講演	卒業生講演
3	10月8日	子育て支援体験の準備②	1年生の出前保育練習を指導する	出前保育練習①
4	10月15日	子育て支援体験①班(②班は休講)		幼稚園実習
5	10月22日	子育て支援体験②班(①班は休講)		幼稚園実習
6	10月29日	子育て支援体験振り返り	保育探究演習報告会準備②	出前保育練習②
7	11月12日	保育探究演習報告会リハーサル	保育探究演習報告会	1時間目: 出前保育練習③(補講) 2時間目: 保育探究演習報告会に参加
8	11月19日	「連れ去り防止講習会」(予定) 近隣保育施設招待		出前保育練習④
9	11月26日	1年生出前保育リハーサルに参加	運動会の準備①	1時間目: 出前保育リハーサル 2時間目: 出前保育最終練習
10	12月3日	運動会準備②	運動会準備③	出前保育に出る
11	12月10日	運動会準備④	運動会準備⑤	出前保育の振り返り
12	12月17日	運動会リハーサル	冬の運動会	冬の運動会
13	12月24日	講演「社会人になるにあたって」 運動会の振り返り	前半: 1年生への施設実習の話を考える 後半: 1年生に施設実習の体験を語る	前半: 講演「障害者施設の仕事」 後半: 2年生から施設実習の話を聞く
14	1月7日	卒園式準備	卒園式準備	児童養護施設長講演「養護施設の仕事」
15	1月14日	休講	休講	休講
定期試験	1月21日	卒園式	まとめ	卒園式に参加(1時限) まとめ(2時限)

(2)地域の幼稚園・保育所などとの連携

今年度の夏学期の幼稚園半日体験活動を5月13日（月）に、四天王寺悲田院こども園と白鳩羽曳野幼稚園の2か所において実施できた。冬学期には、地域の幼稚園・保育所での出前保育活動及び、地域子育て支援センターでの子育て支援体験活動も行うことができた。

① 幼稚園半日体験（1年夏学期：5/13）

- ・学校法人久宝文化学院 白鳩羽曳野幼稚園
- ・社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院こども園

② 出前保育（1年冬学期：12/3）

- ・学校法人久宝文化学院 白鳩羽曳野幼稚園
- ・社会福祉法人四天王寺福祉事業団 四天王寺悲田院こども園

③ 子育て支援体験（2年冬学期：10/15, 10/22）

- ・羽衣子育て支援センター（高石市）10/22
- ・柏原市つどいの広場「ほっとステーション」（柏原市）10/15, 10/22
- ・富田林市第1幼児教育センター（富田林市）10/22
- ・富田林市第2幼児教育センター（富田林市）10/15, 10/22
- ・南海愛児園子育て支援センター（高石市）10/15, 10/22
- ・ひかり保育園（藤井寺市）10/22
- ・藤井寺カンガルー教室（藤井寺市）10/15, 10/22
- ・東羽衣子育て支援センター（高石市）10/15

事前にそれぞれの子育て支援先に参加する上での配慮すべき事項などを全員で共有した。また、事後の反省会での発表は、本年度は2年生のみを対象としての開催とした。

(3)外部講師による講演

今年度は以下の方々に外部講師としてご講演をいただいた。

① 幼稚園園長の講演（1年夏学期）（4/22）

- ・森 佳織 先生 松原市立わかばこども園 園長

② 子どもの救急救命講習（2年夏学期）（7/8）

- ・西元 泰世 先生（看護学部 准教授）
- ・藤澤 盛樹 先生（看護学部 准教授）

③ 保育所所長の講演（2年夏学期）（7/22）

- ・森山 佳代 先生 四天王寺悲田院こども園 園長

④ 卒業生の講演（1年・2年冬学期）（10/1）

- ・桑原 夢華 先生 社会福祉法人若竹福祉会 若竹保育園 保育士
- ・香西 杏美 先生 斑鳩町立たった保育園 保育士

⑤ 社会人になるにあたっての講演（2年冬学期）（4/15）

- ・小里 樹実氏 四天王寺大学キャリアセンタースタッフ（本学保育科卒業生）

⑥ 児童養護施設に関する講演（1年冬学期）（1/7）

- ・中條 薫先生 社会福祉法人 児童養護施設 羽曳野荘 理事長・施設長

⑦ 保育科卒園式への学外来賓者（1・2年冬学期）（1/21）

- ・松本 千幸先生 社会福祉法人福文会 松の実保育園 園長 及び 本学非常勤講師
- ・伊藤 美幸先生 本学非常勤講師（英語Ⅰ・Ⅱ）
- ・荒木 環先生 本学非常勤講師（音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ 他）

(4) 科目間連携と実施時期

当学科では、これまで「保育実践演習」と他の数科目間で科目間連携を行い、成果をあげてきた。今年度の実施できたものを以下に記す。

① 「保育実践演習Ⅳ」と「保育・教職実践演習（幼稚園）」（2年冬学期）

文部科学省指定科目「保育・教職実践演習（幼稚園）」と当学科独自の科目である「保育実践演習Ⅳ」を連携させている。教育効果を上げることをねらって、両科目を時間割上連続して開講している。その事例として、1年生（2セメスター）の「保育実践演習Ⅱ」で取り組む地域保育現場での出前保育活動の計画と準備においては、「保育・教職実践演習」の授業のなかで2年生が保育実践技術を活かして1年生へのアドバイスを行う協働的な活動を行うことで、1、2年生両方の保育実践力向上を図っている。

② 「保育実践演習Ⅳ」と「保育内容・表現（総合）」（2年冬学期）

昨年度同様、「保育内容・表現（総合）」（2年生対象授業）と連携し、「保育実践演習Ⅱ・Ⅳ」の中で『保育科卒園式』を実施した。『保育科卒園式』は、保育施設における卒園式を「表現の場」と捉え自分たちの卒園式を自分たち自身で作りに上げることで、そこでの保育者、子どもたち双方の表現を学ぶことを目的に2014年から取り組んでいる活動である。

今年度も1年生が参加し「保育実践演習」の授業内で行うことができた。今後も卒園式は「保育実践演習」と「保育内容・表現（総合）」の科目間連携を以って、保育科学生・教員全員参加のもと実施する予定である。

④ その他

従来から行っている科目間連携として、1年生の出前保育の練習の期間は、「保育実践演習Ⅱ」と「音楽Ⅳ」とが連携し、学生の表現力がよりいっそう充実したものとなるよう授業内容を配慮した。

3. 授業相互参観について

2024年度は、以下のとおり、授業相互参観計画を作成して実施した。

所属	担当教員	月日	曜日	時限	公開授業科目名	教室	遠隔あり(○)	合評会(実施時期)
保育	原 祐子	6月26日	水	3	保育教科演習	6-254		授業終了後
保育	奥野 孝昭	6月27日	木	4	体育講義	5-302		授業終了後
保育	東 隆史	6月24日	月	5	保育内容・健康	6-351		授業終了後
保育	奥 千恵子	6月7日	金	4	音楽Ⅰ（器楽）	701		授業終了後
保育	伊達 由実	6月11日	火	2	小児体育Ⅰ	小体育館		授業終了後
保育	韓 在熙	6月14日	金	5	幼児教育課程総論	4-412		授業終了後
保育	梅野 和人	6月10日	月	3	保育内容・環境	6-253		授業終了後
保育	岸和田 かおり	6月24日	月	3	乳児保育Ⅱ	4-215		授業終了後
保育	吉田 郁	6月26日	水	3	保育教科演習	6-254		授業終了後
保育	明石 英子	6月25日	火	4	子ども理解と理論の方法	4-412		授業終了後
保育	内本 久美	6月19日	水	2	図画工作Ⅰ	2-410		6月19日3限
保育	齋藤 奈都美	—			—	—		—

4. 学科独自の取組について

(1) 公立受験対策勉強会の実施と「社会福祉特別講義Ⅰ」への保育科学生の受講

公立受験希望者への指導は保育科教員全員が其々の専門性を生かし、受験内容に応じて個人指導を行っていたが、「保育教科演習」の開講により、系統立てた指導が行えるようになった。授業では公立希望者同士の学び合いの場として、集団討議・グループワークなどの集団で行った。そのことにより、自分の良さに気付き、他学生の姿に触れ、学びが深まったように思われる。

一次試験対策として、担当教員による SPI 中心の授業はそれぞれの受験者のやる気を引き出し、二次試験・三次試験合格へ向け強化されていったように思われた。数学分野については、教育学部教員の「算数」の授業を公立受験対策の指導に充てていただいた。

その結果、今年度は、大阪市3名、松原市2名、羽曳野市1名、藤井寺市1名、桜井市1名、香芝市2名、貝塚市1名、大阪狭山市1名の地域で、実質12名の合格者を出すことができた。さらに、今年度も1年生への公立受験対策として、人間福祉学科健康福祉専攻が東京アカデミーと協働して開講している夏学期の集中講義「社会福祉特別講義Ⅰ」を引き続き保育科の1年次生も受講できる形にさせていただき、合同開講にさせていただくこととした。1年次から将来の保育者としての自分の姿を意識することで、卒業までの学びに向き合う姿勢が大きく変わったと思われる。

(2) 高大連携事業の実施

奈良県立桜井高校普通科保育コースとの高大連携授業は、6月、11月の2回実施した。

6月は「子どもが育つ運動遊び」と題して実施した。冒頭に「スキヤモンの発育曲線」について注目し、幼児期の神経系は早い時期から発達し、3歳児で成人の約60%、6歳児までには約90%まで発達することを解説した。このことから、「幼児期の運動遊びの意義」、「運動遊びで学ぶこと」、「運動好きな子どもを育てるために」の流れにそって、保育者の

運動遊びの指導法について事例を交え実施した。また、2012年に文部科学省が策定した「幼児期運動指針」のポイントを解説し、保育現場は、この指針をもとに実施されていることを伝えた。講義の合間には、幼児の発育の流れを踏まえ、じゃんけんを使った遊びを行った。子どもとのコミュニケーションの取り方や遊びを使って幼児の発達を促す方法を伝えた。

50分間という講義時間だったが、問いかけに対しても反応があり、活気のある充実した時間になったのではないかと自負している。

11月は「保育内容・表現」についての授業を行った。まず、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」に基づき講義を行い、最後に「保育者が楽しくなければ子どもは楽しくないので、保育者は子どもの心と一緒に楽しむことが大切である」と話し、「それでは、子どもの心で表現あそびをしましょう。」と「手あそび」や「歌あそび」に繋いだ。殆どの学生が既に保育系への進学を決めている様子であったので、保育における音楽表現の楽しさを味わうことで、進学後の音楽授業への不安を払拭でき、また将来子どもの気持ちに寄り添える保育者となってくれるようにと心掛けた。

本年は大学での授業の関係で、桜井高校の卒業生を伴うことができなかったが、毎年保育科への入学生を確保できているのは、この高大連携授業の成果と考えられる。しかし、残念なことに令和7年度より課程編成の変更のため「保育コース家庭科」の授業がなくなると伺い、桜井高校での講座はこれが最後となった。

今後も保育科で学んだ学生が母校でその学びを活かし、またそれが高校生にとっても有意義かつ保育科への志が高まるような高大連携授業を、対象高校を拡大し行っていけるよう考えている。

(3) ルーブリック評価導入への具体的検討（造形）

「図画工作ⅠⅡ」「保育内容・表現」ともに対面で授業を行った。正確で、公平な成績評価が、学生の学習意欲を増すと考えて、授業の单元ごとにどこに観点を置いて評価するのかを明確に伝えてから作り始めることを大切にした。授業の課題作品は完成後 図工室の中に展示をして相互鑑賞できるようにしている。他学年の作品から学ぶ機会にもなっている。また学習成果可視化のなかにある造形ポートフォリオにも写真で共同作品をアップするようにした。過去の作品を見ることで教員も学生もその学びを可視化でき、評価が適正であると納得できるように思う。

(4) 2年生「保育探究演習」授業と「学びの発表会」の実施

2年生（3セメスター）開講の「保育探究演習」は、卒業必修科目として、学生が6つの保育テーマ（「多文化保育」「野外活動」「音楽アンサンブル」「造形アート」「子どもの自然科学」「特別支援保育」）から1つを選択し、そのテーマに基づいて保育を自らの興味や関心に沿って深めることを目的とし、また、学生が主体的・協働的に学ぶことを通して質の高い保育の専門性を育むことを目標として2020年に設定した保育科独自の科目である。

今年度の夏学期に行った「保育探究演習」の6つのテーマごとに学んだ内容を「学びの発表会」において、プレゼンテーション（11月12日）を行った。「学びの発表会」は、「保育実践演習」（Ⅱ・Ⅳ）授業において開催し、2年生全員で学びを共有するとともに、1年生に

その学びの成果と自主的に学ぶことの楽しさや保育・幼児教育のよさを伝える、学びの共有を図った。特に、保育探究演習「野外活動」の受講生5人は、1月16日に開催された「IBUプレゼンテーション・コンテスト」において、「野外活動」での取り組みを発表し、敢闘賞を受賞した。

(5) 韓国新丘大学学生との異文化交流における学び

本年度も、本学とMOUを締結している韓国新丘大学の保育科学生との異文化交流を通しての学びが行われた。本年度の「保育探究演習（多文化保育）」の受講生（8名）は、韓国新丘大学での多文化体験活動の事前学習として、多文化保育に関する基礎的知識の学習及び多文化体験活動の準備活動を行い、8月19日から8月21日（2泊3日）までの日程で訪韓した。初日は、韓国新丘大学での学生交流や新丘学付属幼稚園を見学し、韓国の幼児教育現場の環境構成等について学んだ。さらに、8月20日は日韓の学生たちが一緒に参加して、主体的に計画した1日フィールドワークを行った。本活動の準備・進行・まとめの学習過程においては主題的・協働的な学習方法を用いて行っている。また、最終日の8月21日には、新丘大学付属保育園の見学及び子どもたちとの触れ合い活動を行った。日本の絵本の読み聞かせ活動や体を動かす遊びを行う経験から、日韓共通の保育文化を体験することができた。

日韓の学生の交流会や韓国文化フィールドワーク活動を通して、言葉の違いを超えて、お互いの心を伝え合う経験や、また、自国文化と異なる文化を尊重し合う心を学ぶことができた。保育科参加学生の活動終了後の感想には、「日本と韓国の保育の違いを学ぶことができました。韓国は日本とは異なり、子どもが興味を持つような環境作りになっていることが良いと思いました。今後保育をする際に活かしていきたいと思います。」、「韓国の幼稚園と保育園見学で気づいたことは、日本の保育室内と環境が大きく違うことです。韓国の幼稚園や保育園は、絵を書くスペース、ブロックで遊ぶスペースのように遊びの種類で区切っており、また、すべての玩具が見えるところに置いてありました。韓国研修では多様な保育実践を学ぶことができ、今後に活かしたいです。」、「多文化保育をしている保育園の話を聞いて、保護者への配慮や子どもが過ごしやすいような取り組みをしているという保育園で働いてみたいという気持ちが強くなりました。この授業で学んだことをしっかり今後に活かしていきたいです。」等、学生自らの多文化体験を通して、お互いを配慮・尊重することの大切さや文化の多様性についての気づきが多く書かれていた。このような経験は、将来の保育現場において、多様な文化を背景にもつ子どもやその保護者とのかかわりにおいて必要な保育者の専門性として活かせる学びとなっていると考える。

6. まとめにかえて

2024年度はコロナ禍の傷もようやく癒えて、授業の取り組みとしては通常の運営となった。しかし、実際には高校時代に経験したコロナ対応が学生たちの学習姿勢にいまだに色濃く影響を与えているのか、体調不良を理由に安易に欠席するケースが散見され、指導に苦慮することも多くなっている。加えて、学生募集が低迷する中で、入学生の学力低下が進み、その影響は学習習慣が身についていない学生の増加という形で表れている。

いうまでもなく、保育者には、多忙な業務の中でも着実に職務を果たす実践力が求められる。社会に出る前の最後の学習機会である短大生活では、このような実践力を確実に身に着けることが重要な課題となる。その意味で、教科指導においても、単に学習内容の学びとりというだけでなく、学習習慣の育成という視点をももちながらあたるべきではないかと考える。

今後、18 歳人口の減少に加え、保育者志望の学生減少、さらに短大進学者の減少という本科にとって困難な状況が予想される。このような中であって、2 年間という短期間で社会にとって欠くべからざる保育者を養成する本科は、より一層、現在の学生に合致した教育、指導の方法を模索し、その社会的役割を果たさねばならない。所属教員一同、本年度の反省を踏まえて、保育者養成にますます熱をもって取り組むことを確認して次年度を迎えたい。

短期大学部 ライフデザイン学科

1. はじめに

2022 年度に学科名がライフデザイン学科に改まって2年が過ぎた。専門科目が「ビジネス・ICT」「医療事務」「フード」「ファッション」「インテリア」「トータルビューティ」「ブライダル」「グローバルカルチャー」の8フィールドから成ることも昨年と同様である。また多くの授業が資格とリンクしているのは従来通りである。しかし定員 100 名に対して実際に入学した学生数は 75 名で、定員充足率は 75%である。18 歳人口は減少し続け、大学志向、短大離れの傾向もあり、今後入学者数が定員を満たすことは困難であろう。そのため 2025 年度からはライフデザイン学科の定員は 40 名に減少することになっている（実際に 2025 年 4 月に入学した学生数は 53 名）。また 2025 年 3 月には 2 名の教員が退職した。学生定員の減少に伴い学科専任教員の人数も増えることはなく、ファッションフィールド担当の教員 1 名が補充されるのみで、今後は 5 名の専任教員で学科を運営していかなければならない。委員会への出席はもちろん、学科運営にも困難が生じることが予想される。きめ細やかな学生指導をするためには情報共有を強化し、学科一団となって事に当たっていく必要がある。

2. 初年次教育科目（ライフデザイン・ゼミナールⅠ・Ⅱ）について

昨年同様、ライフデザイン・ゼミナールⅠでは、ライフデザイン学科の2年間の学びや、ライフプランという概念を理解するための内容となっている。最初の数回は簡単なゲームなども織り交ぜて友達づくりができる環境を提供し、大学生活に馴染んでいくための内容となっている。残りの授業では、各フィールドでの過去の学習例や、人の一生がどのように描けるかといったライフプランを理解するための内容となっている。授業評価アンケートの結果（回答数 65 人）を見ると、「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」という問いに対して、「そう思う」または「ある程度そう思う」と肯定的に回答した人数は 55 人（85%）だった。また「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」という問いに対しては 59 人（91%）が肯定的に回答しており、意欲的に授業に参加していたことが窺われる。具体的な学生コメントを見ても、「みんなと仲良くなれて良かった」「外部の人からの話を聞いたりできるのが良かった」など、好意的な回答が寄せられた。しかし、授業時間外に予習・復習等に費やす時間は 45 人（69%）の学生が 30 分以内と回答しており、授業時間外に自主的に勉強する習慣を付けさせることが今後の課題であろう。

ライフデザイン・ゼミナールⅡでは、自己理解を深め、ライフプランとキャリアプランをどのように描くかについて学ぶ。そうすることによって、年明けから始まる就職活動を円滑に進めることができるように配慮している。具体的内容は、履歴書や応募書類・エントリーシートの作成、採用面接試験対策、企業研究の仕方、就職活動時に必要なビジネスマナーなどである。授業評価アンケートの結果を見ると（回答数 63 人）、「授業で扱った内容に深く興味・関心を持つようになりましたか」という問いに対して 58 人（92%）が肯定的に回答しており、「この授業について、担当教員の指導に沿って意欲的に取り組みましたか」と

いう問いに対しては 56 人（89%）が肯定的に回答している。学生コメントを見ると「就職活動への意識が変わった」や「就職活動を頑張っていこうと思った」などポジティブなものもある。しかし、ライフデザイン・ゼミナールⅠ同様、授業時間外に予習・復習等に費やす時間は 37 人（59%）の学生が 30 分以内と回答しており、自分で会社等を調べて自主的に就職活動を行うことができるか、一抹の不安が残る。

なお、2 年次での授業科目ライフデザイン・ゼミナールⅢ・Ⅳでは実際の就職活動のサポートとともに、8 フィールドを総括的に扱う課題解決型の学習を行い、専門分野に偏らずに知識・技能を広く総合的に活用できる人材（ジェネラリスト）を育成したいと考えている。

3. 授業相互参観について

主な授業名と担当者名（敬称略）と授業に対するコメント（一部要約）を以下に記す。なお、令和 5 年度のベストティーチャー賞に谷口美佳教授が選ばれたので、その授業を多くの方に参観していただきたかったが、時間等の都合により 2 名に留まった。

(1) フードデザイン実習（担当：谷口美佳）

- 学生が調理実習を始める前にレシピを説明しながらデモンストレーションをしていて、それが非常にわかりやすかった。
- 第 12 回目の授業ということもあったのか、履修している学生は特に明確な役割分担を話し合うでもなく、それぞれができることを手際良く、そして楽しそうに実習している様子が、とても印象的だった。
- 調理実習にも関わらず爪を長く伸ばし、華美なネイルをしている学生が多かった。また三角巾の付け方も、前髪等すべての頭髮を入れておらず、指導するべきだと思った。
- ビビンバについて韓国文化と関係づけて説明していたのが印象的で、聞いていてためになった。
- ゆで卵とゆで時間の関係、温泉卵と半熟卵の違いなど、身近な卵という食材を題材に、学生の関心を上手く引き付けていると思った。

(2) アパレル設計論（担当：鈴木彩希）

- 今までのまとめをゲーム形式の演習で行う授業内容で、グループで問題を作成した後、別のグループが作成したそれと交換しゲームとして解答させていた。問題作成時、解答時の 2 回復習することができ、またゲームの要素があることで学生は楽しそうに取り組んでいた。正解した時には拍手が出るなど、教室の雰囲気も良く学習効果を上げる工夫がされていて大変良かった。

(3) カラーコーディネート演習エキスパート（担当：前田明美）

- 高難度の検定対策の授業であったため、基本的にはテキストの内容に従って進行していたが、教員が教室内を巡回して、学生個人の理解度に寄り添った指導をしていたことが印象的であった。
- 教員の声が非常に聞き取りやすかった。小規模教室のためマイクを使わずに進行されていたが、非常に抑揚のある声で、声量もちょうどよく感じだ。
- 授業は板書によって進行されるため、図などは文字が細くなり、見にくい箇所があったことは改善が要求される。しかし、ライブ的に教員が板書していくことで学生の

理解度につながることもあると思われる。

4. 学科独自の取り組みについて

(1) 資格取得について

ライフデザイン学科では授業と資格がリンクしており、様々な資格にチャレンジすることができる。表1に認定称号取得者数、表2に2024年度の学生の資格取得状況を示す。

表1. 認定称号

認定称号	人数
上級秘書士	9
ビジネス実務士	22
食空間コーディネーター3級	10

表2. 資格取得

検 定	級	合格者数	受験者数	欠席者数
秘書技能検定	2級	9	13	2
	3級	2	2	—
ビジネス文書技能検定	3級	7	8	—
サービス接遇検定	準1級	6	6	—
	2級	6	6	—
医療秘書技能検定	3級	4	18	1
ドクターズオフィスワークアシスト		7	9	—
簿記能力検定（全経）	2級	2	6	—
	3級	6	9	1
MOS（WORD）		1	1	—
MOS（EXCEL）		1	1	—
MOS（PowerPoint）		5	5	—
色彩検定	2級	9	10	—
	3級	23	23	1
色彩技能パーソナルカラー検定	モジュール1	7	7	—
食生活アドバイザー検定	3級	5	5	—
日本メイクアップ知識検定	ベーシック	6	7	—
日本メイクアップ技術検定	3級	6	6	—
アソシエイトブライダルコーディネーター		5	5	—

2022年度は受験者が延べ225人、合格者が171人（合格率76%）。2023年度は受験者が184人、合格者が142人（合格率77%）、2024年は受験者が147人（合格率80%）と受験者数が年々減少している。学科の魅力をアピールするためにも受験者数を増やす努力が必要

である。今年はファッション系の資格（ファッションビジネス・ファッション販売）と建築CADを受験した学生がいなかった。一方で色彩検定に於いてライフデザイン学科は、色彩検定協会より色彩検定協会優秀賞を受賞した。

なお表1の上級秘書士とビジネス実務士の認定方法が今年度より変更になったので以下に記す。「到達目標達成度評価制度」が導入され、申請のあった学生に対し資格申請責任者である教員が「教育課程到達目標達成度評価表」の主旨と記入方法についてガイダンスを実施し、学生に自己評価させた申請に係る一連の書類を協会に提出することで資格認定申請手続きを完了する。この制度は、全国大学実務教育協会が認定する資格の有用性の向上とその質の保証、この資格取得を申請する学生の学修継続力向上を目的としている。

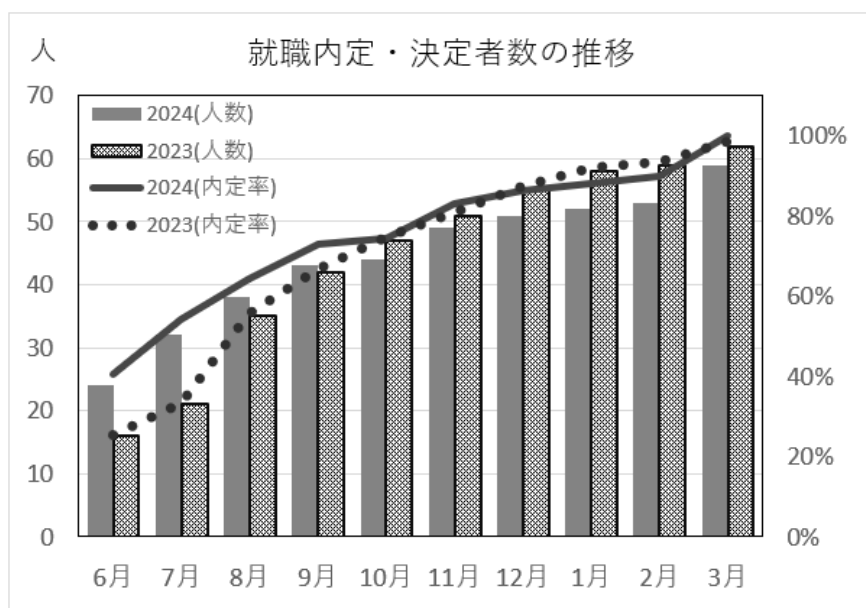
(2) 就職支援について

2025年3月の卒業生数は77人、そのうち59人が就職を希望し、59人が就職を決定している（4月17日現在）。就職率は100%である。なお文部科学省が令和7年3月14日に発表した資料によると、2月1日現在の短期大学生の就職内定率は84.9%であり（前年同期比0.8ポイント低下）、ライフデザイン学科の同時期の内定率は89.8%なので、それより高い。昨年に比べると就職希望者が4人少ないが、100%の就職希望者が就職を決めている。なお卒業生77人のうち、進学者は5人（大学編入4人、専門学校1人）であった。

令和6度は、前年度に比べて内定が早い時期に決まっており、9月には70%以上の学生が内定を決めていた。その分11月以降は増加率が低く、3月になって駆け込み的に数人が就職を決めている。この傾向は今年度も続くことが予想され、学生には早めの就職活動を勧奨する必要がある。

業種では、卸売・小売業が16人と最も多く、それに医療関係の14人が続く。それ以外にも製造業（4人）、不動産業（3人）など多岐に渡る。

図3. 就職内定（決定）者数の推移



※ 3月の値は、2024年度については4月17日現在の暫定値であり、2023年度については5月末日の最終確定値である。

(3) ライフデザイン学科における地域連携活動

① ライフデザイン実践演習について

ライフデザイン・ゼミナールⅠには「多様性時代のライフデザイン」をテーマに、聴覚・視覚障害についての学びが含まれているが、ライフデザイン実践演習(注:選択科目)ではこれを単なる学びで終わらせずに、主体的な関わりに発展させている。具体的には本学との包括的連携協定先の日本ライトハウス盲導犬訓練所と協働して令和7年3月2日(日)にボランティアデイを実施した。盲導犬を育成するには多くのボランティアの助けが必要であるが、そのボランティアのための交流会がボランティアデイである。ボランティアの様々な役割を理解した上で、交流会というイベントに於いて何が必要か、より楽しめるイベントにするにはどうしたらいいか等を主体的に考えなければならない。ライフデザイン実践演習は、いわゆる課題解決型学習である。学生はチャリティグッズの制作・フォトスポットの作成・記録係に分かれて作業した。当日はボランティア600人以上、犬も300頭近くが参加したビッグイベントとなった。なおボランティアデイは、日本ライトハウス盲導犬訓練所のスタッフ、他学部学生ボランティアや地域連携・研究推進センター等の職員など、多くの人々の協力を得て実施されたものである。

② 大阪市産イタリア野菜ブランド化への取り組み

J A大阪市が進めるイタリア野菜のブランド化・普及に向けた取り組みへの協力として、今年度はイタリア野菜を使ったレシピ開発に取り組んだ。11月にイタリア料理のシェフを招き、料理の試食を通してイタリア野菜の特性や調理法のポイントなどを学んだ。12月には圃場見学を行い、生産者から栽培方法などについて学んだ後、グループにて検討し試作を繰り返して4つの料理(イタリア野菜のかき揚げうどん、ビーツのケーキ、イタリアン餃子、イタリア野菜を使った中華味オムレツ)のレシピをまとめた。

令和7年1月22日(水)に「イタリア野菜レシピアイデア発表会」を実施した。本学科で学んだ食の知識や技術を深める良い機会となった。またこの活動の様子は4月発送のJ A大阪市広報誌「萌」に掲載され、大阪市平野区のイタリア食堂ちえるきおで提供された(令和7年4月末まで)。

③ 公民館子ども料理教室の開催

8月2日(金)に羽曳野市立陵南の森公民館で「夏休み子ども企画・お菓子作り教室」を開催した。学生は教室開催に向けて「小学生が作る夏のお菓子」をテーマにメニューを検討し、試作を通して子どもへの指導方法も考えながら2つのレシピ(ミルクプリン、マシュマロクリスピー)をまとめた。栄養的ポイントや調理方法などをポスターにして会場で展示発表した。

当日は材料分配や調理器具の準備・片付けなど教室運営全般に関わり、調理においては小学生とペアになって指導した。本学科で学んだ製菓の知識や技術を活用するだけでなく、予算や作業時間、公民館調理実習室の使用可能な調理器具、安全面など、多くの条件をクリアするための実践的な学びを通して、ジェネリックスキルが育まれた。

④ 児童養護施設の児童たちを対象にしたクリスマス会(料理教室・ゲーム大会)の開催

本活動は児童養護施設「高鷲学園」の児童たちを対象とした企画であり、児童の課外活動充実サポートプロジェクトとして、平成 29 年から実施している。当初は料理教室指導のみであったが、大学内で連携活動として発展し、今年度は夏学期に他学部学生によるボタジェ活動やドローン体験会などが実施された。ライフデザイン学科は冬学期にクリスマス会を開催することになり、それに先立ち 9 月 27 日（金）には「高鷲学園」職員に講話をしていただき、児童養護施設について学んだ。

12 月 14 日（土）に行われたクリスマス会では、料理教室とビンゴゲームを実施した。料理教室では、対象者年齢・人数・調理時間・予算などの条件の中で「楽しく作れる美味しいメニュー」をテーマに学生がレシピを考案した。学生は児童への調理指導の他、当日朝からの仕込み作業や料理教室の準備・後片付けなど運営全般も担当した。ビンゴゲームでは、景品やビンゴシートを学生が手作りし、既製品には無い温かみを感じてもらえるように工夫した。学生はクリスマス会の準備期間を通して、児童と楽しい時間を過ごすだけではなく、福祉や社会に対する意識を高める実践的な取り組みに励むことができた。

⑤ 12 大学連携 繊維製品の廃材を活用したアップサイクル作品のファッションショー

本活動は、関西でファッションを学ぶ 12 大学の学生と大学教員・研究者らが繊維製品を扱う企業と協働しながら行われた。その目的は、繊維製品によるゼロ・エミッションの実現に向けた情報発信である。アパレルメーカーや繊維業者などから提供された製品の廃材や古着を活用し、学生は 2 セットの衣服を制作した。9 月 12 日（木）、13 日（金）に京都文化博物館にて開催されたファッションショー「私たちの SDGs 2024～繊維製品の循環をめざして～」において学生自らがモデルとなり着用し、ランウェイで発表した。また、会場では、各大学が企画するワークショップも開催された。本学は、人型の台紙に廃材を切り貼りし、自分だけのファッションデザインを考えるワークショップを企画した。両日とも 10 名以上の一般客が訪れ、学生は交流を深めながらこの活動を通して学んだことを来場者に伝えていた。

また、同日に開催された企業トークショーでは、愛知県一宮市にある時田毛織株式会社様の発表の司会、および進行役を本学科学生が務め、学生トークショーにおいては、制作過程とその想いを発表することで会場を盛り上げた。なお、本イベントは、「繊研新聞」「京都新聞」などに広く掲載された。学生は、ファッションの倫理的課題のひとつである環境問題に対する意識を、日常生活で使用する衣服の制作を通して高めることができた。

⑥ 古墳・弥生時代の衣装制作の試みと古墳関連イベントにおけるワークショップの開催

基礎的な縫製の知識だけではなく、地域に根ざした文化を知ることを目的に、弥生・古墳時代における庶民の衣服「貫頭衣」を制作した。また、写真資料などから同時代の生活や文化を想像し、自由にアクセサリや装飾をデザインした。前年から引き続き行っているプロジェクトであるが、今年は羽曳野市の民間団体「はびきのまちづくりプロジェクト」から提供いただいた「はびきのタータン」を活用して、学生がデザインを考えた。その結果、学生の趣向を凝らした異なるデザインで 16 のコーディネートが完成した。これらの衣装は、7 月にあべのハルカスにて開催された「世界遺産登録 5 周年記

念『みんなもずふる5周年をお祝いしよう!』にて、教育学部の学生による「古墳音頭」を披露する際に着用された。また、9月21日(土)に古市駅東広場にて開催された「はびきのタータンレセプションパーティ」にて、「はびきのタータン」を使った作品が展示され、会場を盛り上げた。

なお、百舌鳥・古市古墳群世界遺産登録5周年記念事業として、8月17日(土)、25日(日)に、一般客を対象として「貫頭衣」とアクセサリー作りのワークショップをおこなった。このワークショップには学生が試作品制作から参加し、ライフデザイン学科の学びを地域に拡げる活動となった。

⑦ カラーユニバーサルデザインを活用した作品制作・展示、SDGs クッション贈呈

令和2年度より高齢者福祉施設「四天王寺きたやま苑」にて、学生がライフデザイン学科の授業で学んだ知識・技術を活かし、テーマに合わせた色や形を制作し展示する活動を実施している。本年度は「四天王寺たまつくり苑」から依頼があり入居者との遠隔交流、さらに施設内の見学及び入居者の方たちとの交流を実施した。

活動としては、「敬老祝賀会」のお祝いの品を制作した。ユニバーサルデザインの視点から、ピクトグラムをデザイン化し、五感の視覚効果だけでなく触覚(触り心地)も考慮して材料も肌に優しい素材を使用し、さらに高齢者特有のものの見え方を意識した色使いにした。この活動を通して、多様な色覚特性を持つ人によりわかりやすく、安心な社会づくりに貢献するためのカラーデザイン力を養うことができた。これらの作品は式典で展示された。また、車椅子で使用するクッションも制作し贈呈した。回収された利用者、職員たちの古着などを活用し、16個のクッションにアップサイクルした。

5. 終わりに

冒頭でも述べたが、ライフデザイン学科は実質5人の専任教員で運営している。四天王寺大学には10以上の委員会があるため、1人の教員が複数の委員会を兼任している。また和の精神では階段当番があるが、学生数や教員数に関係なく学科順に回ってくるため、教員数が少ないと負担が大きい。入学式や卒業式で学生が答辞等を述べる役割についても同様である。少ない教員数でも学務や学校行事等に対応できるよう工夫してはいるが、2026年3月には1名定年退職するため、更に教員数が減少する。2026年度にはそろそろ限界に達するだろう。

以 上

第4章 本学における仏教教育について

1. 基礎教育科目「和の精神」について

(1) カリキュラム上の位置づけとその課題

本学のカリキュラムにおいて「基礎教育科目」は、本学の建学の精神である聖徳太子の仏教精神を実践的に学ぶ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（1年次）、仏教の学識の基礎の修得と宗教的情操の体得をめざす「仏教概説」（1年次）を柱とし、これに人間存在のかけがえのなさを考える「現代社会と人権」を加えた、4科目6単位が必修科目となっている。なお、平成30年度の入学生以前の旧カリキュラムでは、基礎教育科目は「仏教Ⅰ（瞑想）・Ⅱ（写経）」「仏教概説」「現代社会と人権」の4科目6単位が必修であった。とりわけ「和の精神Ⅰ・Ⅱ」（計2単位）は、毎年度、大学・短期大学部の1年次の全学生1,000名以上がフォーマルウェアのスーツ（令和6年度から、従来の大学指定のオフィシャル・スーツの着用義務をとりやめ、本学が提示するスーツ着用基準をもとに学生が個々にスーツを購入することへ変更した）を着用し、学長を始めとして全教員とともに大講堂に会し、読経・瞑想・聞法（講話）・写経（後期のみ）・聖歌斉唱といった実践的な授業を行っている。これは規模的にも内容的にも、本学における特色ある科目の一つである。各学科専攻で行う専門的な学修を果実とすれば、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」のめざす人格の涵養はその根底といえる。

平成24年度から仏教文化研究所が設立され、学長のもと、主任研究員を中心に、数名の研究員が本学の仏教教育の方針や内容を策定し、宗教委員会の議を経て、企画立案・実施・点検を行う体制が整い、令和6年度で11年目を迎えた。下記に示す「和の精神 授業規律」「講話内容」「アンケート」等はその体制のもとですべて整えられたものである。

コロナ禍の中にあった令和5年度までは、1,000人を超える学生を大講堂に一堂に集めることに感染症予防の観点から大きな懸念があったため、「和の精神」を遠隔授業方式を併用する等の方法で実施していた。しかし、令和6年度では学生全員が大講堂にて対面で実施することに戻すことができた。もともと、本科目は令和6年度で大学と短期大学部を合わせて1,035名もの学生が履修して学ぶ超大人数授業であるため、実施する上での課題（資料の提示方法、音響、空調、出席・成績管理、個別指導のあり方など）も少なくない。そのため運営・管理には教育職員・事務職員の全学的な協力が必要であり、とりわけ授業実践の「道場」である大講堂内では各学科専攻の教育職員の積極的な取り組みが不可欠となっている。

(2) 大講堂内における指導体制

平成25年度の後期から、これまで明確とはいえなかった大講堂内における教員の指導の役割を検討し、下記のとおり明確化して、毎学期の宗教委員会、合同研修会などで周知徹底を図り、現在に至っている。

① 総責任者 学長

学長は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容・運営の全体の監督、教育内容・方法および運営の総責任者である。教育内容・方法および運営については、学長が仏教文化研究所に指導方針案の策定を指示し、宗教委員会の検討を経て決定するものとする。

②全体担当 仏教文化研究所研究員

仏教文化研究所研究員は、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の教育内容の進行・運営について、所定の指導方針に沿って主導的な立場で従事し、出席や授業態度にもとづいて最終的な成績評価を行う。

③上記の①②以外の全教員

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業は、全教員の指導によって行うものである。各学科所属の教員は、学科の学生に身近な教員として、主に堂内における私語・中座など授業態度の改善や静謐な環境の保持の面において、所定の方針および学科の取り決めに従い、注意喚起や個別指導に当たる。

④宗教委員

宗教委員は宗教委員会に学科の状況を伝えるとともに、委員会での決定事項を学科に伝え、学科長とともに学科での指導の在り方を取り決める。

(3)「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業中における授業規律について

仏教文化研究所において平成24年度に「『仏教』の授業規律」を策定し(平成24年度末・令和元年度末に一部改定)、平成25年度からは、毎年『履修要覧』に掲載している(下記参照)。以後、各学科専攻のオリエンテーションで学科ごとに指導の姿勢を示してもらうよう要請し、かつ学期初めに「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の冒頭に改めて教務部副部長(礼拝担当)より「和の精神 授業規律」を示し、学生に規律の自主的な遵守を求めてきた。

「和の精神Ⅰ・Ⅱ」は自他を尊重し、思慮深く、安定した人格を養うことが主眼であり、強制によって規律を守らせるのが本意ではなく、授業の主旨として、学生が主体的に自覚して上記の規律の遵守を心がけることの重要性を強調している。

基礎教育科目「和の精神Ⅰ・Ⅱ」授業規律について(節録)

(令和6年度より一部改訂)

礼儀を正して静穏な環境で自らを省み、自他を尊重し、思慮深い安定した人格を養うことが「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業の目的です。主旨を自覚し、下記の規律を遵守してください。

1. 単位の認定は、全授業回数のうち3分の2以上の出席を必要条件とする。写経の場合、全ページ自筆による書写記入済みの写経用紙の提出も必要条件とする。なお、以下の2・3・4の項目に違反する場合は出席を認めない。
2. 出席時の服装は、以下のスーツ着用基準に定められた服装を端正に着用する。

◆スーツ着用基準

＜スーツ、ジャケットとパンツまたはスカート＞

黒色、濃紺、チャコールグレーのいずれか一色の組み合わせで、無地のもの

＜カッターシャツ、ブラウス＞

無地またはストライプ
<ネクタイ（スーツの場合のみ）>
無地またはストライプ

<靴>

黒色または茶色で革製の短靴（スニーカー不可）または、フォーマルパンプス
※カッターシャツやブラウスについて、ビジネスシーンでは白色の無地が一般的である。

3. 入堂時には「聖典聖歌集」を所持していることを示し、授業中は常に携帯する。
4. 授業は午前 10 時 55 分開始である。開始前には入堂し着座しておく。
 - ・公共交通機関の遅延による遅刻は、公共交通機関の延着証明の提示により、やむを得ない遅刻と判断される場合にのみ入堂を認める。
5. 授業中は姿勢を正し、静寂を守り、実践に集中する。
6. 授業中の私語・通信機器等の使用は禁止する。
 - ・注意されたら、すぐに改める。
 - ・再三の注意にかかわらず改めない者については、授業妨害と見なし、改善が認められない場合は、欠席扱いとし、保護者にも教務部より状況を伝える。
7. 授業中の中座は原則として禁止する。
 - ・やむを得ずトイレ等を利用する者は、学生証を階段前の教員に提出する。
8. 心身の疾患など、やむを得ない中座の理由のある者は、事前に診断書などの証明書をもって学生支援センターに授業配慮申請を行うか、教務部教務課（礼拝担当）に申し出る。座席変更などの配慮を行う。
9. 私語・通信機器等の使用・中座等について、改善の意思がない場合は、「授業妨害」「建学の精神に反する行為」と見なし、その学期の「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の単位を不認定とする。

（４）和の精神Ⅰ・Ⅱにおける改善

入学して２年間を必修としていた「仏教Ⅰ～Ⅳ」が平成 24 年度から 1 年次の「仏教Ⅰ・Ⅱ」のみとなり、時間的には短縮化された。しかし、そのことによって教育内容が希薄とならないよう、これまでと同様に、その点に留意した授業計画を組んで「和の精神Ⅰ・Ⅱ」に継承している。「和の精神Ⅰ・Ⅱ」各科目の留意点、講話一覧は以下の通りである。

①「和の精神Ⅰ」（夏学期）

「和の精神Ⅰ」では、基本的にはこれまでの通り、「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」を基本として、授業を実施した。また、令和 6 年度は、先述のように対面で授業を実施しており、コロナ禍の前と同様に、読経および聖歌の指導・斉唱を再開した。

講話については、第 2 回目の授業での学長による「本学の『建学の精神』及び全体的な仏教精神に関する講話」を受けて、研究員による一貫性のある講話を基調に据えながら、将来

のキャリアと「和の精神」とのつながりを説く内容など講話の充実を図っている。また、初回の授業で本山四天王寺において開催される「授戒会」のオリエンテーションも行い、参加に向けての心構え等も指導している。この授戒会は、コロナ禍の前と同様に、本年度は四天王寺五智光院にて実施した。

「和の精神Ⅰ」で行われた講話は次の通りである（敬称略。なお、☆は仏教文化研究所構成メンバーである）。

<夏学期実施「和の精神Ⅰ」>

No.	日程	担当者（敬称略）	講 話／聖 歌
1	4/11	藤谷 厚生☆ 桃尾 幸順☆	受講ころえー授業規律に関して/礼拝説明 授戒オリエンテーション
2	4/18	須原 祥二（学長） 藤谷 厚生☆	『和の精神』で学ぶこと 『ウパーヤ』について 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞
3	4/25	杉中 康平☆ 伊達 由実	『和の精神』を学ぶ意義 「学修ポートフォリオの目標設定について」 「大学生活の心得」 聖歌＜新聖徳太子讃仰歌＞
4	5/2	桃尾 幸順☆	「読経概論・瞑想一心を整える楽しみー」 聖歌＜父母の歌＞
5	5/9	坂本 峰徳 （常務理事）	「建学の精神と聖徳太子」 聖歌＜み仏の言の葉の海＞
6	5/16	成田 由岐子	「学生生活とリスク社会について～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」 聖歌＜内なる仏＞
7	5/23	中田 貴眞☆	「学園訓ー礼儀について」 聖歌＜常不軽菩薩＞
8	5/30	上野 舞斗☆	「学園訓ー誠実についてー」 聖歌＜父母の歌＞
9	6/6	矢羽野 隆男☆	「学園訓ー和についてー」 聖歌＜池＞
10	6/13	南谷 美保☆	「仏像を知ろう」 聖歌＜稀有なるわれら＞
11	6/20	仲谷 和記	「薬物乱用の害について」 聖歌＜みめぐみの＞
12	6/27	原 祐子	「聖歌」について 聖歌＜芬陀利華＞

13	7/4	若松 正晃☆ 学生有志	「グローバル教育研修と和の精神」 聖歌＜精進＞
14	7/11	保健管理センター	「性感染症の予防について」 聖歌＜父母の歌＞
15	7/18	杉中 康平☆ 藤谷 厚生☆	「学修ポートフォリオの記録について」 夏学期を終えるに当たって 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞

②「和の精神Ⅱ」（冬学期）

「和の精神Ⅱ」は「和の精神Ⅰ」の「礼拝（瞑想）・講話・仏教聖歌の斉唱」に写経を加え、より実践的に仏教について学べるようにしている。これは、平成24年度から2年間の「仏教Ⅰ～Ⅳ」が1年間の「仏教Ⅰ・Ⅱ」に短縮されたのを受け、従来、「仏教Ⅲ・Ⅳ」ではもっぱら写経だけを行っていたものを、写経だけでなく、講話等も行うことにし、「和の精神Ⅱ」に継承されたものである。ただ講話の時間が写経の時間を圧迫しないように配慮する必要から、写経の時間を最低20分は確保すべく、講話は10分～15分ほどに短縮することとしている。

「和の精神Ⅱ」で行われた講話は次の通りである（敬称略。なお、☆は仏教文化研究所構成メンバーである）。

＜冬学期実施「和の精神Ⅱ」＞

No.	日程	担当者（敬称略）	講 話／聖 歌
1	9/26	藤谷 厚生☆ 仲谷 和記	「冬学期授業について」 「ウパーヤについて」 「写経の効果」 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞
2	10/3	麻野 稚弓	「写経の仕方・作法」 聖歌＜父母の歌＞
3	10/10	桃尾 幸順☆	「写経について」 聖歌＜みほとけは＞
4	10/17	上野 舞斗☆	「卒業生インタビューから考える 和の精神Ⅰ・Ⅱの意義」 聖歌＜稀有なるわれら＞
5	10/24	南谷 美保☆	「写経と『経供養』」 聖歌＜みほとけをしたい＞
6	10/31	亀井 縁・学生☆	「国際看護フィールドワークの学びについて」 聖歌＜四天王寺大学学歌＞

7	11/7	藤谷 厚生☆	「聖徳太子の教えと言葉」 聖歌＜人の世の＞
8	11/14	グローバル教育センター (学生・奥羽)	「海外体験実践演習から学んだこと」 聖歌＜四天王寺大学学園歌＞
9	11/21	若松 正晃☆	聖歌＜みめぐみの＞
10	11/28	矢羽野 隆男☆	「学園訓―誠実について―」 聖歌＜四恩の歌＞
11	12/5	和田 良彦 (副学長)	「人権について」 聖歌＜芬陀利華＞
12	12/12	上續 宏道 杉中 康平☆	「聖徳太子と福祉の心」 「学園訓のエピソード入力について」 聖歌＜陽はわれに＞
13	12/19	明石 英子 学芸員課程修了予定者	「短期大学部保育科 6 つの探究」 「学内展示について」 聖歌＜聖夜＞
14	12/26	中田 貴眞☆	「和の精神―花と暮らす―」 聖歌＜聖徳太子讃仰歌＞
15	1/9	須原 祥二 (学長) 藤谷 厚生☆	「終講にあたって」 「和の精神Ⅱのまとめ」 聖歌＜父母の歌＞

2. 共通教育科目「仏教実践演習」について

(1) 「仏教実践演習」の目的と授業展開

本科目は旧カリキュラムの基礎教育科目「仏教Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」(卒業必修科目)が、平成24年度改訂のカリキュラムで「仏教Ⅰ・Ⅱ」(同上)に圧縮されるのに伴い、旧Ⅲ・Ⅳで実践していた内容を行いたいという学生や、さらに深い学びを希望する学生のために、共通教育科目における選択科目(3セメスター以上配当)として設けた科目である。仏教実践の背景にある仏教の思想について考えながら、瞑想・写経の意義や実践の方法を説明し、「仏教Ⅰ・Ⅱ」、つまり、現在の「和の精神Ⅰ・Ⅱ」で学んだ実践行をさらに深めていくものである。

夏学期の水曜2限に1コマ、講堂において、聖徳太子像の掛け軸を掛け、読経・瞑想・講話・写経などを行い、聖歌斉唱を行わないほかは「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と同様の形式で実践的な授業を展開している。

(2) 授業内容

講話内容は、仏の智慧をめざす修養方法である六波羅蜜に関するものを中心に、日常生活での実践に有用と考えられる仏教の教えに関する講話を行っている。以下では各回の講話を掲げる（敬称略）。本科目の担当教員は、藤谷厚生、中田貴眞、西岡秀爾である（敬称略）。

＜各授業回の内容＞

No.	授業内容
1	瞑想、講話（仏教実践とは）、写経
2	瞑想、講話（大乘仏教の実践―六波羅蜜―）、写経
3	瞑想、講話（仏教実践としての施し）、写経
4	瞑想、講話（戒律を守ること）、写経
5	瞑想、講話（耐え忍ぶということ）、写経
6	瞑想、講話（精進努力について）、写経
7	瞑想、講話（瞑想について）、写経
8	瞑想、講話（仏教実践と智慧）、写経
9	瞑想、講話（瞑想の歴史）、写経
10	瞑想、講話（様々な瞑想）、写経
11	瞑想、講話（写経について）、写経
12	瞑想、講話（様々な写経）、写経
13	瞑想、講話（般若心経と写経）、写経
14	瞑想、講話（般若心経の世界）、写経
15	瞑想、講話（仏教実践の意義）、写経

3. 仏教教育に関するその他の取り組み

(1) 仏教文化研究所の活動

仏教文化研究所所長であった西岡祖秀学長により、平成 24 年度において主任研究員および研究員が任命された。研究所内には仏教教育センターが設けられ、研究所の主任研究員・研究員がセンターの構成員を兼務し、本学における仏教教育の内容・方法を検討し実施する体制が作られて現在に至っており、さらなる研究の充実を目指し、これまで積極的に活動を行ってきた。

本研究所の具体的な活動としては、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業計画の策定、堂内の全体指導および指導体制の検討、提出された写経の点検評価、仏教教育広報誌「ウパーヤ」の編集発行等である。広報誌「ウパーヤ」は、本学の「建学の精神」や仏教の教学を身近に感じ、理解を深めてもらうことを目的に年に二回発行し、大学・短期大学部の在学生・学園教職員および保護者へ配布するもので、令和 6 年度には 25 号・26 号を発行することができた。1 年次の学生には入学直後のオリエンテーションで配布し、「和の精神」（仏教教育）の涵養に役立てている。

特に「ウパーヤ」のトピックである「聖徳太子のゆかりの地めぐり」のコーナーでは、平成 26 年度から学生編員を募集して取材・執筆を依頼している。25 号・26 号でも引き続き学生編集員がウパーヤ誌上に学生ならではの観点で記事を執筆してくれた。今後も仏教に対する学生の興味関心を深める活動として継続していきたい。

（２）今後の展望

「建学の精神」を学部学科の学修のなかに具体化し、理想とする学生を世に輩出していくことは、私学の最も重要な目的であり、また社会的な使命でもある。本学でも「アドミッション・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「ディプロマ・ポリシー」の三つのポリシーにおいて、聖徳太子の仏教精神を各専門教育の根幹に据えた教育を展開していることを明記し内外に公表している。

これまでも、各学期初めのオリエンテーションや大学・短期大学部の 1 年次の「大学基礎演習」等の科目において、「建学の精神」に関わる内容を組み込むことを各学科に要請してきた。今後も、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」を体現する様々な取り組みや活動を紹介し、大学・短期大学部全体での「建学の精神」の浸透に励みたいと考える。

令和元年度から、「学園訓」を体現し、実践できる人材を育成することを目指して、それまでの「仏教Ⅰ・Ⅱ」の授業科目名を「和の精神Ⅰ・Ⅱ」と改め、その内容の充実と「建学の精神」の涵養を図るよう引き続き取り組んでいる。

今後も「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業では、仏教文化研究所メンバーによる仏教関係の講話を主軸にし、その本質の部分を大切にしながら、聖徳太子が帰依された仏教に基づく「和の精神」を核として学べるよう、さらなる授業の充実と工夫に引き続き努力していきたい。

第5章 学生支援センターが取り組む学修支援について

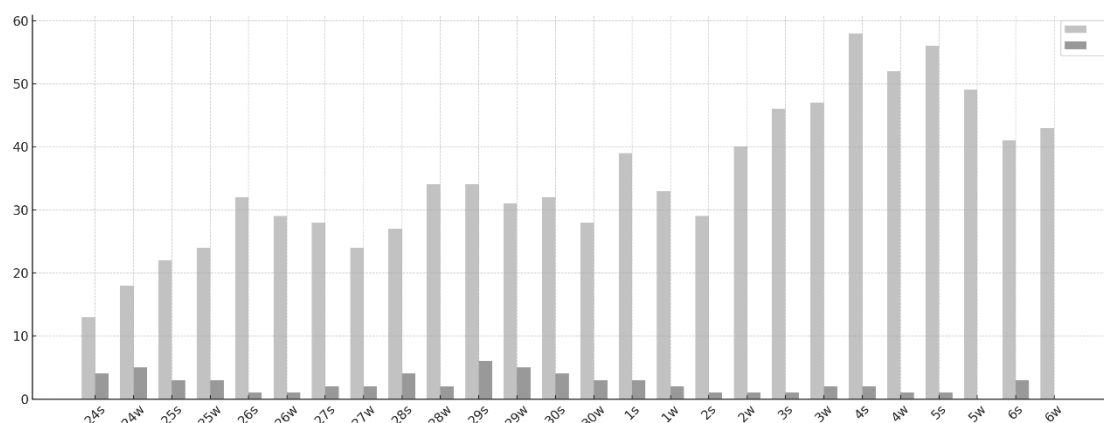
1. 障害のある学生への「合理的配慮の提供」の状況について

(1) 現状

令和6年度より全大学において合理的配慮の提供が法的に義務化された。本学ではこれまでに「授業配慮の提供」という形で、障害等によって他の学生と同じように学修機会を得られないケースについて対応してきたため、授業のことに 대해서는それをベースに制度を整え、「合理的配慮の提供」を行った（授業に関する「合理的配慮の提供」に関しては、本学では「授業配慮の提供」と呼んでいるため、以降授業に関する合理的配慮の提供は「授業配慮の提供」と記す）。従来の申請過程に対して、障害による症状と求める支援が妥当であるかを確認する「アセスメント面談」、学科・専攻・コースにおいて特にディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに照らして求める支援が授業の本質を変えることなく提供可能かを検討する「学科等協議」、フォローアップの実施などを「合理的配慮の提供」過程の中に新たに導入した。また、申請時期を早めることで、授業開始時に配慮の提供が間に合うようにした。授業場面以外の大学生活上の「合理的配慮の提供」に関しては、面談をしてニーズを聞き取り、対話の中で対応の方向性を決めていった。令和5年度まで「授業配慮の提供」を行っていたこともあり、比較的スムーズに「合理的配慮の提供」を行うことができた。

令和6年度の「授業配慮の提供」の特徴を知るため、令和5年度までの「授業配慮の提供」と経年比較することにする。図1は授業配慮の申請数の経年変化である。令和6年度より制度が変更されているため、前年度と純粋な数の比較はできないことに留意する必要がある。図2は学科別の授業配慮の申請数である。図3は障害別授業配慮の申請数の経年変化である。図3においては、日本学生支援機構の調査に合わせて障害区分を変更して集計した。

図1 授業配慮の申請数の経年変化



(注1)薄橙は4年制大学の学生、濃橙は短期大学部の学生である。

(注2)Sは夏学期、Wは冬学期である。以下の図表においても同じ。

(注3)令和5年度までは「授業配慮の提供」に対する申請数であり、令和6年度より「合理的配慮の提供」の枠組みの中での授業配慮の申請数になっている。

図1を見ると、近年、本学における授業配慮の申請数は増加していたが、令和6年度では前年度と比べると減少している。これは令和5年度までの「授業配慮の提供」の制度から「合理的配慮の提供」の制度への移行が影響していると考えられる。令和5年度までは授業配慮が提供されていたケースであっても、令和6年度より「合理的配慮の提供」の枠組みに該当しないケースがあった。それらのケースは、各学部において教育的な支援として対応を検討してもらった。そのため、令和6年度の授業配慮の申請数が減少したのかもしれない。

図2 学科別授業配慮の申請数（令和6年度）

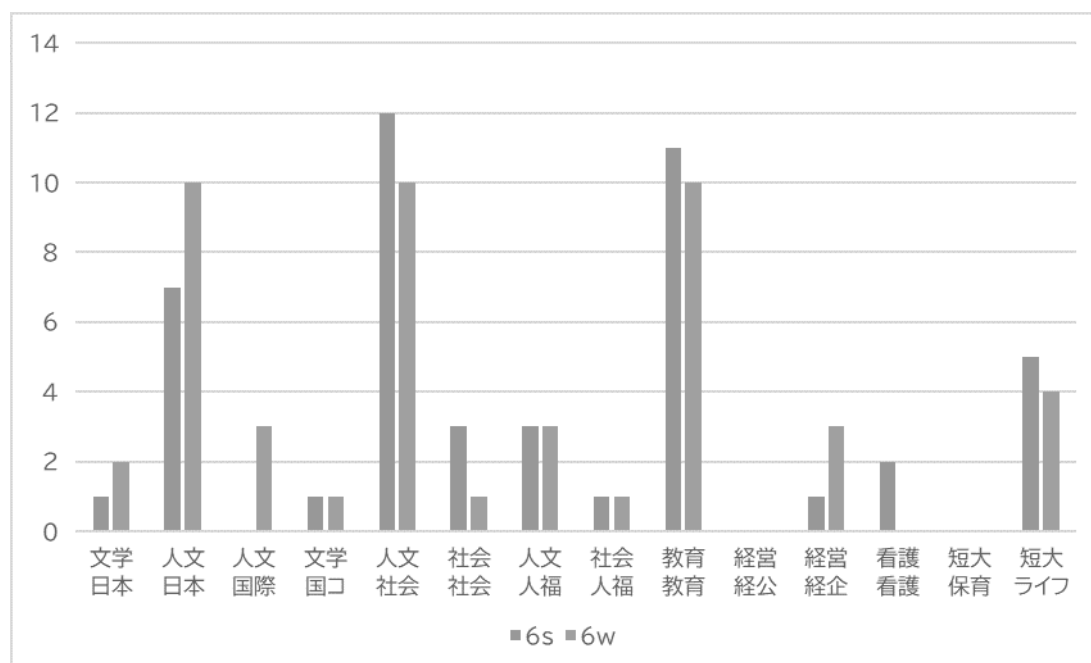
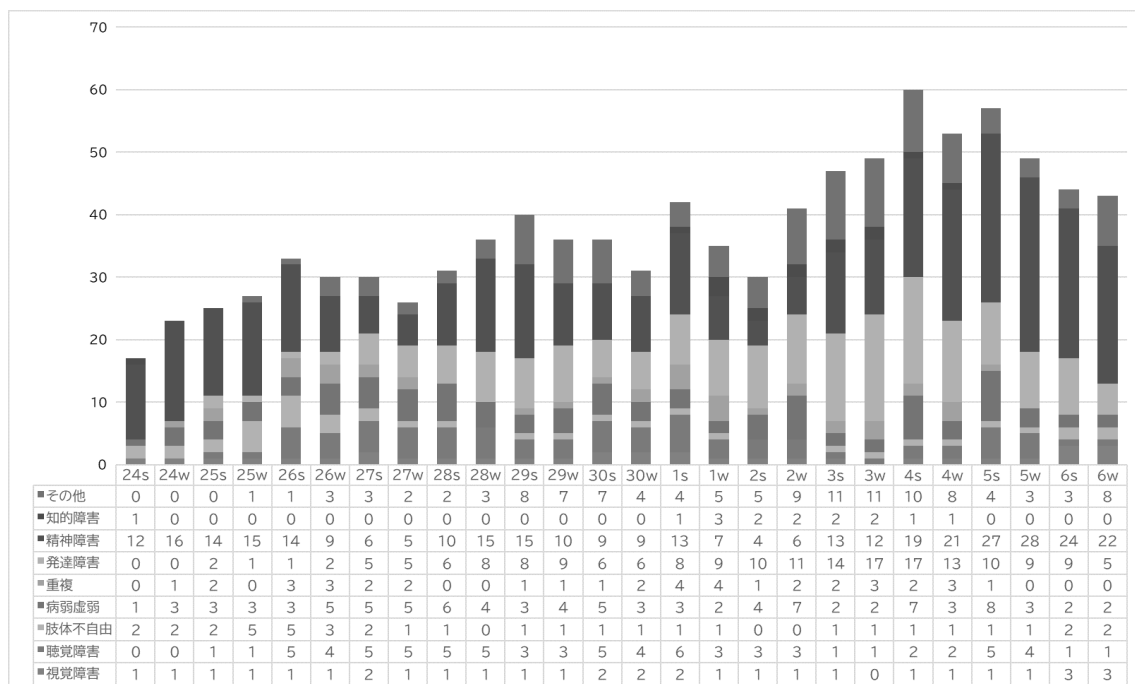


図3 障害別授業配慮の申請数の経年変化



(注1)知的障害とは軽度知的障害である。重複とは身体障害の重複者のことである。その他は他の障害区分に当てはまらないものとなっている。

(注2) 令和5年度までは「授業配慮の提供」に対する申請数であり、令和6年度より「合理的配慮の提供」の枠組みの中での授業配慮の申請数になっている。

図2においては、在籍学生数の多い学部において申請数が多い傾向が見られた。

図3を見ると、申請理由の割合として大きくなっているのは、精神障害(54.5%(R6年度夏学期)、51.2%(R6年度冬学期))によるもので、次に発達障害(20.5%(R6年度夏学期)、11.4%(R6年度冬学期))であった。日本学生支援機構の実態調査による令和5年度の全国の大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の割合を見ると、精神障害(32.6%)が最も多く、病弱虚弱(26.1%)、発達障害(20.1%)と続く。病弱虚弱のケースにおいては授業における合理的配慮を必要としない場合があり得ると考えられ、本学において授業配慮の申請割合は少なくなったと考えられる。

(2)課題

令和6年度6月に学生支援委員に取ったアンケートによって授業における「合理的配慮の提供」に関する課題が見えてきた。まず、授業担当者と学生との間で建設的対話がうまくいっていないケースが見られた。また、一方的に学生から希望する支援内容についてメールやIBU.netで授業担当者に連絡があるだけで、そこからの対話が進まないというケースや、出席の扱い方に関する対話の不足による学生の困惑が生じるケースが報告された。これらに関しては、学生が合理的配慮の理念を理解し、実行する努力をすることはもちろんだが、一方で本学では精神障害の申請者が多いことから、その障害によってそれらの実行が難し

いことも考えられる。学生の特性に合った合理的配慮の過程における支援を検討することも視野に入れたい。また、授業担当者も声掛けするなど対応について改善する余地があると考えられる。個別の授業担当者だけで対応できない場合は学科・専攻・コースで対応することや、学生支援センターと協働するなど、様々な手段を取っていくなど体制を整えることが必要であろう。

そして、大学は教育機関であるため、合理的配慮の提供だけでなく、教育的支援の提供が必要なケースがある。例えば、対人不安による過度の不調が生じるためグループワークを避けてほしいという配慮希望に基づいて環境調整をする一方、将来社会人となり就職を希望する場合は、就職活動や会社での人間関係の形成を見越して、人と関わる機会を大学で少しずつ持つことも必要な場合がある。今後、合理的配慮の提供と教育的な支援の提供の両輪を考えていく必要があるだろう。

2. ピアサポーター、リメディアル教員等による学習・生活支援の状況について

(1)現状

学生サポートフロアの利用者数については表 1 に示した通りである。休暇中以外は累積で毎月 500 名程度の学生が利用していた。総数で見ると、昨年度から 81 名の利用者が増えている。

表 1 学科別利用者数

	文学部		社会学部		教育学部					経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教学	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	49	19	195	11	103	48	6	70	4	0	34	3	0	542	4	71	75	617
5月	57	31	178	10	132	38	11	89	12	0	29	0	0	587	44	61	105	692
6月	58	34	165	19	64	19	8	66	2	0	28	0	0	463	6	14	20	483
7月	78	33	193	38	153	33	5	81	5	0	32	0	1	652	36	3	39	691
8月																		
9月	38	13	81	31	43	11	3	37	0	0	8	0	0	265	0	2	2	267
10月	103	53	161	58	136	35	1	99	2	1	34	1	0	684	0	13	13	697
11月	60	43	147	52	102	27	0	61	0	2	23	0	0	517	4	0	4	521
12月	76	42	187	61	110	12	4	61	0	0	31	0	0	584	9	0	9	593
1月	48	31	102	29	72	17	8	38	0	4	25	3	0	377	0	0	0	377
2月																		
3月	11	7	12	10	21	8	6	1	0	0	1	0	0	77	0	1	1	78
年間計	578	306	1421	319	936	248	52	603	25	7	245	7	1	4748	103	165	268	5016

それらの利用者の中で相談対応になった学生数を表 2、表 3、表 4 に示した。ピアサポート活動で相談対応した数よりも、教職員が相談対応した利用者数の方が多かった。教職員は決まった時間帯に常時在席しているため、利用しやすさがあると思われる。一方、ピアサポートでの相談対応は予約制になっているため、すぐ対応してほしいときには利用しづらいのだろう。

表2 ピアサポート活動の中での相談対応数

	文学部		社会学部		教育学部					経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教学	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	0	0	3	1	0	0	0	13	1	0	11	3	0	32	0	0	0	32
5月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6月	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
7月	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
夏学期	2	0	3	1	0	1	0	13	1	0	11	3	0	35	0	0	0	35
9月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10月	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
11月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12月	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	4
1月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
冬学期	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	5	0	0	0	8
年間計	6	1	3	1	0	1	0	13	1	0	11	3	3	40	0	0	0	43

表3 リメディアル教員の対応数

	文学部		社会学部		教育学部					経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教学	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	4	1	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	13	0	0	0	13
5月	5	1	3	0	2	0	0	0	0	0	5	0	0	16	0	0	0	16
6月	5	0	9	0	3	0	0	0	0	0	4	0	0	21	0	0	0	21
7月	10	0	8	0	3	0	0	0	0	0	4	0	0	25	0	0	0	25
夏学期	24	2	27	0	9	0	0	0	0	0	13	0	0	75	0	0	0	75
9月	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	4	0	0	0	4
10月	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	12	0	0	0	12
11月	1	0	8	0	1	0	0	0	0	0	4	0	0	14	0	0	0	14
12月	3	0	6	0	2	0	0	0	0	0	6	0	0	17	0	0	0	17
1月	2	0	7	0	1	0	0	0	0	0	3	0	0	13	0	0	0	13
冬学期	9	1	23	0	6	0	0	0	0	0	21	0	0	60	0	0	0	60
年間計	33	3	50	0	15	0	0	0	0	0	34	0	0	135	0	0	0	135

表4 アプローチ要員の担当職員対応数

	文学部		社会学部		教育学部					経営学部		看護学部	その他	大学合計	短期大学部		短大合計	合計
	日本	国際	社会	人健	教小	教英/英小	教健	教学	教幼	経公	経企	看護			保育	ライフ		
4月	10	3	22	2	15	5	0	12	0	0	12	0	0	81	0	7	7	88
5月	13	13	35	7	16	2	0	8	0	0	8	0	0	102	2	3	5	107
6月	13	13	29	11	5	4	2	12	0	0	10	0	0	99	0	1	1	100
7月	13	10	20	15	14	6	0	6	0	0	10	0	0	94	0	1	1	95
夏学期	49	39	106	35	50	17	2	38	0	0	40	0	0	376	2	12	14	390
9月	7	2	13	9	9	3	0	5	0	0	3	0	0	51	0	0	0	51
10月	11	24	27	23	16	4	0	9	0	0	7	0	0	121	0	8	8	129
11月	11	14	31	11	13	2	0	4	0	1	10	0	0	97	0	3	3	100
12月	3	6	8	6	9	0	0	6	0	0	5	0	0	43	0	0	0	43
1月	6	6	14	4	12	2	0	3	0	0	5	0	0	52	0	0	0	52
2,3月																		
冬学期	38	52	93	53	59	11	0	27	0	1	30	0	0	364	0	11	11	375
年間計	87	91	199	88	109	28	2	65	0	1	70	0	0	740	2	23	25	765

ピアサポート活動はコロナ禍によって活動できない期間があり、その間に活動の仕組みが失われたことで、新たに活動を構築する段階になっている。令和6年度は、円滑な活動をするための土台作りを主に取り組んだ。まず、ピアサポーター同士の交流を積極的に行った。そして、幹部のミーティングを定期的に行った。これらのことによって、集団での活動が潤滑になってきたと思われる。そして、学祭で屋台を出したり、プレエントランスガイダンスで相談対応したりするなど、活動の幅を広げた。これらのことに学生支援センターも積極的に支援した。ともにアイデアを出したり、相談に乗ったり、声掛けするなど、常に活動のバックアップを行ったことで、学生が安心して活動できる環境が作られてきている。一旦失われた活動の基盤が整いつつある。

リメディアル教員等による学習・生活等支援は、相談室や保健センターと連携しながら支

援を行っている。利用者は出席や課題、学習へのモチベーション等の支援を受けることで、学修や大学生活を安定してできており、単位取得や出席状況がおおむね問題のない範囲に収まっている。また、学生サポートフロアという場所が、学生同士で安心してかかわって過ごせる居場所として機能しており、空き時間をここで談笑しながら過ごしたり、学生間で助け合いをしたりする姿が多くみられるようになっている。今後も引き続き見守りつつ、必要な支援を提供していきたい。

(2)課題

ピアサポート活動については、新たな活動内容や集団内での協議のしかたなどの仕組みについて整えていくことが必要だろう。コロナ禍で一旦失われたため、それらを再構築し、安定した運用ができるようにしていきたい。

そして、学生サポートフロアを利用する学生数が増えてきた。3、4 回生の学生については、学生自身でできることは自分たちの力できるように働きかけ、自立を促す部分も必要になってきている。教職員で整える部分と、学生自身が自分たちの力で成し遂げていく部分のバランスを、学生の様子を見ながら変えていく働きかけが必要となるだろう。

また、学生サポートフロアと学科・専攻・コースとの連携が十分ではない。学生を支援する際に相互の協力や情報共有は不可欠となる。それをどのように構築するのかについても考えていかなければならない。

3. 次年度に向けて

次年度は合理的配慮の提供が開始して 2 年目に入り、申請手続きや対応の仕方などを落ち着いてできるようになると思われる。一方、制度の細かな部分に関する理解のズレや不一致が残っているため、その部分を解消していきたい。

ピアサポートの活動は昨年度に比べて向上してきている。学生同士の交流がすすみ、相互で協力しながら活動できるようになってきた。学生のモチベーションが上がってきているため、今以上に活動が充実するよう支援を行いたい。

学生サポートフロアにおいては、支援を必要とする学生が適切に支援を受けられるよう、また、安心して大学生活を送ることができるよう、各所と協働して引き続き活動をしていきたい。

第7章 SD活動の取り組みと今後の課題

<FD・SD研修会の実施について>

- [趣 旨] 少子化に伴い、これからの大学が生き残るために、教員・職員は何を意識し行動する必要があるか、教職員が考えるこれからの大学ビジョンの意思統一及び意識向上を目的に、研修会を実施した
- [参加数] 合計 267 名（教員 163 名/職員 104 名）
- [内 容] 石渡 嶺司 氏（大学ジャーナリスト）を招聘し『これからの大学が生き残るためには～大学ジャーナリストの現状分析と提言～』を講演。
- [総 括] オープンキャンパスや広報活動に関する具体的なアイデアや改善提案を挙げ、広報活動や学生募集に関連する業務について、より具体的かつ実行可能な施策を再確認できた。また、この機会に、学校の全教職員が意識を統一し、実行に移すための指針を共有することができた。

四天王寺大学・四天王寺大学大学院・四天王寺大学短期大学部 ファカルティ・ディベロップメント委員会規程

- 第 1 条 この規程は、四天王寺大学、四天王寺大学大学院および四天王寺大学短期大学部（以下「本学」という。）ファカルティ・ディベロップメントの企画立案事項の審議・推進を図ることを目的として、ファカルティ・ディベロップメント（以下「FD」という。）委員会（以下「委員会」という。）を設ける。
- 第 2 条 委員会は、第 1 条の目的を達成するために、次の事項について企画立案し、FD 活動の推進にあたる。
- (1) 授業内容、方法および、評価に関する事項
 - (2) 授業の改善に関する事項
 - (3) その他、FDの目的達成のために必要な事項
- 第 3 条 委員会の委員長を高等教育推進センター長とし、他の委員を次のように構成する。
- (1) 高等教育推進センター副センター長（委員長を補佐し、委員長に事故ある場合は、その業務を代行する）
 - (2) 学科長が学科・専攻所属の専任教職員就業規則に規定された教育職員、特別任用教員および有期・無期職員就業規則に規定された特別任用教員と協議の上、選任した委員
 - (3) 高等教育推進課長
 - (4) その他必要に応じて委員長が任命する委員
- 第 4 条 委員は、学部学科等の代表として委員会に参画し、全学的見地ならびに学部学科等の特性に応じて、委員会で審議された結果を学部教授会で報告する。また、必要に応じて学部の意見を集約したものを委員会で報告・審議する。
- 第 5 条 委員の任期は 1 年とする。ただし再任を妨げない。
- 第 6 条 委員会は委員長がこれを招集して、その議長となる。
- 第 7 条 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の本学教職員に委員会への出席を求め、その意見を聴くことができる。
- 第 8 条 この規程の事務は、高等教育推進センターが所管する。

附 則

- 1 「学生アンケート委員会規程」は平成 18 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 「学生アンケート委員会規程」は平成 19 年 3 月 31 日をもって廃止し、「ファカルティ・ディベロップメント委員会規程」を平成 19 年 4 月 1 日より施行する。
- 3 この規程は、平成 20 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 4 この規程は、平成 22 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 5 この規程は、平成 25 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 6 この規程は、平成 27 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 7 この規程は、平成 30 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 8 この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から一部改正し施行する。
- 9 この規程は、令和 3 年 8 月 1 日から一部改正し施行する。

スタッフ・ディベロップメント委員会規程

(目 的)

第 1 条 この規程は、四天王寺大学大学院、四天王寺大学および四天王寺大学短期大学部職員としての資質の向上を図り、もって大学経営および大学改革を推進することを目的として設置されるスタッフ・ディベロップメント（以下「SD」という。）委員会（以下「委員会」という。）の運営等に関し必要な事項を定めるものとする。

(組 織)

第 2 条 委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 事務局長
- (2) 総務課長
- (3) 人事課長
- (4) 教務課長
- (5) 就職課長
- (6) 学生支援課長
- (7) その他事務局長が必要と認める者

2 副学長は、必要に応じてSD委員会に出席する。

(委員の委嘱)

第 3 条 前条に定める委員は事務局長が任命する。

(委員長)

第 4 条 委員長は、事務局長がこれにあたる。

2 委員長は、委員会の会議を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名する委員がその職務を代理する。

(委員の任期)

第 5 条 委員の任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

(審議事項)

第 6 条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) SDの企画立案に関する事項
- (2) SDの推進計画に関する事
- (3) SDの実施に関する事
- (4) その他SD推進に必要な事項

(委員以外の出席)

第 7 条 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の者の委員会出席を求め、その意見を聞くことができる。

(所掌事務)

第 8 条 この規程に関する事務は、人事課が所管する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

令和 6 年度
四天王寺大学 四天王寺大学短期大学部
F D ・ S D 報告書

編集・発行 四天王寺大学

ファカルティ・ディベロップメント(FD)委員会
スタッフ・ディベロップメント(SD)委員会

住 所 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

T E L 0 7 2 - 9 5 6 - 9 9 5 2

F A X 0 7 2 - 9 5 6 - 3 8 9 1

E-mail kyomu@shitennoji.ac.jp